

60-1263



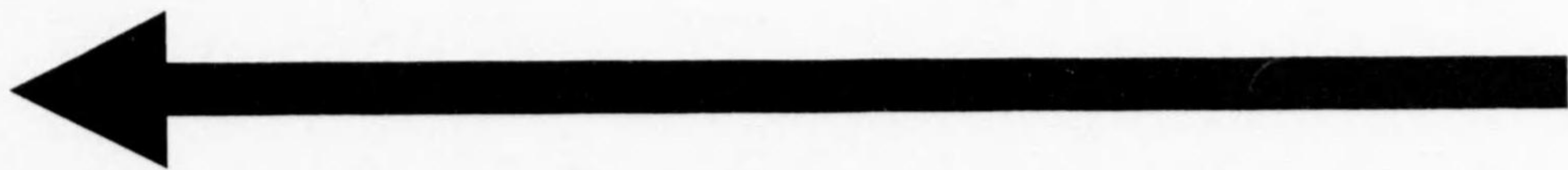
1200501272684

60

63



始



247822

實驗漢方醫學叢書 1. 鍼灸編

鍼灸と醫方



久米 嵩 著

東京 春陽堂 發行



60-1263

# 實驗漢方醫學叢書

鍼灸編

はしがき

「吾道は一以て之を貫けり」と、是れ孔夫子が其得意の自覺を曾子に告げ子貢に語られた所以なりとす。一元即多元、一氣即萬有、一毒即萬病と云ふを知れる乎。一元一氣一毒の動靜する所以の理を究極して、「一は二を生じ二は三を生じ三は萬物を生ずる」が如く演繹するが夫子の所謂我道である。斯道は用ひて以て己を治むるは則ち人を治むる所以となる。故に能く其身を修むれば則ち家を齊へ國を治め天下を平にする所以ともなる。彼の「階前萬里」の達觀も能く斯道の體得に存す。而して治國的要具たる政事教育醫治乃至軍備財用に施し、其行ふ所として通せざる所なきは適々以て其理の歸一より斯道が以て之を一貫するを知るに足らん。愈々用ひて益々盡くる所を覺えぬ。實に廣大無邊なるは斯道の需要でない乎。而して此一は所謂劃一の一でないから融和の味があり應變の妙もある。故に「君子は器ならず」とこそ云へ圓轉滑脱して其行詰る所がなく、一綱を引けば萬目が擧げらる。誠に無上に重寶なるは斯道なる哉。而して其收穫の成果は利用厚生。

はしがき

物々に即いて之を研き個々を捉へて之を究め、之を歸納して式を作り型を鑄るが科學の本能である。科學は個性を啓發し専門に偏倚し其製表は細を穿ち且つ詳を極むれども、枝葉に走つて根幹を遺れ其樹木の全貌を概見するに苦しむ。例へば鳥の研究に羽毛を知つて鳥が居す鷺の研究に長足を知つて鷺を見ぬ、羽毛を知り長足を知るが鳥や鷺を研究する目的ならんや。故に同一事物を取扱ふに其方面を異にせば同一結論に達せぬは、猶ほ平行線が未來永劫に相逢相遇ふの期なきが如し。是れ綜合に缺如して本體を忘れたる者、乃ち之を衆盲が象を摸すると謂ふではない乎。例へば一流の博士が相互に腦漿を絞り懸命に心血を濺ぎ、長年月を積み老の將に至らんとするをも忘れての研究振りは恐縮の至りなれど、年々歳々論難辯争してゐる脚氣病因の發見が猶ほ未だ認めぬ。温故を度外する科學は誠に氣が永いに痛感せずには居られぬ。二十年の日子を費して春秋の日蝕算出に没頭したる洋人の特長も思はれて單純低腦さが氣の毒である。昨日迄六〇六號の創見に驅徴の福音を得たりとて狂喜歡呼した醫界が、今日は此注射藥液が菌毒内攻の媒介たる結果に氣付いて落膽失神せしとかや。されば今日推獎する所の保健的滋養物が又明日は促死的有害の品類ならざるを知らんや。之を研究の進歩と謂ひ主觀的信仰を空理と嘲笑するが其客觀的崇拜の空論の囂々たる綜合歸一せぬを罵倒せられぬ乎。嗚呼科學的成品の憫むべき最後を如何にせん。

徳川幕政三百年の太平は國民を箱入娘化した。維新當初の指導者が「目に物見せる」科學に眩惑して、主觀的本尊を棄て拜洋に改宗せしは、箱入娘が開放されて世間の誘拐を嬉しむに宛も似たりや。之が爲に指導階級は自主の腦力を喪失して政事に經濟に教育に醫學に乃至良俗美風を迄、擧げて悉皆自家の寶器を抛ち他

の瓦石に垂涎し長短を擇ぶに違もなく、一より十一迄移入し鶉呑みにし中毒の證狀が顯然たりと雖も猶足れりとせず、科學ならねば夜が明けぬ底の陶酔振りを發揮し之を實際化する。國粹尊重の説、破邪顯正の論など耳を傾け枉を正すもの指導者流には曉星とある。上の爲す所は下必ず之より甚しき者がありとこそ、上下が狐憑的五十一年の久しき現下の行詰に其認識不足の確證を與へられた。正理も道義も天が定まらねば時勢には勝たれぬ。九、一八事變の警鐘あるに拘はらず、惰力を恐しいもの、多數の軟派は猶ほ春眠曉を覺えず、甚だ日米親交の殘夢に憧憬たるは如何。思想混亂より無定見に墮した結果はお歴々の博士連が京大に於ける無意義の醜紛擾をも平氣で演じてゐる。

國産和紅が嘗て其品質の優良なる世界第一と稱揚せられたるに、廉價の洋紅に押されて今は其影さへ甚だ稀薄な狀況に瀕してゐる。是を優。敗。劣。勝。と申すべき乎。昭和御即位盛典の御調度は總て國産愛用の御主旨に基づかれた時に、此の和紅の製造が極めて貧弱なるに見驚きて、鶉飼保存の例に倣ひ製紅をも加護せねばならぬと云ふ善い噂の風聞も其後果して如何に成行しや。特殊な國産的國産にして踵を接して漸次に亡び行くものが澤山にある、豈管和紅のみならんや。其當業者が困難と戦つて微々乍ら其命脈を保つてゐれば、何時しか芽の萌出づる機運にも際會するであらう、其が中に尤も憐を留むる者は漢方醫道の絶滅である。同化せる皇漢醫方が二千年來濟世救民の公益を盡したる功績は史蹟に顯著なる所と爲す。然るに法令に依て之を廢止したるは、是も明治初期の當路が無情なる認識不足の其一端である。近頃名を皇漢に托して開業する醫師も此處彼處に擡頭してゐるが、其純粹なる漢方先生は全國に擡指するに過ぎぬ。又之が使用せし草根本皮も

採藥する者は副業を失ふに依り絶無となる。年々歳々山野に可惜空しく朽ち果つる國產藥物を經世の志士は何と見る乎。若しも機運が漢方復興に至れば採藥使を何處に求むる乎。又深淵なる漢方醫道の學理を何人が傳ふる乎。

明治の盲政に辛うじて虎口の厄難を脱したるは漢方醫道の鍼灸科の存續と爲す。而も之が近來愈々隆昌に赴くは國家濟民的洵に珍重の極みである。殊に怪訝に堪へぬは洋人をして後に瞠若せしむるに足る、優秀なる技能の誇りとすべき鍼灸醫道同人等が、鍼灸の科學化を唱道して内外に諂言を振翳すは、誠に無意義にして識者は以て苦々しう屑しとせぬ所である。

既に聯盟とも絶縁して日本人が固有の勇氣を發揮したからには、洋白に對して何の遠慮もあるまい、何の會釋も要るまい。科學中毒を療治するは科學萬能を拋棄するより捷徑なるはあるまい。

「道同じからざれば相爲に謀らず」と先哲は垂教してゐるではない乎。東西兩洋各自に適應なる道を迎れば御互に善い。殊に日本は日本特殊の固有の坦々たる皇道を濶歩すれば尤も良い。

春陽堂同人は頗る義氣に富まる。曩に漢方醫學に關する一輯を出版せられ漢方醫道の鼓吹に任せられ、又本草に關する雜誌を發刊せられて斯道を益するは亦以て多とするに足る。今茲漢方醫學第二輯に着手せらる、誠に篤志と謂はねばならぬ。而して予に鍼灸醫學の編纂を囑托せられ、且つ曰はるゝに「可成確乎しつかりした者にして欲しい」と。

茲に於て予は寡聞淺學を顧みず昭和七年十一月より机に憑り稿を起し鐵筆を走らし日夜孜々として之に従

事し漸く一編を成せり。予や齡は既に古稀に近く、醫道を研鑽するは已に四十有餘年、或は古書を譯出し或は備忘録より抽拔し、或は私見を吐露し漸く以て之が責を塞ぐのみ。其瑕瑾缺陷の如きは則ち大方の鉄鉞に委すべく、此著は鍼灸受験諸士の準備に相應はぬかも知れぬが、既に開業實務に鞅掌せらるゝ諸君には聊か裨益あれかしとは老人が婆心の存する所である。

昭和八年六月末

著者誌す

鍼灸編目次

第一章 總 說

- 第一節 鍼灸の司命……………一
- 第二節 醫道と信仰……………四
- 第三節 鍼灸の威力……………九

第二章 醫道の大意……………三

- 第一節 醫道は天理に基く……………三
- 第二節 天地萬有生成の序次……………五
- 第三節 人類は靈長なり……………八
- 第四節 醫道と政道とに二致なし……………三
- 第五節 生命と肉體と其養生……………五
- 第六節 中心の確立は心身の健全……………〇
- 第七節 真理の兩方面……………三

目次

第八節 道と術と……………二七

第三章 受病の次第……………三六

第一節 總 說……………三六

第二節 外 因……………三六

第三節 內 因……………三六

第四節 不内外因……………三六

第五節 結 論……………三六

第四章 内臓の機能……………三五

第一節 概 說……………三五

第二節 素問靈蘭秘典論抽出……………三五

第三節 素問六節藏象論抽出……………三五

第四節 靈樞本輸篇抽出……………三六

第五節 素問金匱真言論抽出……………三六

第六節 素問陰陽應象大論抽出……………三六

第七節 靈樞本神篇抽出……………三七

第八節 素問經絡別論抽出……………三七

第九節 素問五運行大論抽出……………三七

第十節 靈樞決氣篇抽出……………三七

第五章 診察の心得……………三六

第一節 總 說……………三六

第二節 四 診 概 要……………三六

第三節 望 診……………三六

第四節 聞 診……………三六

第五節 問 診……………三六

第六節 雜 診……………三六

第七節 脈 診……………三六

第八節 附 說……………三六

第六章 治病の指針……………三四

第一節 治病に法あり……………一四三

第二節 治療の大綱……………一四四

第三節 病に傳移あり……………一四五

第四節 治法の種別……………一四六

第五節 治法の梗概……………一四七

第六節 藥物の用所……………一四八

第七節 配劑の大意……………一四九

第八節 五藏と五味との關係……………一五〇

第九節 外科的療法……………一五一

第七章 經絡の循環……………一五二

第一節 經絡概說……………一五二

第二節 六經の辨……………一五三

第三節 手太陰肺經……………一五七

第四節 手陽明大腸經……………一五九

第五節 足陽明胃經……………一六一

第六節 足太陰脾經……………一六四

第七節 手少陰心經……………一六八

第八節 手太陽小腸經……………一七二

第九節 足太陽膀胱經……………一七九

第十節 足少陰腎經……………一八六

第十一節 手厥陰心包經……………一九一

第十二節 手少陽三焦經……………一九五

第十三節 足少陽膽經……………二〇〇

第十四節 足厥陰肝經……………二〇六

第十五節 奇經八脈篇總說……………二一三

第十六節 附 說……………二一五

第十七節 骨 度 篇……………二二七

第八章 治病の葉……………二二八

第一節 醫師の心得……………二二八

第二節 患者の心得……………二二九



第三節 刺鍼の心得……………二七六

第四節 炷灸の心得……………二八一

第五節 上部の病……………二八七

第六節 中部の病……………三〇四

第七節 下部の病……………三二三

第八節 緩治病……………三五五

第九節 急需病……………三四一

第十節 婦人病……………三四九

第十一節 小兒病……………三五四

第十二節 瘡瘍病……………三五九

第十三節 雜症……………三六六

第九章 結

論

第一節 吾人の生命……………三七四

第二節 飲食は如何にして此身を養ふか……………三七五

第三節 不易と變易との天則……………三七五

第四節 差別は真理の半面……………三七七

第五節 常理は中和を尙ぶ……………三七八

第六節 食物と藥味……………三七九

第七節 人文の變遷……………三八一

附 錄

漢方醫道入門玄理原病式……………三八三

藥種量衡比較概表……………三九三

# 實驗漢方醫學叢書

漢方醫道研究所長鍼灸士 久 米 崑 述



## 第一節 鍼灸の司命

鍼灸の皇漢醫道に於ける地位を現代語にて言へば、化學的藥劑療法に對し、理學的外科治法として最も重要なる司命を帯びてゐる。

少し古醫道の書籍を涉獵すれば、疾病に對する鍼灸の記載が八九分通りを占めてゐる。其豊富さに鑑みて如何に鍼灸が重要視せられたか推想せられるであらう。而して病の原因、病の證狀、病の情勢などが徹底的に會得せられ隨て診斷を誤らず、熟練せる指頭に依り鍼理を適用すれば則ち其病理の教ふる儘に、現状の

患部は固より疾病に關する經絡の要穴に施術して其病根をも平快し得られるは今猶ほ大衆が熟知する所である。乃ち結果より原因に及ぼす療法にして其効果の迅速に且つ偉大なるは誠に驚嘆するの外はなく、藥液が胃腸の間を紆餘曲折して患部に到達するの比ではない、(藥物が急症に對しての峻劑は此限りにあらず)。神經痛は固より腦疾患でも胃瘳攣でも婦人病の如き迄も、初發と慢性とは時間の問題にして必治し得る司命は刺鍼が制してゐると云ふも決して誣言ではない。

炷灸に至つては教へさへすれば素人にも容易に、然も簡單に實施せられ、導引法や按摩法と共に、我醫道の一分科たるに過ぎぬ、而して其効果の顯著なるは實に驚異措く能はざらしむる者がある。如何に洗心沈思して之を研究するも現代の科學的には逆でも説明が與へられぬ。故に諸家は神秘なりとまで甚く頌贊してゐる、例へば十年來の結膜の目腐りが耳に灸して而も唯一回にて之を全治し、雞目が手指に灸して愈え、盲腸炎に肘尖に灸して快くなるなどの効力は、實に吾人が淺學凡才では如何に苦心焦慮しても到底満足に理解を與へられぬ、唯「治するから灸する、灸するから愈える」と云ふより外に適當な言葉の持合せがない。

近頃灸治の科學的研究に没頭せられて學位を贏ち得られた原博士がある、之が斯道の偉勳とし隨喜渴仰の焦點とある、自出度しく。併し之が爲に數年の試験踏臺になつた幾多の動物は嘸かし傷かつたであらうが、其熱心な研鑽には誠に敬服すべく且つ尊重せねばならぬ。而して其成果は灸が蛋白質療法として必功たるを立證せるに過ぎぬとせば、吾人は些か心細い感じがないでもない。

兎に角五千年の歴史を維持し來つて、現代日本人の大多數が其有効なる成績を信仰し保證して、其生命を繼續してゐる者は此の艾灸である。若し艾灸が無効有害なりとせば、非科學的だとか野蠻的だとか迷信的だとか、現代醫學より輕蔑視せられ嫉惡視せられなくとも、遠くの昔に淘汰せられて影も形も消え失せてゐる筈ではない乎、加何に東洋人が愚物にしても灸火の苦痛を辛抱し、灸痕の印跡を我慢するは治病に必効の希望があればこそではないか、而して此の舊い歴史と此の盛んな信仰とは、催眠療法や青酸療法のやうな花火線香の一時流行の者とは同日の比較ではない。故に艾灸が治病上に有効なるは原博士が立證の蛇足を待つまでもなく、永遠に最大多數の患者の福音を招來する者と信せられる。

哲人は「利のある所に害も亦潜む」と教へてゐる、是に於て禁灸に對する孔穴の研究が必須なる所以を知らねばならぬ。乃ち艾灸が唯無効にして火傷に止る計りならばまだしも、炷灸の爲に啞になつたり壁りになつたり大切な顔を毀損したりする、此の裏面があることを的確に知悉せねばならぬ、原博士が若し眞に國家的厚生純愛を期待せらるゝならば、灸の病證に對する竿頭一步の研究を進めて貰ひたい、至囑々々。

近頃敵間の誘惑に乗せられて産兒制限が公々然と行はれてゐる、是れ國家的盛衰に關する一大不祥事にして誠に慄然たらざるを得ぬ次第とは感じない乎。但し鍼灸の手段にも絶嗣墮胎の科目はある、是は云ふ迄もなく醫道として絶體絶命的爲さねばならぬ外は、天道の生成純愛なる理義に悖戾する行爲として醫師は緘黙を守り斷じて之を口外に漏さぬ。さて又此の反面に不妊の爲に胸を傷めて百方求嗣を希望してゐる婦人が多し、多是れあるは我が民族の隆昌の兆として誠に頼母しう喜ばしう感せられる。抑も受胎は一切神秘的、天意に屬して人智人力のまゝには任せぬ所の者である。人事を盡して天命を待つところ云へ、されば之を種子と土地

と氣候との三者相關的に譬喩して説明せば、乃ち如何に種子が美はしくとも土地が礫確なれば發芽せぬ、如何に土地が肥沃なればとて種子が糲しななれば結實せぬ、如何に種子も土地も完備すればとて氣候を擇ばず若しくは氣候が不順なれば則ち必ず徒勞に終はる、又折角發芽しても害虫の恐れを加算せねばならぬ。勿論自然は「一粒萬倍」の理法に依り、最大多數に産出させるを必然律と爲す、故に活潑々地の種子を擇み、瘠土ならば之に肥料を施し、濕地ならば之が水分を洩らし、氣節に應じて種子を蒔き、害虫驅除に注意せば則ち必ず美事な豐作が祝せられる。農本位たる皇國の活歴史を無視して工商立國に擬ね金貨本位に改惡し、七十億の國債を抱へ込み農村の疲憊は言語に絶するにも拘はらず、農民は豐年を呪ふに至る逆世相を現出する裏面を洞察すれば返すも長歎太息の極みである。

顧みるに歐米は建國の歴史が新らしく随つて文化の發展も淺く、總てが研究の過度期中に呻吟してゐるやうに思惟せらる。否、恐らくは低級なる彼等が如きは未來永劫に過度期を脱し得ぬ民族かも知れぬ。翻て東洋は五千年の星霜が道德に政治に窮理に醫道に乃至音樂美術工藝等々、超越せる聖賢が幾多の研究と經驗とを相應に嘗めて築き上げた文化なれば、却に貴重な創意發見が所々に存續してゐる。吾人は温故して徒勞を省き獨創を新上に求むる必要は、多々に之れあることを見逃さず、而して光輝ある司命の發揚を忘つて天意の寵遇を徒事ならしめてはならぬ。豈啻鍼灸のみと云はんや。

## 第二節 醫道と信仰

信仰は吾人が唯一の生命である、故に信仰絶無と云ふ人類は宇宙間には居ない。但し信仰の對象に依り社會文野の等差が生じ、信仰の誤想に因り善惡の感化を異にす。神を信仰するがあり、佛を信仰するがあり、木石を信仰するがあり、鱗頭を信仰するがあり、聖人の言を信仰するがあり、愚者の舌を信仰するがあり、唯心を信仰するがあり、科學を信仰するがある。其信仰する熱度の猛烈さは孰れも共通である。而して智能の程度に依て或は高尚なる信仰となり或は低級なる信仰となり、又意識の明暗に隨て正邪善惡も起る。例へば歐米白人がゴットを信仰するは誠に正しく且つ善である。然るに信仰の自由てふことを忘却して之を他の信仰ある民族に強要するは、意思の蹂躪であり、信仰の脅迫である。故に十字軍なども屢々起さねばならぬ罪惡を行ひ且つ邪道に陥つた者でない乎。日本人が皇祖を信じ、天皇を仰ぎ神社を祭り祖先を祀るは、固より反始報本の大義を尊重して世々に國體の美を濟してゐる者である。而して學藝醫術宗教など廣く外國に求めて之を研究し國家の滋養に資するは則ち正路を踏み且つ善行と云ふべし。若し之に歸依信仰するは本末輕重の顛倒である、所謂「其鬼にあらずして之を祭るは諂ひなり」と同義のもの、甚だ醜態であり且つ面目に關するのみならず國家の亂階は必ず何時でも此處に基づく。迷うてはならぬ、又迷はしてはならぬ。嘗て某宣教師が「現代の醫師ほど濟度し難い代者はない、彼等は科學研究に没頭して物質萬能に出頭し、ゴットを侮蔑して殆んど無神觀に迄墮落してゐる、實に濟度し難い代者は現代醫師である」と長歎息を洩らしてゐた。宣教師の立場としては如何にも尤も千萬にして些か同情すべき悲話である。併し乍ら醫師も科學の絶對信仰者なる立場を考へてやらねばならぬ、而して其宣教師先生もゴットの全智全能を無條件に偏信し、頻り

にバイブルに拘泥して徳化が神意たるをも理解せず、徒に其頑迷を發揮して融通の利かぬこと夥しい、其濟度の容易ならぬは彼と此とは兄たり難く弟たり難い、謂はゞ目糞が鼻糞を笑ふに類した者である。  
 元來宗教は薰陶に依り利己的邪念を脱落させ、精神的美化の社會的善化に及ぼすが其理想とする所であらねばならず、醫師は治病に依り毒魔的病苦を驅逐し、肉體的健全化の家庭的福祉が、延いて國家的奉仕の可能化せしむるを仁術とするが其司命とせねばならぬ。

蓋し靈と云ひ肉と云ふも其實は二にして一であり、一にして二と爲すのである。靈と肉とが互有共存するに依り茲に人身の名實は生ずる。若し靈が遊離すれば則ち肉は冷灰化して人身は求められぬ、又肉が壞滅すれば則ち靈は歸幽して亦人身を認めぬ、故に肉體の損傷に精神が苦痛を感じ、而して又精神の快樂に肉體が健康化するに見て、如何に靈肉が相親んで絶對に分離せぬ關係を有するかを誰れが否定し得べき。

現代醫學は西族が十九世紀に入て分析科學の潮流に渦卷かれた結果が、部分的研究より專攻的に直進して分類的には緻密を極めても、總合的には寸前暗黒なる不具的苦窳を現成したる者と云ふべく、恰も千枝萬朶の研究を遂げて而も之が如何なる樹木なるかを知らぬに均しい。醫學も疾病の分類が四百四病は愚かのこと八百萬にも組織立てたるが、全身的病情に就ては其診斷が甚だ覺束なく如何にも五里霧中の感に打たれる。

例へば肺藏が病めば其病因は何れより來る乎、又毒素が必ず肝藏又は心藏其他の内藏に波及するは、其尤も見易い條理なるを、專攻に偏重した醫家の悲しさは、其波及してゐる他藏の疾患を診し得ぬ、よし併發と診察しても治療は其専門家へ委讓せねばならぬ。かくて一人の疾患に三人乃至五人の醫師を煩はさねば手を

下すに由がない、實に不便宜千萬の治法となつてゐる。是も現代醫學の攻究法から云へば亦已むを得ぬとせん、其半面に疾病の惡化を誘致し易く、又從て責任轉嫁の口實に害用せぬとも限られぬ。又患家として病證が少しく複雑となれば、則ち五六の専門醫を聘せねば埒が明かぬとせば、洵に煩に堪へず且つ其經濟をも考慮せねばならぬ、國民の最大多數は貴族富豪ではない。

靈と肉とが互合抱擁して人體が構成せられた如く、萬有即ち悉皆物體の構成も氣と質とに因縁せぬはない。然るに科學は唯其質(體)の方面をのみ分析して、其尤も大切に取扱はねばならぬ氣(靈)に關する成分を等閑に附して顧みぬは如何。宜なる哉、現代醫學の理論は如斯く周到に如斯く巧者に組織立てられてゐても、其治療上に効果を擧げ得ぬ缺陷の最大原因は、實に斯の氣に關する分析が不可能なるに因すと爲さねばならぬ。

例へば梔子にしても胡桃にしても分析した其分類の方程式は何處の梔子も何處の胡桃も等しい原素(質)の排列が現はれる、而して實際は野生の梔子が藥用となり庭園の梔子は只染料たるに過ぎず、事實として寒地の胡桃が藥品に入り暖地の胡桃は食膳に供せらるゝに止る。又米の一味にて酒を醸し醋を造り甘酒を製造し麴を作り飯を炊ぎ糲とも成す。酒や醋や甘酒や麴や飯や糲など之を分析して原料の米と等しい質(原素)の方程式の排列が可能であらう乎。酒は辛であり醋は酸であり甘酒は甘であり麴も甘であり飯は淡であり糲は平である、原料は只一種の米のみ、而して其五味の變は此の如く各特色を現はしてゐる。是れ水火の化合に依りて氣味に變動が生ずる、若し斯の氣の理にして明瞭ならざらんか、何ぞ分析の完備を誇ることを得ん。均しくは是れ人間である、而して或は剛膽なるがあり卑怯なるがあり、或は鷹揚なるがあり性急なるがある、肉

體の分析に恃んで此の天稟の情的原素が分類せられたならば、茲に始めて科學的價値が尊重せられん。

淺薄なる智巧に築上げた科學を誇らしく、やれ空中を征服した、それ海底を服従せしめたなど科學熱に浮かれてゐても、一搖り揺すつて僅か二三時間に吾人が五十年と云ふ長日月に經營せし大半を破壊し去つた關東大震災の跡を如何に眺むる。

さて吾人が天賦の畏怖心は即ち吾人が信仰の起始源泉とはなる、信仰は吾人に慰安を與へる即ち安心立命の慈母である。而して信仰には前述の如く區別がある。乃ち神明の信仰は云はずもがな、宗教的信仰、科學的信仰、鱈頭の信仰、無神の信仰、かく信仰には種類があつても其信仰の熱度には差別はない、其信仰の低級なるを嘲ける宗旨宗門が、却て迷信と貶されるを反省するが善い。凡て物には程度があり分限がある、國政の變理に當る大臣も田畝に鋤犁を執る農人も、其國家に貢獻し陛下に忠實なる所以は皆一つであつて何處に差別があらう、故に國家的に之を觀すれば職業は神聖にして何等尊卑の別がなく、只其分限に依て執る所の任務に輕重が分れるのである。

信仰は其熱度には差別を認めぬが唯信仰の對象に於て其優劣が評せられる、而して其低級な鱈頭の信仰には却て弊害を認めぬが、詭辯的迷信の旺盛なるに至つては千古に流毒し國家を紊亂する、現代日本のマルクス宗に見れば思ひ半に過ぐるであらう。

「人事を盡して天命を待つ」とこそ云へ、人智の及ばぬ所は神明の加護を仰ぐ外に手段はない。故に古來皇漢醫師は重患には必ず自身が其信仰の厚い藥味を調劑し、のみならず匙を棄て敢て其手指を以て撮み合はせ

尙ほ神前に供へて然る後に患者に與へ、侍醫の人は特に煎じ方まで他人に委ねないと云ふ。故に患家は信仰のない醫師を拜問と呼ぶに至る。又上醫は自己を信仰せぬ患者の手に觸れ脈を切せぬ。博士が水を飲ませても信仰は患者を回春せしめられる。信仰の集中せる醫師が往診には、其門口や玄關の警咳を聞くだに病人は固より看護の誰彼れまでの嬉れしさが顔面にほの見えるではないか。若し不徹底な不親切な醫治が餘り患者を玩弄的双紙に取扱はれては、其信仰が稀薄化して何時の間にか他の淺薄なる民間的療法に移動する、是れ抑も誰が罪であらう、噫。

### 第三節 鍼灸の威力

東洋に發生する疾患は素より東洋固有の醫道に於て解決するが的確なる良法であり、且つ又之が概して眞理である。然るに現代の醫師は洋法を絶對と過信し以て日本人の病苦を驅除せんと企圖す、此の認識不足に祟られて而も却て疾患は日に月に増殖に傾き、死亡は年々歳々に高率を示すに至り、其理想とする所を裏切られて頗る煩悶し憤慨を漏らしてゐると聞く。其善意的動機には聊か同情せねばならぬ。併し其治法も其學究も根本的原理を建替へぬ限り、百年河清を夢見るに均しく其目的の彼岸には達せられぬを切言する。如何に焦心し苦慮しても美果は結ばず、必ず徒事に終らんは亦是非なき次第と諦めねばならぬ、唯其不幸は善男善女の大衆に歸するを傷むのみ。古來醫療の巧拙が國家の盛衰に大なる影響を爲し國民の強弱に甚しき關係を有すると云へば、刻下醫界の現況に顧みて轉た慄然たらざるを得ず、而して指導階級が醫道に無關心的冷

淡なるには甚だ痛感嘆息に堪へぬ。

それ微菌、それ結核、それ動脈硬化、それ血圧亢進、やれ糖尿、やれ蛋白質等々と何ぞ吾人の神経を尖端して叫喚呻吟する聲の頻々として吾人の耳朵に觸れ来るや、又半面にはやれ電氣、やれ磁氣、やれ指壓、やれ手掌、それ靑酸、それ紅酸等々と何ぞ民間療法が雨後の新筍の如く續々として擡頭し来る現象が吾人の双眸に映するや、此世相の亂雜を日本の醫師として無上の耻辱とする責任感に切齒せらるゝ博士や學士も少數ではないと云ふ。さて何時迄も揚がらぬ風は抛つて風を見て帆を卷く心機一轉を、敢て好意的に勸告す。

抑も東洋醫道の療法も多種多様に分岐せられてはゐるものゝ、大要は服藥と鍼灸との内科的と外科的との二大概括せらる。固より時代の變遷に伴うて療法に斟酌加減はある。否、斟酌加減がなくては醫師の權威に係る、而かも其根本的病因や治法の原理に至つては些かも歪動はない。原理は一定不易にして加減は轉變無盡なり。殊に此醫道が日本でも三千年の久しい間、上下を救濟し來つた効果の偉大なる史實を閑却して、反始報本的皇國の大義美風に悖つて之を拋棄してはならぬ。而して其療法たるや東洋の民族に適應してゐるから、服藥にしても鍼灸にしても副作用などの危険状態を呈することは毛頭に起らぬ、薬味の瞑眩や鍼灸の反應と注射の副作用とは絶対に混合させてはならぬ。故に醫師も患者も尤も安心して治療が施され診察が受けられる。又新患は奏効が迅速であり久病が時日を須要とするは當然の理數、更に改まつて論ずる迄もあるまい。

さて皇漢醫道の分科たる鍼灸療法が、若し無効に屬する者であるならば必然的淘汰律に逢うて既に已に幾年かの過去に跡方もなく消滅して社會から忘れられた筈である。然るに實際は最大多數の民衆が鍼の痛さを忍び灸の熱さに堪へて其治療を請ふ者が、都市にも地方にも年が年中續ぎく踵の絶えぬは、畢竟其特殊の顯著な効能を充分に知り盡してゐればこそだ。過去三千年は愚なこと、未來永劫に存續して國民の保健に貢獻し國民の信賴に負く者ではないと斷言し得られる。維新の當初に政府が洋醉中毒より認識不足を醸し、歴史的貴重な皇漢藥劑を弊履の如く惜しげなく廢棄したつたが、迨に醫道上重要な位置を占め且つ萬衆が必治を信賴するより、鍼灸醫道は餘義なく保存せられた運命の消息が窺はれる、但し侮蔑的待遇を甘受せねばならぬが不愉快感を惹起させる。

灸治には養生灸と云ふがあり、又中風や下痢や脚氣や風邪などの孰れも的確な効果を誇る豫防的灸法もあるが、總じて炷灸は緩治的に屬する者とする。而して刺鍼は急治療法として其適法的に施術せば、其奏効の偉大にして且つ迅速なるは到底藥療が遠く及ばぬ所とせらるゝ者がある。抑も此の刺鍼が得意とする世界的技能を、當今社會の理解ある智的階級に認識せらるゝことの僅少なるを國家保健的に遺憾とする者である。夫れ如何なる名醫でも如何なる妙藥でも一人にして一方にして萬病は全快せしめ得らるる者ではない、若しや現代に之が實現可能を叫ぶ者がありとせば、則ち是れ必ず山師かインチキかでなければ則ち狂か痴かの徒であらう。兎に角科學的洋法を後に瞠着せしむる鍼灸の齋らす効果も、萬病の七八分迄が其範圍とする所であらう。此七八分の範圍に於て必然的治愈せらるゝ手腕の實質を握つて、萬衆の病苦を救濟する鍼灸の偉大なる威力に觀て、皇漢醫道の原理が如何に深遠であり、且つ如何に莊嚴なるかと窺ひ知られ、「醫は仁術

なり」てふ古訓に孤負せぬが聊かの誇りであらう。

## 第二章 醫道の大意

### 第一節 醫道は天理に基く

易傳に「天地あり然る後に萬物生ず、天地の間に盈つる者は唯萬物のみ」と曰ふ、一氣の混沌が分割して天地が開闢し萬物の草昧なるを形狀せらる。素問に「太虚は寥廓たり、五運は終天に氣を布き、眞靈は坤元を總統して九星は懸つて朗かに七曜を周旋する、陰と曰ひ陽と曰ひ柔と曰ひ剛と曰ふ、幽顯が既に位して寒暑は弛張し生々化々して品物が咸章みなあきらかなり」と曰ふ、此太虚は即ち易に曰ふ太極であり太極は本無極の義となる。太虚と曰ひ太極と曰ひ無極と曰ふは異名同實であるが、其用語の上に些か趣を別途にする所以が存する。さて太とは其至大を極むる意味、虚とは空虚にして無物の意味、蓋し極太極虚無聲無臭の中に極大極至の理氣を具有してゐる、此理氣が未だ分れずして混沌たる者が即ち太虚である。太虚を無極と云ふ時は是れ太虚が流行する氣中に主宰の理を含有するを主として立言し、又太虚を太極と云ふ時は是れ太虚が主宰の理中に流行する氣を含有するを主として立言す。故に周子が「無極にして太極」と曰ふは、亦是れ極無を以て極有を推論したる者と爲す。蓋し極無の中には是がなければ理ではなく、極有の中には是がなければ氣ではない、極

無の理を以て極有の氣を推さねば何を以てか是氣があることが知らるゝであらう。極有の氣を以て極無の理を推さねば何を以てか是理があることが知らるゝであらう。是に於て理と氣とを分殊して之を言へば則ち二となり、其渾合を以て之を言へば則ち一となることが知られる。故に是理があれば則ち是氣があり、是氣があれば則ち是理がある。名は二となれど其實は則ち一である。元より有と云ひ無と云ふが孰れが先とか孰れが後とか別けられる者ではない。

太極が氣機の動に乗じて陽を生じ氣機の靜に乗じて陰を生ずる。周子は「太極が動に因て陽を生じ靜に因て陰を生ず」と曰ふが、されど無極が動に因り陽を生じ靜に因り陰を生ずとは曰はぬ。蓋し無極は専ら理を主とするより言ひ即ち理には動靜がないからである。太極は兼て氣を主とするより言ひ即ち氣には動靜があるからである。

さて陰陽の流行が相生じて已まない結果に、積陽の清き者は天を成し、積陰の濁れる者は地を成す、故に周子は「分陰分陽して兩儀が立つ」と云ふ。故に未だ天地の剖判せぬ以前に唯太虚中の一氣が天地の形を化成する可能性を含んでゐると謂ふべく、已に天地が開闢して以後は太虚の氣は即ち天地の形中に寓する。是を以て天は太虚の氣を得て萬物の始を資し地は太虚の氣を得て萬物の生を資する。形に従て氣を究むるを陰陽と云ふ、即ち陰陽は理中に流行する氣を指し、氣に即して理を觀れば太極と曰ふ。即ち太極は氣中に主宰の理を示す、故に周子が「陰陽は一太極」と曰ふは是れ氣の極する者を指して言ひ、「太極は本無極」と曰ふは是れ理の極する者を指して言ふに歸する。



吳澄氏が曰ふに「太極には動靜がない、動靜は氣の機である、是を以て太極は専ら理を主として言ふ」と。朱子が曰ふに「太極の動靜があるは是れ天命の流行する所である、是を以て太極は兼て氣を主として言ふ」と、又言ふに「太極とは本然の妙である、動靜とは乗する所の機である、本然の妙とは即ち太極にして其本を指す、されど是の動なり是の靜なりを主宰する妙の理であり、乗する所の機即ち動靜は其天命が流行して動に乘し靜に乗する機の氣を指すのである」と。

來知德氏は易經に註して「對待する者は數、流行する者は氣、主宰する者は理」と言はれたが、即ち此三句に據て天地萬物は其中に包括せられぬはないと運氣要訣には稱讚してゐる。さて對待とは二元的乃至多元的形而下を指す者にして即ち天に對する地、陰は陽を待ら剛は柔に對し、晝と云へば夜あり表があれば裏を知り、天と地と人とは對待なり、知と仁と勇とも對待なり、五行の木火土金水も對待となり、春夏秋冬の溫暑涼寒も干支も、其他凡百萬有の苟も形を具する物的は、天地の極大より電子の至微に至る悉く其對待的數に漏るゝ所はない。而して數は眞なりと云ふが、其所謂眞とする所は實現もせられず實際化も不可能な眞であることを知らねばならぬ、即ち四捨五入も公然に認められ奇零は切棄てられる。かく虚偽が公然に行はれても數の眞たる所以の理は依然として失はぬ、故に對待的萬有は數を基礎とせねばならぬ所以が存する。

電子の密集凝結に成る萬有の生命は其物的に含有する氣體である。一たび其氣體が遊離すれば則ち物質は朽廢して還元し原子は分れ靈能は失はる。氣體は常住に活動して其變化は極りが無い、天地の氣は昇降し日月の運行も四季の循環も無限無疆である。故に流行する者は氣と曰ふ、而して天氣は左旋し地氣は右轉する。

此氣流は萬古不易の必然的天則に制せらる、即ち萬有は斯かせしめられ、此くせねばならぬ約束でもあるかの如く、各自其天職を守り其天分を超えて敢て脱線的放逸を許されぬは、其統御せられねばならぬ理があるからである。而して此必然的天則は主宰の把持に歸する者即ち之を理と名づくる。理即神であらねばならぬ。既に理的な主宰があり數的萬有があり氣的運行があり、宇宙的大小の事物は一として悉く此三大原則の範疇を越ゆる者はない。故に天地萬物は其中に包括せられぬ者はないと曰ふ。是を以て之を國家的に觀れば主宰的理は神聖なる君主に、對待的數は億兆の庶民に、流行的氣は輔佐の臣僚に適應し、君民臣が相關聯結して三位一體を爲して政事の運用が成り國家は治平せらる。若し唯一君萬民丈けでは國家の美化は望むべくもあらず、既に君民あり、臣は其間に介在して上下の疏通を計り經綸の方を展べしめねば、如何で健全なる國家が成立するであらう歟。

## 第二節 天地萬有生成の序次

易傳に「天地あり然る後に萬物あり、萬物あり然る後に男女あり、男女あり然る後に夫婦あり、夫婦あり然る後に父子あり、父子あり然る後に君臣あり、君臣あり然る後に上下あり、上下あり然る後に禮儀の錯くする所あり」と曰ふ。是は兩間に盈てる無數の森羅萬象は井然として秩序正しく送陳迎新を遂げてゐる、而して人類にして始めて夫婦父子君臣上下の階級が自然的に成立して社會を構成し國家を肇造する、而して此階級には各自に相應せる分限が具備せぬはない。さて人類には特に高尚な意識を賦與せられ有爲の希望を抱懷せ

しめらる。然るに此天惠の意識の妄動より希望が野望化し、濫用の結果は其分限を僭越して、動もすれば社會の平和を攪亂し國家の秩序を破壊する恐れがある。霜を履んで堅氷の至るを誠められた先聖は、茲に憂慮せられて禮儀の制を設け其限度を示教し、各自に敢て相犯すことなく其安んずる所を得しめられ、然る後人類は始て國家的にも社會的にも眞誠なる文明の域に優游として生計が營まれ、家々戸々に養生喪死の道が盡されて、恨みなき情操が遂げられる。

次に易傳に「天地が綱縊こうひびして萬物は化醇し、男女が構精くわせいして萬物は化生す」と曰ふ。是は天地の氣が繩を縋ふが如く能く結ばれて離れない所から萬物は化醇せられ、左旋の天氣は地中に下降し右轉の地氣は天中に上昇して氣交す、此氣交に因て萬物は生成する、化醇とは氣體が液體に醇化するを謂ふ、陰陽異性の濃厚なる醇精が結合して萬物が化生する、化生は形體の顯出するを謂ふ、其生々化々の無限無窮なるを讚嘆せられたに過ぎぬ。而も茲に天地剖判以前に論及せられぬは、蓋し易は先聖が社會の秩序を保ち國家の治亂を憂ふる深意を寓せられての述作に成るからである。

次に又易傳に「天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十」と云へるを後世の解釋する者が、河圖に托して「天一水を生じ地二火を生じ天三木を生じ地四金を生じ天五土を生じ、地六水を成し天七火を成し地八木を成し天九金を成し地十土を成す」と義解して、天地生成の原理に基いて水火木金土の五行を推定する起源と爲す。又洛書より勘考して一白水正北、二黒土正南、三碧木正東、四綠火正西、五黄土正中、六白金正北、七赤金正西、八白土正北、九紫火正南の水土木金火と序次し五行の相尅的次第を示す。又易の乾正西、兌正北、離正南、震正東、巽正南、坎正北、艮正北、坤正南の排列は洛書と同じ

く、唯中央の五を虚數として用ひぬ迄である。

謹んで我神典を按ずるに大氣の渾沌より天地の剖判と同時に別天神の五柱が成りまし、尋で神世七代の十二柱の出でましを経て、諸冊二尊が天神諸の命以て「此の漂へる國を修理固成」の詔言に依らせられての御國造りは土木火金水に順次せらるゝやに窺はる。

素問經脈篇には「人の始て生るゝは先づ精を成す、精が成つて腦髓が生ず」と曰ひ、醫學原始には「人の始て生ずるは先づ臍と命門とである、故に此二者が十二經脈の主となる」と云ひ、千金方には「人は天地の氣を稟けて生まる、故に内には五藏六府精氣骨髓筋脈があり、外には四肢九竅皮毛爪齒咽喉唇舌肛門胞囊があり、以て總じて軀を成す」と曰ひ、醫殼には其藏府の生成する次第を言ふ者がある。即ち「若し陰が陽を包めば男を成し先づ右腎を生ず、陽が陰を包めば、女を成し先づ左腎を生ず、其次に脾を生じ次に肝を生じ次に肺を生じ次に心を生ず、水土木金火即ち相尅的順序となる、以て其己に勝つ者を生ず、腎は水に屬するが故に五藏は是に由て陰とせらる、其次に小腸を生じ次に大腸を生じ次に膽を生じ次に胃を生じ次に膀胱を生じ次に三焦を生ず、火金木土水火即ち相尅的順序となる、以て其己が勝つ者を生ず、小腸は火に屬するが故に六府は是に由て陽とせらる、其次に八脈を生じ次に十二經を生じ次に十五絡を生じ次に一百八十の系絡を生じ次に一百八十の纏絡を生じ次に三萬四千の孫絡を生じ次に三百六十五の骨節を生じ次に三百六十五の大穴を生じ次に八萬四千の毛竅を生じ、則ち耳目口鼻四肢百骸の身は悉く備はる」と曰へり。

我神典古事記の開卷に「天地の初發の時に高天原に成りませる神の御名は天之御中主神」と記さる。此傳

に由れば皇國民族の信念は神が天地を創成せられた者ではなく、天地の開闢と同時に天神が成り出でました者である、而して神は萬有の根元にして且つ統一體におはし、萬有は幽神の分靈に顯成せられ其終末は幽界に還靈すと云ふ概念を、言ひ繼ぎ語り續ぎ來つた者である。之を詳言すれば兩間の萬有は皇産靈神即ち天地陰陽五氣の氤氳に因て生成せられた者であるが故に、萬有は有機無機の區別なく悉く乾元と坤元との靈氣を享有する靈的性命體であると爲さねばならぬ。礦物も植物も動物も山岳も川澤も海洋も日月も星辰も雷霆も風雨も雲霧も、其他凡百のものは各自其成出づる形體のまに／＼相應して靈的活動の妙機を具有す、而して萬有に類似の者はあるが決して劃一體の者はない。故に其形體に相應する機能は乃て悉く偏質偏勝たるを免れぬ、偏勝とは異能あるを謂ふ蓋し「天は西北に缺き地は東南を缺ぐ」と曰ふ、然らば天地も完成せられた譯でなく、故に列子も「天地に全功なく聖人に全能なく萬物に全用なし」と云ふは誠に知言である。

日月の運行に因て溫暑濕涼寒の五氣が循環するが、其光熱は四方四隅に徧照せられぬから勢ひ中道を失ふることになる。是に於てか其間に生ずる人物共に偏質偏勝を免かれざるを得ぬが又定理である。陶弘景氏が所謂「天地間の物にして天地間の用を爲さぬ者はない」譯だから、乃ち毒藥が人を生かし人を殺し、組織に巧な者は破壊にも亦巧であり、長所即ち短所とは則ち是理を指して謂ふた者であり、茲に女子に廢れたる藪がなく英雄が驥足を展ばせる餘地もあると知るべし。

### 第三節 人類は靈長なり

抑も人類の稟賦には徳性があり知能があり意識がある。神が唯人類にのみ此優秀な品格を賦與せられたるは、蓋し雜然たる森羅萬象を整理し各自に其所を得、其性を遂げさせて天地の化育に賛せしめんが爲め、特に人類を降されたる幽玄なる妙理に外ならぬ。而して人類は中道を履み中庸を行ひ中和が致される比較的完全な機關組織を具備して、萬有が偏質偏勝なるが如きでない所に超群拔萃した優秀さが認められる。而して又天地運行の中道を得た處に生を享くる者と、中和を缺いた地に産れ出た者とに由て、自ら人類にも亦其優劣が等差せらるゝは是れ亦已むを得ぬ必然的數とせねばならぬ。例へば渦卷の中心に近づくに従て水勢が急湍となり、其遠ざかるに従て水勢が緩漫となり、急に偏せず緩に僻せぬ溫和な活動は唯中流の水勢にのみ求められる、又其急中緩の三帯に在る水は其氣味も溫度も自ら差別があるべき筈である。是故に我神聖なる皇典古事記に諾尊が「上ツ瀨は瀨速し、下ツ瀨は瀨弱し」と詔り言ち給ひて、初めて中ツ瀨に降り潜ぎて滌ぎ給ひて三柱の貴子を得給ひしに想ひ合せば、中道中和を得ることが、吾人の先天的稟性か若しくは後天的訓練かに據て、人類が至上の理想として中道中和の實現に専心努力せねばならぬ幽契が存する。故に孔子も中道を至道と爲し中を庸ふるに百方苦心せられ、「中庸の徳たるや其れ至れる矣乎」と讚嘆せられ、「民は能く久しうすること鮮し矣」と憤慨を漏らされた。孟子も「伯夷は隘であり柳下惠は不恭である。隘も不恭も君子は由らざるなり」と曰へり。又「子莫殿は中を執らるゝが、中を執らるゝは聖人の道に近いとして宜しい、然も中を執て權道を知らねば猶は一を執ると均しい、一を執るに惡む所の者は其道を賊するが爲である、偏した一だけを擧げて他の百を廢するからである」と融通の利かぬが非道たるを詳説せられた。

天地運行の中道を得ぬ北に偏して寒帯となれば則ち固陋に僻し、南に偏して熱帯となれば則ち怠惰に流れ、涼帯と温帯とは稍々中道に近いが、若し四時の循環が普偏せねば則ち其偏たるを免かれぬ。故に寒帯人種は魯直に走り、熱帯人種は粗野に流れ、涼帯の刻薄、温帯の緩舒、是が其偏質の象徴する所にして先づ此理を知悉せねば治國も療病も問題にならぬ。

一滴の靈液が結ばれて人生の始を爲すに臍と命門とより成るとは已に醫學原始の論ずる所である。脊骨の大椎より十四節を命門穴とする、其兩傍に腎俞穴を求む即ち兩腎の部位である。錦囊秘録に「兩腎は俱に水に屬し左を陰水と爲し右を陽水と爲す、兩腎の中間は即ち命門、其左邊は是れ眞水の穴にして其右邊は是れ相火の穴である、此の一水一火は俱に無形にして日夜絶えまなく潜行して秒時も息まぬ、蓋し命門は兩腎の中間に居て左右に偏せず、婦人が子宮の門戸となる、子宮は腎藏が精を藏する府にして關元穴と氣海穴との間に當る、〓臍中より横骨迄を五寸と定めて臍下二寸半が氣海、三寸が關元なり〓男の精も女の血も皆此所に聚る、之を先天眞一の氣と爲す、所謂「坎〓中の眞陽は一身生化の根源とせられ、兩腎の中間にあつて左右に偏せない、兩腎は水に屬して陰陽の分があり、命門は火に屬して二陰の中に居る」と曰ふ。即ち靈氣は命門に宿り母血は臍帶より運ばる、是の靈氣、是の精血、之を先天の氣血とは謂ひ、月盈れば則ち子宮を出づ、之を人生の開關とは謂ふ。茲に命門先天の氣は臍下三寸の處即ち丹田に搏動して其健否を兆はす、斯氣を眞氣と云ひ元氣と云ひ根氣と云ひエネルギとも云ふ、而して肺藏は後天の大氣を呼吸して常に斯氣を滋補する。次に飲食の胃府に納るや中焦の醞釀は之を腐熟消化する、其水穀の靈的有生の化生せられたる悍氣

は衛氣と名づけられて十二經脈外の分肉の間や骨節の關節や皮膚の毛孔やを行ぐり、晝は陽分を夜は陰分を各二十五度即ち晝夜に五十度を循環する。又其水穀の靈的有精の化成せられたる液體は榮血と名づけられて十二經脈絡の管隧を循環する。血の氣に於ける猶ほ糸が針の運ぶに隨うて縫綴するが如し。又此水穀が腐熟する氣を穀氣と云ひ宗氣と云ひ體氣と云ひ、脾藏の運行に依て膈膜を貫きて上升し心肺を潤ほし氣息と俱に所謂先天の氣血を補充滋養す、之が即ち後天の氣血である。さて血液は心藏が主どり肝藏に藏し脾藏が之を統ぶと爲す。手が能く把住し足が能く歩趨する體氣が充實しての作用であり、體氣は陰に屬して魄と名づけ肺藏を主どる、又體氣を運用せしむるは肝藏の機能にして陽に屬し之を魂と名づく。魂と魄とは茲に夫妻の關係を思はしむ。孟子は「志は氣の帥なり氣は體の充なり」と云ひ、内藏や五官百骸が具足して體軀を成し是に氣血が充實せば其健康は保有せらる。今假りに火を生命と爲し薪を肉體に譬ふれば、薪に點じた火が先天的氣血に當り、此に油を注し枝を添へ火勢を繼續せしむ、此油と枝とは後天の氣血に當る。火勢が熾んであれば外感的六氣の風寒にも内傷的七情の淫火にも雜因的飲食勞役にも容易に滅却はせぬ。本體の薪が盡き然る後に火は消えて生命が終焉し幽界に還元する。火力の弱きは元氣の不足に因る。故に油や枝の補充を怠つてはならぬ。又青壯にして體氣の旺盛な者が厚味に飽き暖衣を襲ぬるは所謂有餘と成る。薪の燃え方が速かな爲に長く生命が維持せられず早世夭折を免かれぬ道理が亦誰にも能く合點せられるであらう。

無數の細胞が一氣に統べらるゝは萬有皆然らざるはなく、唯人のみ自由に意識し商量する優秀な機能を有する。醫學原始に曰ふ「心を靈君と爲す、萬念は皆是より生ず」と、又曰ふ「心は一身の君主にして虚靈を

稟けて造化を含み一理を具へて萬機に應ず、藏府も百骸も唯是が命する所の儘なり、故に神明出づと曰ふ」と。類註に曰ふ「精は腎に藏し腎は腦に通ず、腦は陰なり髓は骨に充てるなり、諸髓は腦に屬す、故に腦が成つて而る後に腦髓は生ず」と。華本草備要の辛荑の條下に「金正希先生が嘗て余に語て曰はるゝに、人の記性は皆腦中にあり、小兒が善く忘るゝは腦が未だ満たぬに因り、老人の健忘は腦が漸く空しうなるに因る、凡そ人は外物に對し必ず形影を腦に留むと、昂は(備要の著者)思ふに今人が往時の記憶を呼起すに必ず閉目して之を思索す、此が即ち神を腦に凝らす意味である」と。李時珍氏は「腦を元神の府となす」と曰へり。蓋し吾人が活躍するに當りては則ち神明は腦に居り寝ぬれば則ち心に舍す、兩手で胸を抑へて寝ぬれば必ず悪夢に襲はるゝ猶ほ君主が朝に明堂に政事を親裁せられ夕に寢殿に入御せらるゝが如し。此心藏の機能に屬する意識商量は所謂大我であり、腎と脾との二藏の機能に屬する先天の元氣も後天の穀氣も、身體保健的人種繼續的食色の體慾に屬するから小我と稱せらる。此小我を抑壓して性慾を放恣ならしめず、大我の權能を發揮して中道を踏まじむるが上智の人即ち聖人君子と稱せらる。此見地より推せば若返り法などは邪道の研究にして邪道の宣傳と云はねばならぬ。況や吾人の弱點に乘じ無効有害な者を利用して私腹を肥すは、羊頭を掛けて狗肉を賣るに比して、民心を戕賊し風紀を紊亂することを夥しく其罪や滔天、現代醫學が科學に淫して人身を物質視するは、畢竟神靈を蔑如するに基因すると謂ふべし。物質すら靈的に生きてゐる分體なるに、其神靈を信せざるは唯神靈が磅歴する所以の玄理を知らぬに坐するのみ、仰いで天に向ひ唾して己れの顔を汚すに類するを知らぬとは洵に憫然の至りでない乎。

醫方集解には「人身の血は百骸を貫通せり、慾事の作るに及べば一身の血を撮し來て命門に至らしめ精に化して以て泄らす、夫れ精には神が之に倚ること魚が水を得るが如く、又氣が之に依ること霧が淵を覆ふが如し。之が節齋することを知らねば則ち百脈は枯槁し、交接に度を限らねば必ず腎元を損する、よし外に泄らさなくとも精は已に官を離れ、定められた眞精が數滴あつて陽物の痿するに隨て溢れ出づるは火の烟焰あるに似たり、豈に能く又薪に返すことが得らるゝか」と論破してゐる。蘇東坡氏は之が説を爲して言ひけらく「火は烈にして水は弱なり、烈なれば正を生じ弱なれば邪を生ず、火を心と爲し水を腎と爲す、故に五藏の性は心は正にして腎は邪なり、腎が邪でない者はない、上智の人も腎は亦邪である、然れど上智の人が常に淫せぬ者は心が官を正しうして腎が其命を聽くからである、心が正でない者はない、下愚の人も心は亦正である、然れど下愚の人が常に淫する者は心が官せずして腎が政を爲すからである」と論せらる、胃府は土德に準ふ、食慾にも亦之が譬へを推測せらるゝ是に由て之を觀れば君子の養ふ所は知るべく、醫道の人身を憂ふるや深く且つ切なりと謂はねばならぬ。

#### 第四節 醫道と政道とに一致なし

古の志士は曰ふ「人が學んで業を卒へ進んで朝に立ち君を佐け民を安んじ先憂後樂の實を行ふことが不可能ならば、退いて野に處り醫となり生民の疾苦を救濟せんのみ」と、然り、故に先覺者が常に治道を醫事に比喩して立論するを見る、是れ政道と醫道と其原理を一にするが爲めである。

例へば一君萬民は國家の體と云ふべく、唯一君萬民のみでは國家の用を爲さぬ。若し君民が共同して國家を經營せんか蠻族の團結が會長を戴くに過ぎぬ、猶ほ蚯蚓が主腦と細胞とで地下を匍匐し唯濕液を吸うて生命を保つに異ならぬ。白痴癡狂を醫學上には疾患視し不具視するが、是等は寧ろ食色可能の生命體製糞器的存在を認むるに過ぎない。此少數者は措いて論せず、苟も人類が萬有に超越せる七情の如き、又意識商量の如き萬物の靈長たる素質を稟賦してゐる。國家にも君主は心藏の統一體の如く司命の權を有し、萬民は細胞の活動體の如く生産と護身とに従事する。此司命が行使せられ生産が旺盛ならしむるは肝や脾や肺や腎の機能に待つが如く、君命を奉じ民衆に行ひ、民意を體して上聞に達し、上下に壅蔽なく覺隙なく舉國一體となり、而して君權は確立せしむべく統治は實現せしむべく輔弼の重責を盡し、萬民が業に勵み職に樂み平和の生活が安定せらるべく、此の施設の才能を竭すが群臣の機關である。細胞は耳目の指導に信任して身體の保護經營に專進せられ、萬民は名相賢臣の忠誠に信賴して生産の業、護國の務に精進せられ、茲に始て團結に權威があり、國家に文明が實現化せられ、然る後に所謂理想的國家の建立が眞誠に成就したと謂ふべきであらう。徒に一君萬民を高唱するは國家の體を知て其用あるを辨せざる横議として排すべく、前の所謂心が官を正しうして腎が其命に服するが上智の人とせられ、心が虚器を擁して腎が政を爲すが下愚の人とせらるゝに見て思ひ半に過ぐるものがあらう。況や細胞をして耳目の重職に就かしめんとするをや、其危険の測るべからざるは現下政黨政事が行詰れるに見て好鑑と爲すべし。

「上古に包犧氏が天下に王となるや仰いで則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜しきとを觀、近くは之を身に取り遠くは之を物に取る」と易傳に述べらる。故に人身の健康は即ち國家の健康、氣血の充實は即ち勇氣に現はれ、文武の旺盛は士氣に振ひ、質實は精神を剛毅ならしめ淫靡は國家を荒廢せしむ。人身と國家と相比して其理に豈に二あらんや。是に由て見れば民政と云ふ者、動もすれば君主に虚器を擁せしめんとする、心が官せずして腎が政を爲す下愚的政道即ち邪道ではない乎。何を苦しんで自家三千年の長日月を経綸せる理想的皇道政治に活潑々地せる無二的貴重な有意義的國家を棄て、摸倣的邪道政治に没頭して國史を攪亂する愚をなすのであらう。現代に誰か奮起して撥亂反正の實を擧げ陷溺せる苦境を救済して皇國の司命を作振する者ぞ。

### 第五節 生命と肉體と其養生

靈的生命は無限無窮なるが物的生命は有限有度である。故に先天の氣血は後天の榮衛に依て補充せられ滋養せられ、其滋補が宜しきを得ば無病息災に百年を保有せらる、漢方醫道では百歳を人命の標準としてゐる。故に靈的生命の氣血は永遠に子孫の延長となる、所謂「逝く者は此の如くにして未だ嘗て逝かず、盈虚は彼の如くにして未だ嘗て消長せず」である。火は本來無形であるが物に麗いて光を形はす、物が盡くれば則ち火は消え光を失ふ、故に有限の物的が滅々して無限の靈的が歸幽するは天命を全うした者、主人が去て家屋の朽つるは天命を賊する者となる。故に人の愛は其身より愛なるはなく、而して上智が其身を愛するは其意は國家の存亡、民命の榮枯に關する所にあり、英雄が其身を愛するは其意は揚名立功にあり、下愚が其

身を愛するは其意は口腹の享樂、刹那の快樂にあり、各自が其稟性及び其境遇の差異あるに依り然かく區別が生ずる。故に其生命にも自ら價値の等級を來たさざるを得ぬは亦已むなき次第である。

抑も物的には化があるが靈的には變はない、今日の我は昨日の我にあらず、明日の我は果して今日の我ではないかも知れぬ。男子別れて三日、亦吳下の阿蒙ならざるを傲語してゐるのではないか。其靈の變と云ふは物々に依て始て變するので靈そのものが變するのではない、但し澁柿の種に澁柿が實のり鳥は鷺を生まぬ。故に父を「チ、」と國語するは血統のチからチの繼承を意味してチ、との稱へである、母を「ハ、」と呼ぶは繁殖のハを意味するよりハ、と稱ふるが皇國言靈の權威ある發露である。バ、やマ、では國家的意義を爲さぬ。均しくは木材である、或は大黒柱となり床柱となり、或は臺所に使はれ雪隠に用ひられ、各自其材に應じて家屋は建築せられる、棟梁の鑑識に甘んじて其分に安んじ其職を守れば良い。若し棟梁に手腕がなく巨材が尺斷寸切せられて縁の下に力持ちと成つても亦天命と諦め不平不満があつてはならぬ、而して天物を無視し良材を犬死せしめた棟梁は必ず自ら幽冥の裁決を仰ぎ其責罰を負はねばなるまい。分を守らぬと能を無にするとは其責任の歸する所に自ら別がある。故に長くも皇室に生れますれば生れ乍ら自ら統治の責を負はせ給ひ、天祖の御遺訓のまに／＼赤子を安泰ならしめらるゝが其御天職におはし、民屋に生れては祖業を相續して生産に努力し護國に従事すれば良く、譜代の臣族は皇室を藩屏する。其忠誠は無二と雖ども悉く賢明にして治國の用材は得て望まれぬ、故に國家は學校を設け萬衆に選んで適材を教養して國政に委任せしむ。「賢を立つるに方(内外親疏の常方)なし」とは是れ之を謂ふ。而して我上代には「例へば技能拔群と雖も血統門

閥なきは登用せしめず」と天武紀に見ゆ。種族を擇ぶは精忠を保障する意味合ひからであらう。秦を滅する者は實に勳功の赫々たる羈旅の大臣李斯であつた。蓋し國家の發展を喜んで技能に誤られんよりは、寧ろ時勢に遅れても國礎の堅實を期するに若くはないとの御主旨であるまい乎。維新以降六十年の久しき半開の文化は輸入したが七十億の國債負擔に行詰り、而して其餘す所は風俗の輕佻、逆民の跋扈、質實の消磨、元氣の焦瘁等にして、「皇紀と西曆と何れを用ひて善いか」を解せぬ學者があり、「軍縮の結果が國防に缺陷を生じて近き將來に米領に屬しても善いではないか」と嘯く操觚の輩もある。之に依て察すれば若し一朝の緩急に逢はば崩壞如何を氣遣はれる迄に、現状を馴致させては何の文化ぞ何の向上ぞと絶叫せしめたが、昭和六年九・一八の滿洲事變の勃發に因て我が國情を一變させたる天佑神助は畏しとも畏しと仰がすには居られぬ。

國家が治法の要件は保國安民であらねばならぬ。富國強兵は第二義に屬す。此順次を顛倒して逆施せねばならぬは必ず爭亂時代の賜ものにて所謂霸道是なり、之が亡國の象徴たるは古今東西の史實が明示する所である。粗末な衣食に濃厚な肉味を美食とし淡泊な穀菜を粗食とす、肉味が滋補に富み穀菜を營養不良とするは、能毒の理を忘れた現代醫學の最大謬見である。見よ古來貴族や富豪が錦衣玉食を恣にし乍ら羸弱と短命とを免かれぬに、田夫野人は布衣粗食してゐて頑健と長壽との持主であることを。蓋し所謂美食は肉體が肥えても忍耐的勞力には適せず、粗食は軀幹が緊つて活素が旺盛となり國家公私の用に堪へられ、且つ之に満足すれば自ら財的にも餘裕を齎らし一家の永續が可能化せられるのみでなく、野心を抛て家職に黽勉すれば終身健康の基礎ともなる。

宇宙人類の最大多數は國家的には平和にして生活の安定を要望し、家族的には無病息災にして長壽を欣求する。國家に一旦の緩急があらば進んで身を挺し難に殉じて撥亂反正の衝に當るは猶ほ無數の白血球が毒素を抱擁して死滅するに均しい。又疾痛があれば鍼灸藥餌に依り之を治愈せねばならぬ、若し鍼灸の痛さ藥餌の苦さを厭はゞ疾痛なからしむるに若くはない。其疾痛なからしめんには先天の氣血を充實旺盛ならしむるにあり、其先天の氣血を充實旺盛ならしめんには、後天の美化せる大氣と淨化せる穀氣との滋養を補給するに過ぐる者はない。穀氣は飲食より生ずる。國家あつての萬民とし、萬民あつての國家とはせぬが如く、生命保存的の飲食とせられ飲食の爲の生命保存ではない。故に飲食は謹まねばならぬ。現下國民の多數が尪弱に赴き夭折を急ぐは誤れる榮養的邪食に流れ、享樂至上主義に憧るゝ不謹慎不心得に歸因せずんばあらず。是は一椀の飯も一盞の酒も是れ吾人が生命の素、天祖の賜ものでふ純真な至誠に飲食せねばならぬことを忘れず、又唯飲食の爲めの生命なりてふ浮薄なる心得違ひを改めねば國民の健康は保有せられぬ。如何に文化とか向上とかの美辭に誘惑せられての誤想とは云へ、三千年以降祖先が辛苦經驗を累ねた結果の賜ものである本邦固有の食養の正道を、無雜作に抛て土芥視するは亦思はざるの甚だしい者ではない乎。

抑も國は其方域に因て界られ、方境は地域と天候との偏頗するに因て各其習慣が馴致せられ、之に由て生を稟け之に由て生を遂ぐる。然るに近代物的科學の進運に會ひ機械の精巧を極め、のみならず交通の至便に乗じて生活の方式に變化を來たしたるは亦已むを得ぬ狀勢なり。とは云ふものゝ畢竟は末を遂うて本を知らぬ指導者の無識に禍せられた者にして、要路は深く反省留意せねばならぬと思はれる。

次に大氣を意義ある滋養化たらしむるは調息より善き者はない。調息とは呼吸を調攝して吸收する大氣を閉息美化し、邪氣即毒素を呼出して滿身八萬四千の毛孔より雲蒸霧化せしむる、仙人が喫霞と云ひ、儒佛が靜坐坐禪と云ひ、新式の深呼吸と云ふも此呼吸法を知らぬ調息の變名たるに過ぎぬ。而も近來は新機軸を出したかの様な宣傳を聞くが、畢竟醫道の調息が簡にして要を得、味へば味ふ程、其旨さの程が知られぬには及ぶものではない。

蘇東坡氏は曰ふ「藥は能く疾を醫するが人を養はず、食は能く人を養ふが病を醫せぬ」と。藥物は凡て偏性偏能である。例へば人參は至極上品な藥物である、若し之を氣血の衰へた者に用ふれば則ち其異能を現はす、而して之を用ひて猛烈な毒素を驅逐せしめんには其用を爲さぬ、又若し之を元氣の充實せる壯健な體質に施せば鬱氣を起して却て害毒を醸す媒介たるに至る。藥物に能毒ありと謂ふは唯其偏性偏勝の用ひ方の如何に因るのみ。近來醫界に若返り方が流行して種々なる藥物を試用する、是は人命を玩弄物視する者にして言語道斷、其罪や輕からぬ、實に醫道の神聖を汚す外道魔法として排斥せねばならない。尤も支那でも上古より不老長生などの美辭を冠らせて隨分と盛んに極端に研究して、王侯貴人富豪を誘惑し欺瞞した者であるが、此法は固より邪道として常に擯斥せられた試験濟落第的代物である。併し人生を苦界とか罪の子とか悲觀せねばならぬ不幸なる境遇に生れ會はせた民族が心遣りの樂事とすれば亦以て聊か恕すべき點もあらん乎。清新な樂觀可能の皇國民族にして時世遅れ時代錯誤を新研究と心得るは堂々たる醫界の耻辱であるまい乎。



### 第六節 中心の確立は心身の健全

父道に由て子を育する、子に育てさせて貰ふのではない、親は子の扶養を責めぬが子は家の柱となつて自ら親の杖となる。君主宰輔は政道に由て國家を治する、庶民に治めさせて頂くのではない。君主が天職を行つて自ら萬民は仰望する。醫道に頼て疾病を愈す、患者に愈させて貰ふのではない、其報酬を目的とせねど自ら生活に安定がある。是れ自己の傲慢ではなく、責任の重荷に感じ神聖に自重し職分に權威あらしめてこそ、茲に家にあつては慈父となり、國にあつては民の父母と仰がれ、醫師として仁術の實も擧げられる。利己本位は商家の積弊にして若し之に習へば則ち商的行爲が自ら利己に墮するに至らん乎、必ず家道は興らず、必ず國家は亂階を醸し、必ず保健は期することを得ぬ。

心藏の機能が旺盛なれば則ち耳目や内臟其他重要な機關より無數の細胞まで、心藏を中心に活動するから身體の強健が保障せらる。若し中心と仰ぐ君主がなければ國家は成立せぬ、永續可能的中心がない國家の萬民は天恵に浴せられぬ最も可憐な民族と弔はねばならぬ。支那其他の各國は逐鹿爭霸篡奪侵略が走馬燈的に繰り返されて史の頁を賑はす否汚してゐる、其生靈の痛苦辛酸は我國民の到底想像にも餘りある所と爲す。かく各國の萬民が常住に塗炭の苦を嘗めさせられて暫時も肩を息め安堵の生活が容易に得られぬは、畢竟各國は孰れも一時的君主や入札的主權の假設的變動的中心に向うてゐるからである。さて支那は三皇より清朝に至る二十四姓を代へ約五千年を經過し、其間に周の中葉を除く外は二百年と云ふ治平を得た史跡を見ない、

而して今日中華民國の形勢は猶ほ未だ混沌時代を脱せぬ。己を以て他を推すが吾人の常情とは云へ、我國體國俗觀念を以て支那に及ぼす外交に成功は斷じて望まれぬ。支那を知らんと欲せば先づ詳かに其歴史を觀よ。西歐の建國は其久しき者も僅に五百年を出でぬ、而して其間干戈相交はりて太平の謳歌など思も依らず、恐らくは永久的に聞くことを得られぬであらう。是皆各國孰れも其確乎不拔的君主が主宰せられぬが爲にして蓋し亦已むを得ぬ推移なりとは云へ、其民族の不幸は是より甚しきはなかるべく、有爲變轉の世の中と云ふ嘆聲を漏らすもあり、民權の保障を強請するもある所以は實に茲に胚胎する。西歐と交際せんには其裏面觀に注意せば良風は馴らし難くして卑俗に墮し易いことが明亮に點頭せらるゝであらう。

翻て試に皇朝の史を繙いて見よ、最近の徳川幕政すら皇室を背景に頂いて三百年の治世を贏ち得たでない乎。是れ上に神孫一系の天皇が統御君臨あらせられ、譜代の臣族は匪躬の忠節を抽んで皇運を扶翼し奉るに依り、萬民は現神を欽仰して鼓腹の享樂があり、馴致して以て今日に至ても猶ほ其餘澤に依り、政黨の秕政を侃諤し赤賊の横行を憤慨し國家有事の時には挺身殉難を覺悟する者の勝て數ふべからざる潛勢がある。是れ實に大義名分推戴奉公が民心に浸潤することの遠く且つ深きを知るに足り、世界無二の誇りを獨占飽有する國體が固成せられた、現に「十閩の大木は一夜には成らぬ」とこそ、我悠久なる國史は畏くも此尊嚴な國體の淵源を物語つてゐるではない乎。

第七節 眞理の兩方面

宇宙の眞理に不易と變易との兩方面がある、能く之を辨知して誤用せぬやう爲さねばならぬ。太陽が朝に東海に出で、夕に西山に没するは萬古不易である。太陰には朔望があり上下の弦月があつて月々に其盈虚の變易を示してゐる。我日本民族の穀類は米、麥、粟、稗、玉蜀黍、菽に於けるは生涯不易の主食物となつてゐる、故に穀食は日本人の最貴最重なる生命と云ふべく、若し輕率に之を易ふれば則ち貴重な生命の資料を喪ひ隨て羸弱となり早夭する。見よ病後の滋養に牛乳や鶏卵の専用では容易に肥立たぬが、重湯より漸次に稀粥に進めて行けば、暫時の間に元氣付いて床上げの祝ひを促進する。穀類は其時節に當つて種子を蒔けば即ち必ず發芽する活素豐有の生命體なるが故なり。而して副食物たる蔬菜鱗介鳥獸の屬は其四季に應じて成り出づる物を調理して食膳を賑ふす、毎日毎週毎月に種々と品類を變易して新らしい生き生きした所を選擇して賞味し嫌厭せしめぬ。「時ならざる食はず」と云ふは間食の誡めだとも云ふが、其實は季候はづれの物や時日を経過した物や人工を加へ過ぎた者は、滋養とならぬのみでなく却て毒素繁殖の種を播くに均しい。珍味とは其字の示すが如く珍しい物であるから、少々を玩味するよりの意味なるを忘れ、黄金に任せて貪食するなど非衛生の骨頂と謂はねばならぬ。からして古來上流には虚弱蒲柳の者が多く、中階級以下には頑強鐵腸の者が多い所以も此の消息を語る者ではない乎。さて日本人の主食物は太陽の不易的と副食物は太陰の變易的と其理が合一し、太陽が人類の積極的生命體であり太陰が人類の消極的生命體であるから、唯副食物

のみでは生命を繋げず、又食傷と云ひ中毒と云へば必ず副食物に原因するに見れば思ひ半に過ぐるであらう。此理は各方面にも推し擴めらる、織る機の縦糸は不易にして之を經と云ひ、織込む横糸は一梭一篋にて變易する之を緯と云ふ、以て綾でも錦でも麗はしい模様は織出される。

日の本の倭心を縦にして

世々織り出す綾錦はも (拙詠)

我等が景仰せる菅公は倭魂漢才てふ至言を示されて教を後昆に垂れさせ給ふ。倭魂は國家と生命を共にする萬代不易的でなくてはならぬ。而して外來の技藝智能は時に應じ勢に鑑み、其長を採つて文質彬彬たる國家を修理し固成せらる。而して倭魂の遊離するは則ち心藏官能の喪失に比すべく、若し心藏が一たび官能を失へば則ち白痴癡狂の存在たるに外ならぬ。醉生夢死の境涯にも及ばぬ製糞機的生命體は、猶ほ土地に人類が雜居して何れの版圖にせられても何れの屬地にならうが、我不關焉とし唯命是れ從ふ的勞役に服する牛馬の群の如く然りと云ふべく、性根玉のない一生は奴隸生活に甘んずるより外に道はない、嗚呼意義なき生命體なる哉。

倭魂は大和言葉となつて發露する。總じて國語は各地各所其發音を殊にし其言語を異にす、古傳に「太初に道即言葉あり、言葉は神と偕に生る、言葉は即ち神なり、萬物は之に由らで造られたるはあらし、之に靈あり、此靈は人の光なり」と言擧げせらる。是に由て見れば國民と國語とは相離るゝ者ではなく、又相離すことも不可能な者である。此不易性たる國語を改造せんと企つる不自然な人爲的施設は、唯徒勞に屬するの

みでなく國家精神を亂だし、國家を陥穽に導く不忠實な無責任な行動と爲す。即ち國語の盛衰は國家の興亡に深甚な關係があるから、古今東西孰れの國家にして國語の尊重に懸命し國語の愛用を獎勵し國語の保存を計畫せぬはない。支那の國語が驚くべき變遷せるは其五千年間に二十四姓の君主を替ふるに見て推知すべく、其他の各國も御多聞に漏れず三百年前の國語が今日に適用してゐる國家は一國もなしと云ふ。我等日本人より之を考ふれば實に不思議な程に驚かしい、是れ皆不易の君主が機能を失うて國家の機關が變易するに基因す。永續性國家として其國語を忽諸に付すべからざるや斯くの如く其れ明かである。

抑も我國體は、天祖の御遺訓に遵由あらせられ代々の列聖は必ず和歌に御好尚あらせらるゝに掟てせらる。故に素尊が出雲の詠は國民に膾炙し君が代は國歌として兒童にも唱歌せらる。神代以降の國語が率土の濱に迄普及し通用せるは唯一皇國の特有にして宇内に其摸擬し得る者があるを聞かぬ。是れ一系萬世に御統治あらせらるゝ神孫の列聖が、現神として高御座を正しうさせられて、特に國語を尊重あらせらるゝ深き御神慮の賜ものたるに外ならぬ。

國家的より云へば倭魂即大和言葉、國民的より云へば穀食が太陽運行の不易的と相比せらるゝを、若し之に悖り之に逆ふた施設に心志を盡して成功したならば、則ち同時に國家は壞崩し國民は尪弱となる。次に政策は時に鑑みて斟酌し臣族は世に應じて更迭するは太陰の變易的に倣ふべく、故に君主と萬民とは不易性にして飽く迄も易ふることの不可能なる者と存知せねばならぬ。「國亡んで山河あり」と云ふ、勿論廢墟を見て多情の詩人が世の榮枯盛衰を觀じた者であるが、國家が滅べば則ち帝都も王城も破壊せられ寶器も婦女も掠

奪せられ、恰も女王を失ふた蜜蜂の群が絶滅するが如く、殺戮を免れた殘民は顛沛流離して終に亡民化する。嗚呼戰敗國の目も當てられぬ慘狀を思ひやるだに慄然たらざるを得ぬ、而して茲に唯山河のみ殘ることとなる。是だから國家は常住に總動員的緊張して君主を不易的に守護して國家を萬古に維持すべく指導せねばならぬ、此の大所高所より鳥瞰せば黨利黨益は意味を爲すまい。

一滴絶えずしづけばそこひなき

淵とはなりて龍も住むべく (拙詠)

「積水は龍を生じ、想を積み神を生ず」と云ふ、世間では固陋と誇るであらう變人と嘲けるであらう、然も些か介意せず専念に「積み崩れ、崩れば積む」、同じ事を廢めず撓ます不易的に繰返してゐる。「之を思ひ之を思ひ之を思つて通せずば鬼神が將に之を通せんとす」と古人は教ふ。事を累ぬる時間の經過に伴うて自ら其職業に妙味が起り其手腕に確信が乗つて、其技術の出來映はやくに神韻が印せられる。凡百の發明創見も神示的に湧出し來て成功の曉には偉人名工の譽を贏ち得る。事業を猫眼的に幾度も變易する者が古來何事をも成就させた例は餘り聞かぬ。近來輕佻の弊風に煽られて新奇な事業に依り一攫千金を夢み、折角に生活の安定が保障せらるゝ祖業を相續するは、雪隠を長旅と心得る意氣地なしとの淺慮に依り、それも次男坊ならば兎も角とし、異材の發憤か若しくは落伍の逐電か、此等の少數者に眞似て輕率にも續々と郷關を飛出し、世智辛い都市の渦巻きに身を投じ道に迷ひ産を破り還るに家なく泣きの涙の後悔は臍を噬めども追付かぬ者が失業の群に雜沓す、嗚呼傷ましからずや。

日本人は穀物さへあれば身體は健康に生命は長壽す。故に穀類を主食物と云ふ、穀物は味が平淡であり氣の偏勝も頗る少く即ち所謂中性に近い。是に頼て不易的に日々生涯を通じて繼續すれば、其消化せられた成分が清く且つ美なる血液化して身體を滋養するから、溫雅にして且つ高潔な優秀的性格が發揮せられる。此平淡な穀食を不易的に厭かじめぬは則ち變易的副食物補助の賜ものとせねばならぬ。生命の料に唯稀薄な粥をのみ啜つても其日を凌いでゐる、哀れな此犖獨的可憐な階級も現世には少くはないのである。苟も人文が進み火食を可能化せられては、成らぬ者は是非がないとして、成る者には胡麻鹽の握飯に澤庵では満足に不易的の穀食は續けられぬ。茲に蔬菜鱗介鳥獸を鹽梅料理して主食物を補助し生命的穀類を續行せしむる。併し「肉は多しと雖ども食の氣に勝たしめぬ」戒を忘れ、奢侈に流れ身體を害してはならぬ、國家も君民の不易なるに臣族優秀の變易的變理があるので日新の興隆が現せられる。

同じ事を繰返して飽きが出るは人情の通有である。「民を作新す」と云ひ、「民を飽かしめぬ」と云ふ。變易的副食物の料理に依て先づ目に鼻に快感を唆かして、口に入れて美味に舌鼓を打たしめてこそ主食物は生きる。倭魂の涵養や國語の保護には變易性の制度に依て、餘弊が生じ民の厭いてゐる者を改革更代して、民心を作新し民の耳目を轉化して不易性を維持して行く方法を講せねばならぬ。三十年を一世と爲す、如何なる善政でも良法でも三十年を経過せば必ず餘弊は生ずる、之を盡とも名づくる。抑も大勢に順ひ流行を逐ふは強ちに貶すにも及ぶまい、さりとて程度を越え中道を失ひ本源を忘れぬやうに充分に警戒を加ふるは當路の指導に待つより外はない。

嘗て光格天皇は皇朝の式微せるを深く叡慮あらせられ、是れ畢竟は公卿が不學無識なるに因すとの思召しより學習院の創立が成立つと仄聞す。茲に公卿の子弟は集ひて帝王的治國經世の要道を研修せられた。故に明治維新復古の天業翼賛は實に此處に胚胎せる者と拜察せらる。即ち維新の志士は公卿の指導を仰ぎ公卿の背景を恃まねば、彼等が幕末に於ける彼の目覺しい活動は不可能なりしを見逃してはならぬ。然るに明治中葉に至りて華族の平民化が高唱せられ華族が下情に通すること、華族の平民化とを混同させてはならぬ。其學制を改革して普通のと爲し且つ家庭の素質を異にする富豪の子弟をも混淆せしむ。是に於て當初學習院創設の御軫念は没却し了せられたるは、洵に返すくも恐懼の至りに堪へぬ。手足が耳目の用を爲さず、又耳目をして手足に擬せしめんとするは所謂冠履顛倒、此見地より考ふれば華族の民衆化は意味を爲さぬ。のみならず、餘弊こそ生ずれ其益する所を認められぬ。現在の華族の墮落振りでは到底皇室の藩屏は唯其名のみに過ぎずして、民衆の彈指する實際を現するに見ても知られる。

## 第八節 道と術と

道は形而上學に屬し術は形而下學に屬す。惟心と云ひ唯物と云ひ靈と云ひ肉と云ふ。皆是れ相對相關的の者にして分離して論せられても其實際的分離は固より不可能事に屬する。靈は形に寄らねば其用を爲さず、猶ほ火が物に麗かなくては光も熱も形はさぬに均しい、又靈を宿さねば物は冷灰して電子に還元する。而して宇宙の現象を造化の幻影と云ふ。造化の映する所が萬物となつて形はると云へば、太靈は悉く萬物を支配

する。影の形に添ふが如く萬物は造化の意思に動く。故に神的心が清ければ則ち物的の身も亦美しく、心が邪なれば則ち身も亦醜し。此美醜は固より輪廓的美醜ではなく氣品の高劣を指す。既に言葉を意思の發露とすれば目出度しと云へば則ち目出度うなり、悲しと云へば則ち悲しうなり、爲せと命せば成立し駄目と歎かば荒廢する。故に言葉は氣運を起して善言も禍言も必ず形骸に影響を及ぼさぬはない。然らば宰相も教師も醫師も苟も道を學び道を修め道に生き道に死する者は、先づ其心を洗うて其職に従事せねばならぬ。故に治者に絶對的意思の發動があるから被治者に絶對的信賴を起さしめて、宰相は勞せずして外國の使節なども先づ威壓に屈し樽俎の折衝も容易である。教師は勞せずして育英の成績が實現せられ、醫師は鍼灸藥餌を借りなくとも治病が奏功せられる。手を握つて治するも亦未なり、暗示を與へなくとも其眼光即其靈氣に觸れて直に快感を唆り苦惱を忘れしむ。如此は餘りに高尚に走つて固より萬人向きではないが、苟も道に志せば此の理想を徹底的實際化せんことを期待せねばならぬ。

方員の器を製するには規矩準繩を要する。藥劑を處し鍼灸を施すには方式法則がある。故に道に率ひ方を製し方に由て鍼灸藥餌を用ふれば、則ち宿痾痼疾も平愈せぬはない。茲に靈が働くには肉體の器を要するが如く、治道に形式が缺くべからざることも知らねばならぬ。即ち道德禮儀や法度刑政も治國の要具たるに外ならぬ。眼も耳も舌頭も手指も治病の要具にして其機能を發揮せしめ、其確信が靈的妙技化の現顯となる。靈より要具を靈ならしむると、要具より靈的作用を起さしむると其差こそあれ、原因より結果に及ぼすも末梢より中樞に至るも、遠心求心相關の理に乖かぬ。道の術に於ける豈に歸一する所なからんや、之を用ひ之を

神にする妙用は唯其れ斯人の手腕に存せんのみ。

### 第二章 受病の次第

#### 第一節 總 說

吾人が調息法に依て吸收せる大氣を淨化し、正食律に依て攝取せる穀氣を醇化せば血脈の循環は常規に従ひ體氣の充實は旺盛を來たし、以て先天の動氣が滋補せられて、外邪の襲撃を退け菌毒の傳染を拒ぎ病魔の發生を禁じ、皮膚には光澤を帯び心神には活氣を滿たし、世を没るまで病患に罹らす生る涯りは痛苦を知らぬ。人類の幸福は亦是より大なるはなかるべし。若し夫れ放肆にして攝養を怠り疾疾に罹つて鍼灸を要し藥餌に親むは、猶ほ渴を覺えて井を掘り戰に臨んで艦を製し兵を練る者と何ぞ擇ばん、亦遅い哉、抑も末である。

既に天地が萬物の父母であるからには天地の變動は、必然的に萬物に正邪善惡美醜が一として悉く其影響を與へずにはゐない。

抑も天は風、暑、濕、燥、寒五行的無形の動的活氣を運轉し、地は木火土金水五行的有形の靜的生物を現出す、夫れ十干を甲乙丙丁戊己庚辛壬癸と爲し、十二支を子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥と爲し、

申金酉金戌土亥水と爲す、而して地の六氣は陰土を敦厚ならしめて四維に配し、天は風厥陰風木熱少陰君火濕太陰濕土燥陽明燥金寒太陽寒水に相火少陽相火を加へて六氣とするは陽熱の作用を分けて二にした者である。

地は陰なり靜的を主とする。故に四方東西南北四隅巽坤乾艮に定所があり、四季春夏秋冬土用も定時がある。而して天は陽なり動的を主とする、故に六氣は始終に運行して姑くも息まぬ 春溫夏暑秋涼冬寒は地の靜的に則つて不易であるが、天の六氣は動的運行に依て溫暑涼寒に變易なしとはせられぬ。即ち春が來ても寒かつたり冬になつても暖かつたり、夏に雪を降らしたり秋に花を咲かせたりする。天地の兩氣が和合する時を平年と爲し、天氣が地氣に先立つて至るを太過の歲と爲し、天氣が地氣に後れて來るを不及の歲と爲す。甲子に始めて癸亥に終る六十年を一紀とし、之を目標として測定の概略が推歩せらる。天の必然律より推せば夏至には太陽が北至し冬至には太陽が南至し、春秋兩分には太陽が赤黃兩道の交叉點に至る。然るに六氣の運行は天の自由律なるにより、中和と太過（有餘とも云ふ）と不及（不足とも云ふ）とが生じて更に一致的確定せぬ。其確定せぬは即ち厥陰風木少陰君火太陽濕土少陽相火陽明燥金太陽寒水と云ふ順次的運行の遲速があるに由る。かく運行は順次的であつても其歲に依て遲速を生ずる爲め、中和の歲もあり太過の歲もあり不及の歲もあつて、地氣と和合せぬから不順の候を致し、例へば天氣が溫暖であれば冬季でも蟄蛇が姿を見せ、雹氷が降下すれば仲夏でも木葉が凋落する。此時に當て人畜も此が影響を受けざるを得ぬ。氣候の急遽な變易は災害の因を作し疾病の機を成す。動植は不易の必然律の支配を脱せられぬから之が災禍を免れぬが、併し人類には變易的自由律を特有して意識商量がある。

觀と云ふ鳥は平年は好んで巢を大樹の上層に造り風ある年は其中層に造る、而して其巢の上下に見て無智の蠻人は其年の風信と爲す。豚魚の浮び方を見て無識の船頭は風向を豫知する。鯨は地震を教へ鼠は火事を告ぐと云ふ。況や蠻人船頭ならざる者が如何で災害を豫知し之が防備を策せずして可ならんや。昔時の軍師は運氣を望んで帝都の人口を知り陣營の兵數を測りしと云ふ。人類が國家を成し其組織せる團結集合の中空には居民の密度に應じ必ず勢力叢聚の人氣が立つべく之を運氣と名づく、此氣氣や固より常に天地の六氣に交流してゐる。知事とか君主とかは大小の等差こそあれ、此氣氣を統御してゐらるゝから、此權威に依て陰陽を變理せられ、早魃に雨を乞ひ露雨に晴を祈て其効果があるは、強ちに不經荒誕即ち未開とか迷信とかの行爲と貶すは、却て自己の無智無信を告白する者と謂ふべし、亦耻辱ならずや。

神は形を憑りて形を生ずる、然らば人間の胎産も天授と謂はねばならぬ。其智鈍も貧富も貴賤も天壽も強弱も其生るゝ年月日時に因縁があるかに感せらる。天地の變化に發生する正邪の氣に觸れた者と然らざる者と、よし觸れて其幸福と傷害とに劇甚なる者と然らざる者との種々差別相がある。運氣論を細心に探究せば必ず首肯せらるゝ所があるであらう、而して大要は右の理に外ならぬ。

第二節 外 因

天候の劇變に遇うて病むを外來の賊邪と爲し外因病と名づく、即ち之を受病の第一原因と爲す。此外因的天候の劇變に遇うて病む、是れ人類が不可抗的疾患とせねばならぬであらう乎。霖雨や大旱も極寒や疾風も

酷暑や濕鬱も悉く人身を害せぬはない、之を豫知し之に留意し之を豫防する方法が其宜しきを得て、且つ周到なれば必しも此病魔に侵害せられる憂苦はあるまい。唯醫家は其歳運巡行の變動に觀察して之が學理的豫測を公表する責任があるべく、而して爲政の局に當る者が醫家の建言を採納し萬民に命じて之が實行を強制せねば其効果は齟らさぬ。個人的醫家として如何で庶民の罹病を豫め普遍的に救済することが可能であらうか。

天地陰陽の氣が交流して時々刻々に無數無限の毒素をも醸成させ傳染性病化してゐる。之に就て政府は衛生の心得を宣傳し春秋二季に大清潔を勵行させ豫防藥液の注射を強要し、而して巨萬の國資を投じ其効果を擧げ得ぬは、必ず何處かに缺陷があることを反省せねばならぬ。百尺竿頭更に一步を進め研究の方法を轉じ、其毒素發生の輕減する策を講じては如何。

### 第三節 内 因

人類には既に理的意識商量する特有性が賦與せられてゐる、且つ複雑濃厚な情的纏綿もある。儒家に喜怒哀樂と稱へ佛者は之に愛惡慾の三を加へて七情と爲し、醫道では怒、肝喜心憂と思、脾悲肺驚と恐、腎、此七情を五藏に配し先天的腎と後天的脾とは驚恐と憂思との二方面の作用がありとせらる。人類が相合ひ相集つて家庭を結び社會を成せば、客觀的環境の關係から自然と物に觸れ事に當て、腦裏に絶えず波瀾が起り七情に感覺が動くは亦已むを得ぬ常情である。此に病原を誘致するから之を内因病と謂ひ受病の第二原因と爲す。

英雄は喜怒を色に現はさぬと云ふ、概して豪傑は鈍感であり兎角世間に云ふ常識を脱してゐる變物が多い。才子肌な氣轉は利かず御上手は出來ぬ至極世情には迂遠な代者である。故に常人の喜びとし怒りとする所は變物豪傑には喜びとも怒りとも感せぬから顔色に動き出でぬのである。畢竟其喜怒する所が凡人とは頗る異つてゐるのである。幾ら傑物でも其喜びに會ひ其怒りに觸れたならば必ず人一倍甚だしく其顔色に顯はれずにはゐない。例へば凡人は山吹色の光に恍惚となるが、黄金の鑣くわでは馴らされぬが逸物である。「怒る者は人の常情、笑ふ者は測るべからず」と云ふ、「無禮者め」と嫉視し、甚だしきは拳骨を振り上ぐるが多數である、然るに平氣で股を潜ぐる韓信も居る。

怒にも種類がある、總じて怒れば毒素が分泌して細胞を惡化する。怒れる爪の痕は其疵が泡着して容易に愈え難い、狂犬の咬毒は恐るべく怒れる熊の膽は効めが著しいと云ふ。嫉妬の怒りは穴を二つ掘る行爲をも敢てする。而して激怒の極は肝火が熾烈となり血熱を沸溢させて所謂自家中毒を起させ痘を背に發し吐血して殞れるもある。謀士楚の范增も漢の大將軍周亞夫も佛の提督クルールクルールも其例に數へらる。(肝)

笑ふ門には福來ると云つて喜びは餘り害をなさぬやうに見えるが、さりとて極度の喜びも心の官能を失ひ或は手の舞ひ足の踏む所を知らず、或は人事不省に陥り、甚だしきは腑が抜けて痴呆ともなる。亭主が喜びの笑顔は一家が波靜に暮らせるから、楫取りの女房は骨が折れても風向きに油斷をしてはならぬ。君主の喜怒が一國の浮沈安危に係るから、昔時は御側に侏儒や御茶坊主の御氣嫌取が常に侍らしてあつた。(心)

憂思は多くが生活的實際問題に關するから、鬱屈して脾胃を傷害し飲食の消化を惡化する。此意味よりし

て喫烟なども強ちに排斥すべき者ではない。(脾)

代りのない親を喪ひ又は最愛の妻や子を失ひなど、一家の不幸の悲嘆に沈呻して生氣を毀損し神經を衰弱させ、肺勞を醸成するに至るもあり、其他種々の病因を爲す。(肺)

嬰兒は驚いて癲癇ともなり、婦人は恐れて發狂するは大震災に見ても著しく、腎を傷め腰を抜かし不安病ともなる。(腎)

「喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ひ、發して節に中る之を和と謂ふ」と、七情の發作が調節を失はず中和を得れば害毒は身に及ばぬ、怒りを遷したり喜に荒んたりなどして兎角偏し易いが人情の自然である。故に「悲んで傷らず楽しんで淫せず」との誠も垂れられた所以が解せられる。少數の上智の人は平素に意志の練磨、即ち修養する効果に依り、抑情に堪へ制慾が可能化せられるが、上下大多數の常人には之が望まれぬ。道徳的不文律の制裁が凜とした權威がある時代は、社會は比較的振肅し美化せられ痴情的疾病も減少せらる、是には又大に徳化的薰陶の力を待たねばならぬ。併し今日の制度では教育が普及すれば普及する程、階級が向進すれば向進する程、悪化こそすれ向上など百年河清の思ひも依らぬ。社會の耳目、言論の木鐸を以て任すべき操觚者なども甚だ無責任であり、不中用文士が姦夫姦婦の醜態を三角關係などと劇的に紹介して、風教の悪化を傳播して靦然たる無識者加減には呆れざるを得ぬ。享保の頃に情死が一時流行したことがある、將軍吉宗は「心中は即ち中心にして忠を意味する、痴態の情死に何の忠があるぞ、不孝者不心得者には向後は相對死にと呼ばせ、表立つて葬儀など營むことは相ならぬ」と厳しう布令した爲に遺の情死も火の消えたやうに俄に激減したと傳へらる。

喜んでの病は稀有であり、怒には憤みを思ひ氣を轉すれば病も醸さぬ、驚恐に際會する場合も少く、人生不幸の悲哀も時を経て忘れられて之が爲に病に臥するまでには至らぬ。唯環境の關係や生活の状態に依り憂慮し思案するは、上下に涉り今古を通じ最大多數とせらる。之が爲に精神が鬱塞して消化器を害する病が最大多數となる。聖醫徳本師が往診には先づ其家庭の情狀を診し、米味噌薪炭等を見舞つてから後に脈を執り藥を與へたと云ふ。憂慮思案の身體に及ぼす悪化は實に恐るべく、實に戰慄すべき者がある。故に如何に施設せば民心に安堵が與へられ慰藉を授けらるゝか、是れ古來賢宰相が晝夜に憂慮思案して寢食をも忘るゝ所以の者は實に此の問題に存する。萬衆に生活難を感せしめねば國家に羸弱者は必ず激減せられ、然る後に自ら富國は得て期すべく強兵は得て望むべし。政治家が民の憂ふる所を察して之を憂ひ民の樂しむ所を見て之を樂しむ、即ち先憂後樂の意義は豈に其れ空言ならんや。

因に歐洲大戰後には二十六億といふ未曾有の豊富を示した我國庫であつた、此時調節の緊縮を知らぬ政府は、成るが儘に任せて放漫に付し質實的習慣ある美俗破壊を顧みず、所謂生活の向上を默過し消費を水平上に突破せしめた。又衛生普及の宣傳に依り素人の生物知りが澤山に恐怖病を起して、些かの身體異狀にも、夫れ醫者と云ふ騒ぎ方なる神經性的疾患を増殖せしめた。此二者相關聯せる事情に依り憂慮思案の煩悶が病因を爲すことは、消極的になると積極的になるとを問はず、當局は大に猛省する必要があると婆心する。



## 第四節 不内外因

不内外因病が人類受病三大原因の其一に居る。外因病の餘毒が遺留し潜伏したるが時に逢ひ機に乘じ發病するがあり、衣食住の其習慣を無視したり破壊したりするより發病するがあり、勞働の過度や房事の失節なるに因して發病するがある。かく各方面に涉つての受病であるから亦之を雜病とも稱する、打撲損傷も癰瘍も外科と云ふ名稱はあるが矢張り雜病として取扱はれて善い。併し漢方醫道の分類は飲食に因り胃を害し、勞役に因り脾を傷め、房勞に因り腎を虛する者、即ち後天的脾胃と先天的腎藏とに係る疾病を雜病の主要なる者と爲してゐる。

風暑濕涼寒五氣の邪に中てられ罹病した者が、初に當て其誤治に因て死亡するが、中にはよし生命を取留めても遺留せる餘毒が各種の證狀に變形して發病するがある。或は喘息となり或は腰痛となり或は痞滿となり或は心悸となり或は不仁となるなど其他變幻百出す。一藏若しくは二藏三藏四藏五藏にまで波及し、相關聯して慢性的疾患に馴致せしめ、四百四病は愚かなこと八百萬と擧げて數へ盡されぬ。

次に衣食住は地文と大なる關係がある。先づ衣服は冬は綿入を纏ひ夏は單衣を被ふと云ふが自然的原則である。寒冷なる地域は身體を包み温熱の地境は肌膚を現はす、是れ氣候や境域が然せしむる者にして之が文野の別とはならぬ。只寒暑を凌ぎ體温を調ふるが其本義である。然るに人文の發展するに隨て禮裝の起源を爲し、轉じて華美を競ひ奢侈に流れ遂には亡身家亡國の基因をも爲すに至るは、治道政策が其正邪を辨知

して之を變理せぬに據る。筒袖が寬衣となり長裾が短袴となり時代の趨勢にて幾變遷するか測られぬ。而して和服の衣と裳との縫合の妙味も髣髴されて奥床しう、且つ簡單にして亦世界に無類の誇りの一に數へらる。國家は自給自足の原則に鑑みて如何に活動に便なりとて、衣服の原料を外國に仰がねばならぬ政策は考へ物である。加之非衛生的なるは勿論財政的にも自滅を招來する因たるを氣付かねばならぬ。殊に幼兒は肝氣が旺盛なるに依り其頭部を蓋はず手足を露はにするが、肝鬱を泄らし且つ外氣の抵抗に習はしめて健康の素とせらる。子女を愛する道を忘れて厚く四體を衣被し其發育を妨げ、孱弱に導き醫藥に親しみ鍼灸を施し且つ看護の憂愁に沈むは所謂自業自得、とは云へ尤も深く留意すべく、上流者の多數が常に蒲柳なるに引換へて下層階級程頑丈な體軀を成し、都市と村落とを比較するに比例に洩れぬは適齡の壯丁に見て顯著ではない乎。

次に食事、予は常に「活きた人は活きた物を食せよ」と教へてゐる、之が健康保有の原則である。「子供が啼ても蓋取るな」とは活きた飯の炊き方を語つた者である。摘み立ての蔬菜は味感が別であり漁り立ての魚介は食慾を唆る。蔬菜と魚介とは誰の眼にも一見して比較的新鮮なる者を購ひ得らるゝが、肉類は凡て素人には陳腐の程度が見分けられ難い處に危険が伴ふ。死飯は運命の支配に影響すると云ふ。勝負を争ふ人のみでなく、「鬪を跨げたら七人の敵ある」を覺悟せねばならぬ吾人は一般的に之を嫌はねばならぬ。

生を陽とし死を陰と爲す、陽を温とし陰を冷と爲す、鳥獸は陽に屬し魚介は陰に屬す、鳥獸の肉は概して温、魚介の肉は大抵は冷である、而して食事は保温の調節を最大要件と爲す。故に七十になれば肉でなくて

は飽かぬと云ふ、老人や虚體には少量の肉味は保温に適するから敢て排斥すべきでもあるまい。而して魚介の冷は體熱を調節するが、過食は血液の淨化に妨ぐると知るべし。又寒國は肉食となり熱地は果物が種々として成熟する。温帯に位して四季の循環が完備せる東洋は各種の動植が豊富である、而も殊に穀食が主要と成る。是等は悉く造化の配劑とも云ふべく、且つ 天祖は保食神の身に成りませる穀物を天熊大人が献せらるゝを見まして、「是物は即ち顯現しき蒼生の食ひて活くべき者ぞ」と詔り給ひて植ゑしめられた、是が日本人の穀食を生命とする天啓である。

生命は燈火の如く燃料と膏油とに依て此燈火を永遠に相傳して行く。其燃料と膏油との種類に由て光と熱とに區別が生ずる。是れ多くは地帯の寒熱温涼に關係して、先天的が固定的となり遂には後天的習慣性を馴成す。然るに此天則定理に背馳し逆行して浪りに此貴重な習慣を破壊する人類が天譴を蒙り活氣を失ひ虚弱に墮するは亦免れぬ數である。故に旅行し又は移住するに氣候や水土や食料の劇變に際會せば、其氣候水土に慣れる迄は必ず身體に異狀があつて其健康に影響するも亦已むを得ぬ事實である。彼の西歐人が南洋に居住するは二ケ年を限度として交替するに見ても思ひ半に過ぐるであらう。吾人は如何なる風土にも堪へ凌がるゝやうな肌膚に鍛へ、如何なる料食をも同化させるやうな胃袋に爲すべく平素の修養を怠つてはならぬ。身土不二は不易の原則であるが、葱は岩槻、薑は遠州、緋燕は伊豫と近江、各地の特産異能をも味うて、偶には胃府を驚かし且つ喜ばし置く必要があることを閑却してはならぬ。

次に住、家屋の建築も地方に依て各其便宜に従ひ其形式を異にす。穴居木巢も人文の發展に従うて土藏的

となり木造的となる。土藏作りは光線を遮り通風を妨げ陰鬱であるが、北地は如此せねば互寒に堪へられぬ、人類も從て快濶な氣象に乏しく固陋に流れ易く、僅に音樂の陽調を愛して之を補つてゐる。木造は開放的建築にて之に住む人種は自ら淡泊性が養はれて音樂なども幽靜なるを好尚とする傾がある。只耐火耐震の缺點が嫌はれて我國に土藏的洋館の無趣味な不調和を省みず官衙に採用して民間に奨勵する。是れ思はざるの甚だしき者と謂ふべく、抑も火事は家人が能く細心に注意を拂へば未然に豫防せられて災害を大概は免かれる。激震は五十年七十年長年月間に一回との概測であるから、五十年七十年に新築せねばならぬ心掛して、平素から昔時の江戸ツ子の様に普請金として其準備をすれば、是が却て國産の豊富を來たす素因ともなる。見よ水害早魃の常習的に天災ある地方、又は物資の缺乏して自給自足が不可能な境域に住む人類が、常に貯蓄心に驅られ富有なるに反して、利便な天恵に浴する好位地を占むる居民には巨商豪農が稀有ではない乎。是に由て見れば何に依らず、凡そ人は誰でも平素の心掛けが尤も大切なる模範的行爲とせらる。

吾郷里の松山市は舊來三津町を併せて五ヶ所の氏子に分れ、其大祭には親戚知人が相往來して情味を温め久瀾を舒べ盛に款待した者であつた。新政の始に乳臭兒が地方長官に赴任して神事に飲食の徒費は不經濟なりとの見地から、不敬千萬にも神社に貴い關係の存する由緒を無視して祭日を同一に定めた。是迄は女や子供は固より庶民は擧つて年に一度の大祭を指折り數へて楽しみ、一月も前から所謂御祭氣分となり消極的には家内一同は自發的に儉約を勵行し、積極的には一家の老少までが協力して勇ましく家事を奮勵して、疊替をする障子を張り替る家具を購入し、衣類を新調するなど活潑に振舞ふた者である。然るに同祭日の改令が

あつてからは親戚は來ぬ知人は招かぬ、家具も衣類も疊も障子も間に合せて置く、際立つての儉約もせず職業にも能率を擧げぬ。而して臺所は可なりの馳走して近所隣家と同志打など徹底の泥酔を演ずる。出費は些かの減少なるが生産は頗る増殖せず、親戚は疎遠に流れ知人は無音に終り、勇氣の銷沈をまで清算すると國家的には大不經濟となり、折角の改革は無意義に了つた。大體に通せぬ近視者に政事の調理は望めぬ。緊縮政策は強ちに悪いとは云へぬが、活氣のない緊縮即去勢的萎縮に陥つては國家を衰頽せしむるが、緊張的緊縮ならば寧ろ善政である。例へば理解ある自發的、二食主義は元氣の盛衰に些も關せぬが、強制的若くは貧乏的、已むを得ぬ、二食は能率が擧らぬ。

往昔支那の春秋時代に鄭の子産が緊縮政策を強制して三年の後には國が富んで民が子産を嚴父慈母的に信賴した。國力恢復て奮闘的努力の獨逸の成績に著しく、我朝にも古く後三條天皇近くは將軍吉宗が緊縮に成功せられ、天皇が中途の崩御を、訶れた關白頼道ですら國家の不幸なりと嘆き、吉宗は長壽して豊年も續き米將軍と字せられ享保の治績を謳はれた。而して白河樂翁水野越前此二人の執政は自己が模範を垂れての緊縮振りであつたが中途にして挫折し遂に失敗に歸した。況や近來の内閣は閣員を始め上流モボモガ式驕奢を極めて、只中階級以下にのみ緊縮を強ふる者であるから、民氣は振はず不祥事は續出して惡政の怨聲は都鄙の巷に喧々囂々たりである。

さて體裁の善い様な悪い様な頰冠り式の鐵筋コンクリー作りは、雨量の多い日本では濕潤が勝つて人を傷害し物を腐蝕することが夥しい。日々刻々濕氣浸潤の爲め病菌の醸造に堪へず、軟弱に呻吟し天折に悲歎し

鹹灸藥餌に親炙して不快に一生を終らねばならぬを熟考すれば、國家生産上より打算して其利害は智者を待たなくとも知られる。耐火耐震などは問題ではあるまい。且つ「食は體を養ひ居は氣を移す」と云ふ、洋館に住み洋魂を養ふは謂はれなきことにして崇歐拜米の餘弊の極である。

再び食味、天は陽であるから六氣に君火と相火との二火があり、地は陰であるから五味に淡を加へて土味が二となる。淡味は尤も中和の氣を得てゐる、仙家が鍛鍊して肉體の偏質を除かんが爲に、唯中和の淡味のみ擇んで之を食し以て長生を遂げる。満身の至る所は悉く鹹味を帯びない所はない。唯月窟(舌下)の神水のみは甘淡な味を持つてゐる、仙家が唯一の寶水とし之に頼て其饑を凌ぐのである。併し吾人は唯不易の淡味のみでは天賦の偏質が補足せられぬ、故に偏性の五味に好悪があつても之を互用して經緯の美を成さねばならぬ。而して鹹味は甲乙を擇ばず人體に必須不可缺品であり、次に甘味、次が酸、次が辛、次が苦である、鹹水甘土酸木辛金苦火と相對的に順序せらる。鹹は酸と母子關係にて能く合ふから鹽梅の熟語も生れ、甘は其敵である鹹の少量を得て能力を發揮するは、製菓に少許の鹽を加ふると砂糖が能く効く、苦味なる露の藁や橙皮を煮るに醬油梅干砂糖を添へ、蕃椒の嫩葉や生薑や山葵など辛い物を副食物とするに鹹甘の二品にて煮たり漬けたりする。兎に角に其人の偏質のまに、五味の嗜好を異にすることにもなるが、鹹の普遍なるは先天的腎藏の主どる所たるに依る。而して鹹は貪れぬから過ごせぬに依り大抵は害とならぬ。甘は口に入り易く隨て過ごし易く、爲に常に病を醸すに媒介となる。食事は腹八分との古諺もある、食が少きに失したからとて決して病因を爲さぬ、受病の多數は過食に原因する。況や暴飲暴食は人身の大害、生命の強敵、暴折の

素因を爲すと知るべし。而して此傷食が萬病を誘致する基礎ともなる。故に東洋醫家の診察は切脈に正邪の虚實を斷じ、腹候に脾胃の強弱を窺ふ。料理法は漢族が五千年來文化の粹にして世界に無比を誇る、而して食料の豊富なる東洋人は食道樂に耽つて、多數が脾胃を傷める傾を持つてゐる。受病の因が食事にありとすれば、口腹の慾は如何にしても謹まねばならぬ。

又風雨寒暖が常規的に行はるゝ地方の民族は、比較的規則に循る天賦に恵まれてゐる。故に西族は動物的必然律のまゝに生活せられ、其飲食節約の如きも容易に行はれる。是れ根が水草を逐うて遊牧を事とする民族の發展なれば、料理法などは素より腦漿を絞つて迄工風する餘暇もなく、又物的材料が貧弱なるに關係して習性となつたかも知れぬ。而して凜烈たる酷寒の地帯に起居するからには自然と呼吸器の受病は更に夥しいであらう、其醫診に聽診器使用が須要となる所以は實に茲に基く。

さて人體に要する血液にも限度がある、満腹を飽喫しても血液が多量に増殖する所以とはならぬ。唯舌三寸の慾を充たさんが爲め、一つとない身命に大害を招き強敵を致すは思はざるの甚しき者と謂はねばならぬ。粒々辛苦に成る大切な生命體穀物を、且つ天與の難有味をも忘れて魚末に食ふ上からは、神罰に問はれて受病するは理の當然とも云はれるであらう。

「勞役」 激動を誤認せぬ身體の運動は氣血の循環を美化して健康を完からしむ。流水に孑孓が發生せぬに見ても會心すべく、併し過度の勞役は甚しく脾藏を損傷する。明治四十年頃に或る頑丈な鑄掛やが重い荷を肩にして寛歩する位では力が餘ると思ひ、夜鷹蕎麥を内職に深更迄夜露に濡れ車を曳いて二三年を稼ぎ、五六

百の餘裕を銀行に預けたり貸金などして嘻々としてゐた。得意の時代は甚だ短い。間もなく脾胃を傷め神經衰弱に陥り半歳を出ぬ内に、通帳も反古となり證書は返へさねばならなくなり、元の本阿彌の素寒貧、病弱が御土産となつて遣り切れぬと零してゐた。川崎造船所其他好況時の工場では賃倍加の甘餌に釣られ、夜業又は徹宵して一身を誤る者が許多なりしと聞く、八時間制限の議も強ちに無理でもあるまいかと思はれる。さて此八時間が眞の標準か否かは別問題として、洋風に切詰められての八時間は随分に辛抱が出来兼ねるであらう。日本人の一人役は煙草休みもあつたり雑話も込めてゝあるから實際の勞働を洋人とは同視せられぬ。

近來は輕微な病患にも絶對安靜を命するが醫家一般の常套となつてゐる。此命令を絶對に正直に信仰し確守して三年も五年も病院生活をしてゐる者を見受ける。中には肥滿して顔色も好いが疾患は退却せず筋肉の活力を失うて、只目と口とのみを動かして一生の終焉を待つ、誠に可憐同情に堪へない。久しう臥すれば氣を傷めて肺を勞す」と云ふ戒めに氣が付かぬ醫學者もあると見受けられる。重患者は命令がなくとも身體も精神も病苦の爲め動けぬから、自然に安靜的臥幕せざるを得ぬ。然るに輕症の者が身體は命令のまゝに安靜させても、寂莫たる情感、煩悶する精神をも束縛し得られると思つてゐるのであらう乎。食事も自分で執り用便も自分で辨じ來訪者があれば徐に雜話を聞かすも却て氣が紛ざれ、心が慰まれ苦痛も忘れられて治病上に善かりそうに思はれる。人情に迂遠なる醫師を如何せん。

「房事」 物質文明科學萬能より神靈を無蔑し道德を輕視し、聖言を愚弄し、唯一刹那的享樂に耽溺し若返り法などに現を抜かして、其研究に出頭し没頭し毒藥劇石を試味して家をも身をも忘れ、覆轍を顧みぬ白痴は

天道に背馳する罪業により、房事の過度の爲め夭折するもある。陽萎、不隨、強中、女勞疸など種々の罹病に依り不快に餘喘を繋ぎ、あたら天年を空費するは誠に淺ましく又苦々しい感がする。健康にして且つ長壽を希望する者は、興味が津々として盡くることを知らぬ精神的趣味の方面に快樂を轉嫁して、房事を節抑し靈液を徒漏させぬに若くことはない。至囑々々。

### 第五節 結 論

天候より襲はるゝ外因病、七情より發する内因病、衣食住、勞役、房事より起る雜病、此三者は注意と抑制とに由りて生涯受病の禍害に遠ざかれるが、併乍ら食色が天性なる人類に本來的慾望を徒に禁止せよと云ふは、佛者の妻帶肉食の戒律の如く又米國の禁酒法の如きは、理非の論でなく天道に悖り人情を殺ぎ嗜好を奪ふ者にして、苟も豪傑の士でなければ不可能事に屬し、萬人向きでない不可通事と爲す。故に之を精神的樂事に轉氣して其憤憤を洩らす方法を講せねばならぬ。即ち世に娛樂の設けが最大緊要なる所以は茲に存する、通俗的には氏祭、五節句、盆踊り、少し高尚な所では文學美術工藝園藝乃至圍碁將碁など、勞間に嗜むは「猶ほ已むに優れる」のみならず大に氣を轉じ心を養ひ、翌日活動の潛勢力ともなり自暴も起らず自棄も兆さず、頼みある世の中との快感も湧出する。併し飽まで餘りに耽溺して寢食を忘れ病苦の種子を蒔かぬ程度の中和を標準にすることを心掛けねばならぬ。

## 第四章 内臓の機能

### 第一節 概 説

人身の五臓(肝、心、脾、肺、腎)は地の五行(木土火金水)より成り、六府(膽、小腸、胃、大腸、膀胱、三焦)は天の六氣(風熱濕燥寒火)より生ず。天は陽なり、故に六府を陽と爲し、地は陰なり、故に五臓を陰と爲す。十二經脈(手太陰、手陽明、足陽明、足太陰、手少陰、手太陽、足太陽、足少陰、手厥陰、手少陽、足少陽、足厥陰)は月の十二盈虚を表はし三百六十五骨節は日の三百六十五周天を徴はす。骨は金石に象どり筋は草木に象り肉は積土に象り血は河海に象り、兩眼は日月に象どり鼻は山に口は澤に象る。此の如く人身は天地萬有の縮寫とも見られる、故に古來人身を小天地とも稱してゐる。天地の模型即ち小天地の人類が天候や地氣の變動に影響せぬとは誰が信せられぬであらう。皇漢醫道では人類の病因を必ず天變地動に求むるは豈故なしとせんや。今内臓の機能を述べて其天道地徳が人身と如何に不可離的關係があるかを素靈の説く所に遵據して表出せん、從て人類が受病治病の原理原則も自ら默識せらるゝ契機を得ん哉。

### 第二節 素問靈蘭秘典論抽出

心は君主の官なり、神明出づ。

心は一身の主である、故に君主の官と爲す。其藏は神にして其位は南す、此に神明の象がある、故に神明出づとは曰ふ。「心は神の舎なり腦は神の府なり」と云ふ、人が寤れば神は腦に居て萬機を親裁し、寢ぬれば神は心に舎して宴息するを云ふのである。

肺は相傳の官なり、治節出づ。

肺は膈上に居て位が高く且つ君側に近い、猶ほ宰輔の如き者である、故に相傳の官とは曰ふ。又肺は氣を主どる、氣が調へば則ち藏府以下諸官は其節制を聽いて治まらぬはない、故に治節出づとは曰ふ。

肝は將軍の官なり、謀慮出づ。

肝は震の卦である、勇壯にして急なり、故に將軍の官と爲す。肝は東方の龍神と爲す、龍は能く變化す、故に謀慮の出づる所と爲すとは曰ふ。

膽は中正の官なり、決斷出づ。

膽の性は剛直なるが故に中正の官と爲す。剛直なる者は能く決斷する力がある、肝は勇急であるが膽が居なければ斷ぜられぬのである。公私を劃然として區別し斷々乎として處分するが膽の機能である。故に監察官（御目附）や司法官に適してゐる。

臍中（兩乳の間）は臣使の官なり、喜樂出づ。

素問の脹論には「臍中は心主の宮城なり」と云へり、君主に親近するから臣使とは稱へる。凡て藏府の官は王臣にあらぬはない、而して茲に獨り臣と云ひ又使と云ふは、使令の臣たる意味にして内侍の如きを謂ふのである、||さて十二藏の内には臍中があつて胞絡がなく、又十二經の内には胞絡があつて臍中がない。乃ち此の臍中は即ち胞絡なることが知られる。ましてや喜樂は火に屬するに依り此に喜樂出づとは云ふのである。故に臍中を以て心君の府に配することは眉を列らねた

如く明である。

脾と胃とは倉廩の官なり、五味出づ。

胃は納受を司どり脾は運化を司どる、共に倉廩の官と爲す。

大腸は傳道の官なり、變化出づ。

大腸は小腸の下に居て糟粕を出すを主どる、之に由て變化を傳道する名がある。

小腸は受盛の官なり、化物出づ。

小腸は胃の下に居り胃の水穀を受盛し、而して精濁を分け、水液は前陰に滲し糟粕は後陰に歸す。故に化物出づとは曰ふ。

腎は作強の官なり、技巧出づ。

腎は北方に居て骨を主どる、宜しく作強の官たるべし。水は萬物を化生するに依り技巧が出づるとは曰ふ。腰を腎の府と爲す、満身の力は腰に集る、是も亦腎が作強たるを知るに足る。

三焦は決瀆の官なり、水道出づ。

上焦は霧の如く中焦は漚の如く下焦は瀆の如し、三焦の氣が治まれば則ち水道が疏通する、故に決瀆の官とは名づく。



膀胱は州都の官なり、津液を藏す、氣が化すれば則ち能く出づ。

膀胱の位は卑下に居る、故に州都の官とは曰ふ。經に曰ふ「水穀は下焦を循つて膀胱に滲入す」と、蓋し膀胱には下口があつて上口はない、津液の藏は孰れも氣化によりて滲入し、然る後に出づ。

凡そ此の十二官は相失ふを得ざるなり。

此十二官が連絡を失へば相使ふことが出来ずして疾病は則ち作る。

故に主が明なれば則ち下は安く、此を以て生を養へば則ちしづかなが壽く世を没するまであやふ殆からず、以て天下を治むれば則ち大に昌ふ。

君主が明であれば則ち十二官は悉く命を奉じ命を受け活動する。是を以て健康で長生せられる。此理を推して天下を治むれば即ち明君の爲に至治が享けられる。

主が不明なれば則ち十二官は危く、使道が閉塞して通せぬ、形は乃ち大に傷す、此を以て生を養へば即ち歿し、以て天下を治むれば則ち其宗は大に危し、之を戒めよ之を戒めよ。

君主が不明なれば則ち諸臣は曠職し、或は不軌を謀るものもあらん、上より下に及ぶまで相使の道が皆相通せぬは即ち命が行はれぬのである。此が人身にあつては則ち大傷して生命は危く、之が朝廷にあつては則ち大亂して國家は喪はれん。心は陽中の陽と爲す、而して獨り之を尊重する者は、陽が一身の主たるを以て、之を奉じて性命の根蒂となさねばならぬからである。

### 第三節 素問六節藏象論抽出

心は生の本、神の變なり、其華は面にあり、其充は血脈にあり、陽中の太陽と爲し夏氣に通ず。

根本の發榮するを生と謂ひ、變化の不測を心と謂ふ。心を太陽と爲し身の生ずる本である、心は神を藏するを主として變化の原を爲す、心は血を主として陽に屬して升る。是を以て華映は面にあり充溢は血脈にある。心は上に居て陽藏と爲し

又南離☲に位す、故に陽中の太陽と爲し夏氣に通ずるのである。

肺は氣の本、魄の居る處なり、其華は毛にあり、其充は皮にあり、陽中の太陰となし秋氣に通ず。

肺は氣を統ぶるに依り氣の本と爲す、肺は魄を藏するから魄の舍である、肺は軽くして浮ぶ、故に其華其充は乃ち皮毛にあり、太陰の經であつて而も至高の部位に居る、故に陽中の太陰と爲し秋氣に通ずる。

腎は蟄を主とる、封藏の本なり、精の居る處なり、其華は髮にあり、其充は骨にあり、陰中の少陰たり冬氣に通ず。

腎の部位は亥子に居る、職は閉藏を司とること猶蟄蟲の如し。腎は水を主とる即ち五藏六府の精を受けて之を藏するに依り精の居る處とは曰ふ。髮は色が黒くして血の餘と爲す、精が充足する者は血が盈滿して髮は其華を受く。腎の合は骨であるから充は骨にありと曰ふ。少陰の經を以て至下の地に居る、故に陰中の少陰と爲し冬氣に通ず。

肝は罷極の本、魂の居る處なり、其華は爪にあり、其充は筋にあり、以て血氣を生ず、其味は酸、其色は蒼、此を陽中の少陽と爲し春氣に通ず。

筋が勞するを罷と云ふ、肝は筋を主とる藏であるから罷極の本と爲す。肝は魂を藏するを主とる、是れ魂の居る處にあらずる乎。爪は筋の餘と爲す、其筋に充する者なれば宜なる哉華が爪にあることや。肝は血海と爲す、自ら應に血を生ずべし。肝は春升を主とる、亦應に氣を生ずべし。酸は木の味なり蒼は木の色なり。水が春に旺すれば陽は猶ほ未だ壯ならぬ、故に陽中の少陽と爲し春氣に通ずる。

脾、胃、大腸、小腸、三焦、膀胱は倉廩の本にして營の居る所なり、名づけて器と曰ふ、能く糟粕を化し味を轉じて入出する者なり、其華は唇の四白にあり、其充は肌にあり、其味は甘、其色は黃、土氣に通ず。

一藏五府は皆水穀を受ける、故に均しく倉廩の名がある。血を營と爲す即ち水穀の精氣である、故に營の居る處と爲す

と曰ふ。器とは譬へば諸の物を盛る器具の如し。胃が五穀を受ける、之を名づけて入ると曰ひ、脾と大小腸三焦膀胱とは皆出すを主とる。唇の四白とは唇の四圍の白肉の際である。又唇は脾の榮にして肌は脾の合である。甘は土の味にして黄は土の色である。脾を陰中の至陰として分つて四季に旺するに依り土氣に通ずとは曰ふ。六經は皆倉廩と爲し借に脾に統べらる故に至陰の類とも曰ふ。

凡て十一藏は決を膽に取るなり。

五藏六府は共に十一藏と爲す、如何にして皆決を膽に取るであらう乎。膽は奇恒の府と爲す、全體の陰陽を通じ、且つ膽は春升の令を爲す、萬物の生長化收藏は皆是より初を托して命を稟くるのである。

#### 第四節 靈樞本輸篇抽出

肺は大腸に合ひ、大腸は傳道の府なり、心は小腸に合ひ、小腸は受盛の府なり、肝は膽に合ひ、膽は中清の府なり、脾は胃に合ひ、胃は五穀の府なり、腎は膀胱に合ひ、膀胱は津液の府なり、少陽は腎に屬し腎は上、肺に連る、故に兩藏を將<sup>つかさど</sup>る。

此には藏と府と各々合ふ所があつて一表一裏を爲すを明かにしたものである。將は領の意味なり、即ち唯腎のみ兩藏を將領する者は、手少陽三焦の正脈は天を指して胸中に散する、而して腎脈も亦上方肺に連る。又三焦の下輸は膀胱に屬し、而して膀胱は腎の合と爲す、故に三焦も亦腎に合すと曰へる。夫れ三焦は中瀆の府と爲し、膀胱は津液の府と爲す、而して腎は水藏なるを以て水府を將領する、故に腎は兼て兩藏を將領するを得ることとなる。本藏論には腎は三焦と膀胱とを合すとも云うてゐる。

三焦は中瀆の府なり、水道出づ、膀胱に屬す、是れ孤の府なり。

中瀆とは身中の溝瀆たる意味である。水穀が口に入て兩便に出づるには必ず三焦を歴ねばならぬ、故に中瀆の府にして水道出づとは曰ふ。さて本篇にあつては膀胱に屬すと曰ひ、血氣形志篇にあつては少陽(三焦)と心主(胸絡)と表裏を爲すと曰ふ。蓋し三焦の下にある者を陰と爲し膀胱に屬して腎水に合す。又三焦の上にある者を陽と爲し胞絡に合して心火に通ず。三焦は上を際<sup>ぎは</sup>り下を極め象は六合(天地四方)に同じく而して包ねざる所はない。十二藏中にて唯三焦のみ獨大にして諸藏の匹敵する者がないから孤府とは稱す。

難經や王叔和や王啓玄等は皆三焦を以て有名無形と爲してゐるは已に誤りと爲す、而して陳無擇は創めて「三焦は有形にして脂膜の如し」と言ふが更に不經に屬す。

靈樞經に曰ふ「密理厚皮なる者は三焦が厚く、粗理薄皮の者は三焦は薄し」と、又曰ふ「勇士は三焦の文理が横となり怯士は三焦の文理が縦となる」と、又曰ふ「上焦は胃の上口より出で咽に並び以て上り膈を貫いて胸中に布き、中焦も亦胃中に並んで上焦の後にいで、糟粕を泌<sup>しみだ</sup>し精液を蒸し精微に化して血と爲し、下焦は廻腸に別れて膀胱に注いで滲入す、水穀は胃中に居り糟粕を成し、大腸に下りて下焦に入る」と、又曰ふ「上焦は霧の如く中焦は漚の如く下焦は瀆の如し」と。既に無形と曰ふに何を以て厚しとか薄しとか言ふ理があらう、又何を以て縦皺があるとか横皺があるとか言ふ理があらう、又何を以てか霧の如しとか漚の如しとか瀆の如しとか言ふ理があらう、又何を以てか氣と血との別があると言ふ理があらう乎。

當、按ずるに皇漢醫道にて五藏六府の中に古來唯三焦のみが問題化せられてゐる。蓋し漢以降の諸大家が「三焦は名があつて形はない」と云ふを定説としてゐるのである。前段の如く三焦の機能が詳細に列擧してあるより考ふれば、無形の者に機能がある譯がない。まして他の十一藏は悉く有形なるに、唯三焦のみを無形であるとは誰しも疑を挾まざるを得ぬ。



而して清朝の薛雪は三焦の有形を是認し乍ら陳無擇が「三焦は脂膜の如し」と言ふ創見を、更に不經に屬すと貶して自己は如何なる形状なるかを明言せぬは物足らぬ心地がせられる。近來洋醫解剖にある膀胱を以て三焦に該當させてゐるを見る。然らば上焦や下焦の機能を如何に説明すべき、思はざるも亦甚しい、取るに足らない。蓋し内經には「命門は元氣の別名」と云ひ、又一三焦は命門の別使」と曰ふ。元氣の根原とする命門には常に溫暖の氣がある、之を相火と名づく。此の相火が三焦に通じて體温を爲す。飲食が胃に入れば則ち中焦の體温が此の胃中の飲食を腐熟し醱酵せしめ、其繼續する氣を脾藏の機能により膈上に上升せしむ。此の蒸氣の霧の如き者は相火の通する上焦の體温にて心と肺とを潤ほし、露の滴りと成つて腎精を滋補する。此の氣が所謂宗氣又は穀氣と名づくる者である。又胃中に居て糟粕と成る物が小腸に下れば則ち相火の通する下焦の體温が機能を發揮して其小腸が受盛の物を大腸に送り膀胱に滲入せしむる。是の化物が即ち瀉の如き者である、而して此の相火の通する體温を受ける三焦は何者である乎。是れ乃ち前の陳無擇が所謂「脂膜の如き者」が三焦の實體と謂はねばならぬ。然らば則ち現代の所謂胸膜(鳩尾以上)を上焦と爲すべく、腹膜(鳩尾以下膈中に至る)より左右の肋膜を連ねて中焦と爲すべく、少腹(膈中より横骨に至る)の膜より腸間膜までを下焦と爲すべく、而る後に三焦は有形を證せられ經の所謂「唯三焦が獨り大にして諸藏の匹敵すべき者が無いから孤府と稱する」とあるに吻合して、千古の疑問は是に氷解せられた感はある。前の膀胱を三焦とする説の如きは固より取るに足りない、猶ほ後學を待つ。

### 第五節 素問金匱眞言論抽出

東方は青色にして入て肝に通じ竅を目に開き精を肝に藏す、其病は驚駭を發す、其味は酸、其類は草木、其畜は雞、其穀は麥、其四時に應じて上は歲星と爲す、是を以て春氣は頭にあるなり、其音は角、其數は八、

是を以て病の筋にあるを知るなり、其臭は臊と爲す。

易には巽を鶏と爲す、即ち東方なる風木の畜なり。麥の熟るは最も早し、故に東方の春氣に應ず、春氣は上升するから病は頭にあるなり。易に「天三木を生じ、地八之を成すと曰へり」。禮記の月令に云ふ、「其臭は羶」と、即ち羶は臊なり。南方は赤色にして入て心に通じ竅を耳に開き精を心に藏す、故に病は五藏にあり、其味は苦、其類は火、其畜は羊、其穀は黍、其四時に應じて上は熒惑星と爲す、是を以て病の脈にあるを知るなり、其音は徵、其數は七、其臭は焦と爲す。

陰陽應象論には「心は竅にあつては舌と爲し腎は竅にあつては耳と爲す」と曰ふ。此處には竅を耳に開くと云ふ、即ち耳は心腎の二藏を兼てゐるのである。心は五藏の君と爲す、心が病めば即ち五藏は之に應ず。五常政大論には「其畜は馬」とあり、此に羊と云ふ者は午と未とは俱に南方にあるに因るのみ。黍の色は赤し、宜しく心家の穀たるべし。五常政大論には「其穀は麥」と云ふが、麥と黍とは二字が相似てゐるから誤つたのであらう。地二は火を生じ天七は之を成す、焦は火氣の化する所と爲す。

中央は黄色にして入て脾に通ず、故に病は舌本にあり、其味は甘、其類は土、其畜は牛、其穀は稷、其四時に應じて上は鎮星と爲す、是を以て病の肉にあるを知るなり、其音は宮、其數は五、其臭は香と爲す。

脾の脈は舌本に連り舌下に散す。牛は丑に屬して色は黄なり、又易には坤を牛と爲すと曰へり。稷は小米なり、粳なるを稷と爲し糯なるを黍と爲す、五穀の長と爲す。色の黄なるは土に屬するなり。

西方は白色にして入て肺に通じ竅を鼻に開き精を肺に藏す、故に病は背にあり、其味は辛、其類は金、其畜は馬、其穀は稻、其四時に應じて上は太白星と爲す、是を以て病の皮毛にあるを知る、其音は商、其數は

九、其臭は腥と爲す。

肺は胸中にありと雖も實は背に附するなり。肺を乾☰象と爲す、易には乾を馬と爲すとあり、稻の色は白し故に金に屬す。地四は金を生じ天九は之を成す。

北方は黒色にして入て腎に通じ竅を二陰に開き精を腎に藏す、故に病は谿にあり、其味は鹹、其類は水、其畜は麋、其穀は豆、其四時に應じて上は辰星と爲す、是を以て病は骨にあるを知るなり、其音は羽、其數は六、其臭は腐と爲す。

氣穴論には「肉の大會を谷と爲し肉の小會を谿と爲す」と曰ふ、水の流注する所である、易には坎を水と爲すと云へり。豆の黒き者は水に屬す、天一は水を生じ地六は之を成す、腐は水氣の化する所と爲す、禮記の月令には其臭は朽と云へり、朽は即ち腐なり。

第六節 素問陰陽應象大論抽出

東方は風を生じ、風は木を生じ、木は酸を生じ、酸は肝を生じ、肝は筋を生じ、筋は心を生ず（木は火を生ず）、肝は目を主どり、其天にあつては玄を爲す（玄は天の本色である、此には五藏を總言したので専ら肝を指すのではない）、人にあつては道を爲す（道は天を生じ地を生じ物を生ずる者なり、肝は生々の令を主どる、故に之を道に比す）、地にあつては化を爲す（化とは生化なり、無よりして有を爲し、有よりして無に歸す、總て名づけて化と曰ふ、肝は春生を主どる、故に化と云ふのみ）、化は五味を生じ道は智を生じ玄は神を生ず（生意は窮まらぬ、是れ智の由て生ずる所たり、玄冥の中には一物を存せぬ、又一物を外にせぬ、而も名

狀すべきなし、強ひて名づけて神と曰ふ。按ずるに玄と爲し道と爲し化と爲し味を生じ智を生じ神を生ずの六句は、以下の四藏には皆無であるに獨り茲にのみ之れあるは、春は四時を貫き天は四徳を統ぶるを以ての故なり。蓋し五行と六氣とを兼ねて言ふたものであり、特に東方のみを指して言ふたものではない。天元紀大論を見るに此數語あるは亦五行を總貫しての言論であるから其義理は益々明瞭となる。神は天にあつては風となり（飛揚散動して六虚を周流するは風の用であり六氣の首である）、地にあつては木と爲り體にあつては筋となり藏にあつては肝と爲り色にあつては蒼と爲り變動にあつては握と爲り（握は筋の用なり）、竅にあつては目と爲り味にあつては酸と爲り志にあつては怒と爲る。怒れば肝を傷し悲しみは怒に勝つ（悲は肺の志と爲す、金が木に勝つなり）風は筋を傷し燥は風に勝つ（燥は肺の氣と爲す、金が木に勝つなり）、酸は筋を傷し辛は酸に勝つ（辛は肺の味と爲す、金が木に勝つなり）。

南方は熱を生じ、熱は火を生じ、火は苦を生じ、苦は心を生じ心は血を生じ、血は脾を生ず（火が土を生ず）。心は舌を主どり（舌は心の官である）、其天にあつては熱と爲し地にあつては火と爲し體にあつては脈と爲し藏にあつては心と爲し色にあつては赤と爲し音にあつては徵と爲し聲にあつては笑と爲し變動にあつては憂と爲し（心が有餘なれば則ち笑ひ、不足なれば即ち憂ふ）竅にあつては舌と爲し味にあつては苦と爲し志にあつては喜と爲す。喜は心を傷し恐は喜に勝つ（恐は腎の志と爲す水が火に勝つなり）熱は氣を傷す（壯火は氣を食す）寒は熱に勝つ（水が火に勝つ）苦は氣を傷す（苦は心の味と爲す、氣は金家に屬す、火が金を尅するなり、苦は大寒と爲す、氣は陽主と爲す、苦なれば則ち氣は和せぬ）鹹は苦に勝つ（鹹は腎の

味と爲す、水が火を尅す。

中央は濕を生じ、濕は土を生じ、土は甘を生じ、甘は脾を生じ、脾は肉を生じ、肉は肺を生ず（土が金を生ず）。脾は口を主どり其天にあつては濕と爲し地にあつては土と爲し體にあつては肉と爲し藏にあつては脾と爲し色にあつては黄と爲し音にあつては宮と爲し聲にあつては歌と爲し變動にあつては噦と爲し竅にあつては口と爲し味にあつては甘と爲し志にあつては思と爲す。思は脾を傷し怒は思に勝つ（木が土に勝つ）、濕は肉を傷し風は濕に勝つ（木が土に勝つ）、甘は肉を傷し酸は甘に勝つ（木味が土に勝つ）。

西方は燥を生じ、燥は金を生じ、金は辛を生じ、辛は肺を生じ、肺は皮毛を生じ、皮毛は腎を生ず（金が水を生ず）。肺は鼻を主どり其天にあつては燥と爲し地にあつては金と爲し體にあつては皮毛と爲し藏にあつては肺と爲し色にあつては白と爲し音にあつては商と爲し聲にあつては哭と爲し（悲哀すれば則ち哭す、是が肺の聲である）、變動にあつては欬と爲し竅にあつては鼻と爲し味にあつては辛と爲し志にあつては憂と爲す（金氣は燥慄を爲す、故に人をして憂へしむ、憂が甚しければ則ち悲しむ）。憂は肺を傷し喜は憂に勝つ（悲憂すれば則ち氣が消する）、熱は皮毛を傷し寒は熱に勝つ（水が火を制す）、辛は皮毛を傷し苦は辛に勝つ（火が金を制す）。

北方は寒を生じ、寒は水を生じ、水は鹹を生じ、鹹は腎を生じ、腎は骨髓を生じ、髓は肝を生ず（水が木を生ず）。腎は耳を主どり其天にあつては寒を爲し地にあつては水を爲し體にあつては骨を爲し藏にあつては腎を爲し色にあつては黒を爲し音にあつては羽を爲し聲にあつては呻を爲し變動にあつては慄を爲し（寒な

れば即ち戰慄す、恐れあるも則ち亦戰慄す、是が腎水の象である）、竅にあつては耳を爲し味にあつては鹹を爲し志にあつては恐を爲す。恐は腎を傷し思は恐に勝つ（恐るゝ時は則ち足が歩せられない、恐るゝ時は即ち遺尿もする、恐るゝ時は陽物も痿する、是が乃ち其傷する所である）（又思の土は恐の水を制す）。寒は血を傷し燥は寒に勝つ（内經に寒は形を傷す、血を有形と爲す、形は乃ち血である、又燥なれば水が涸る、故に寒に勝つ、若し五行の常規より言へば宜しく土と濕とは水と寒とに勝つべく、然るに濕と寒とは同類である、故に制せられぬ）。鹹は血を傷し甘は鹹に勝つ（土が水に勝つ）。新校正に云ふ、東方にあつては風が筋を傷し酸が筋を傷すと云ひ、中央にあつては濕が肉を傷し甘が肉を傷すと云ふ、是の二者は自傷するなり。南方にあつては熱が氣を傷し苦が氣を傷すと云ひ、北方にあつては寒が血を傷し鹹が血を傷すと云ふ。是の兩者は我が勝つ所を傷するのである。西方にあつては熱が皮毛を傷すと云ふ。是は勝たざる所の者が己を傷するなり。辛は皮毛を傷すると云ふ、是は自ら傷するなり。是に由て見れば五方の傷する所は則ち此三例の不同あるを知るべし。

### 第七節 靈樞本神篇抽出

天の我にある者は徳なり、地の我にある者は氣なり、徳が流しき氣が薄せつて生ずる者なり。

理の天に賦する者は徳である、形の地に成る者は氣である、天地が網こ纏りして徳は下流して氣は上薄す、茲に乃ち人物が生ずる。

故に生の來るを之を精と謂ふ。

來るとは由て來る所なり。生の來るとは即ち有生の初である。陰陽の二氣には各々其精がある。精とは即ち「天一水を生じ地六之を成す」之が五行の最初とする。故に萬物が初て生ずるには其由來は皆水と云へる。昭和七年十月末に野尻祐通氏が或人の改葬に立合せられた、埋葬後二百年以上の者なりとか、棺中に人骨の外は一物も餘すことなく悉く透明なる水であつて之を小瓶に入れ持ち歸れりと、見るべし萬有は天一の水に還元せる理を。易に曰ふ「男女が媾精して萬物が化生す」とは是なり。

兩精が相搏つ之を神と謂ふ。

兩精とは陰陽なり、相搏つとは交媾するなり。易に曰ふ「天數は五、地數も五、五位が相得て各々合ふあり」と。周子が曰ふ「二五の精が妙合して凝る、即ち兩精の相搏するなり」と。神とは至靈至變、無形無象、奈何んぞ之を精搏しての後に得るのであらうか。天元紀大論に曰ふ「陰陽不測なる之を神と謂ふ」と(易の繫辭にも是語がある)。易に曰ふ「變化の道を知る者は其れ神の爲す所を知る乎」と。神とは即ち虛極の本であつて天を生じ地を生ずる者である。乾坤に瀰満する者は之れ是の神にあらざるはない、故に易に「神は方なし」とも云へり。即ち天の天たる所以、地の地たる所以の者である。二五妙合の後に宛然たるは吾人の小天地なり、故に斯か云ふのである。

神に隨て往來する者を之を魂と謂ひ、精に並びて出入する者を之を魄と謂ふ。

陽神を魂と謂ひ、陰神を魄と謂ふ。人の生あるや氣を以て形を養ひ、形を以て氣を攝る。氣の神を魂と云ひ形の靈を魄と云ふ。生あれば即ち魂が魄に載り魄が其魂を檢む。死すれば即ち魂は天に歸し魄は地に歸す。魂を火に喩へ魄を鏡に喩ふ。火には火燄がありて物が來れば便ち燒く。鏡は照見すれども物は燒けぬ。夫れ人が夢に動作しても、其身は常に靜定してゐる、動くものは魂の作用であり靜かなるものは魄の本體である、夫れ精を陰と爲し神を陽と爲す、魂を陽と爲し魄

を陰と爲す。故に神に隨て往來し精に並びて出入するは各自其類に従ふのである。

物に任ずる所以の者を之を心と謂ひ。

神は心に藏すと雖も神は無形にして體は虛なり。心は有形にして物に任ず。乃ち君主の官にして萬有は皆任ぜらる。

心に憶ふ所あるを之を意と謂ひ。

心に已に起て未だ定屬する所のなき者は意である。

意の存する所を之を志と謂ひ。

意が已に決して確然として變ぜぬ者は志である。

志に因て變を存するは之を思と謂ひ。

志は定まれども而も反覆計度する者は思である。

思に因て遠慕するは之を慮と謂ひ。

之を思うて已まざれば必ず遠く慕ふ所が生ずる、憂疑して展轉する者は慮である。

慮に因て物を處するは之を智と謂ふ。

慮つて後に動き、事を處して靈巧なる者は智である。以上五者は各々主とする所の藏に歸す。而して皆心に總統せらる、故に他の諸藏を臣使と爲し而して心を君主と爲すのである。

心が怵惕思慮すれば則ち神を傷す、神を傷せば即ち恐懼自失し、脈を破り肉を脱し毛は悴れ色は天し冬に死する。

神は心に藏してゐる、心が傷すれば則ち神が安からず其主宰する所を失ふ。心は脾の母である、心が虚すれば則ち脾も

亦薄くなる、即ち肉が乃ち消瘦する。毛悴とは憔悴なり、色天とは心の色は赤、赤は白の薄絹に朱を裏むが如を欲し、代緒の如くなるを欲せぬ。火は衰へると水を畏る、故に冬に死するなり。

脾は愁憂して解けざれば即ち意を傷す、意が傷すれば即ち惋亂し四肢は舉らず毛悴色天して春に死する。

憂は本來肺を傷す。今茲に脾に屬する者は子母(脾は母にして肺は子なり)が相通すればなり。憂ふれば則ち氣が滯つて運ばぬ、故に惋悶するのである。四肢は氣を胃より受けて經に至るを得ねば、必ず脾に因て裏くるを得るのである、故に脾が傷すれば則ち四肢は舉らぬ。脾の色は黄である、黄は羅うすきに雄黄を裏むが如きを欲し、黄土の如くなるを欲せぬ。土が衰へたならば木を畏る、故に春に死するのである。

肝は悲哀が中に動けば則ち魂を傷す、魂が傷すれば則ち狂忘して精ならず、精ならずれば則ち正しからず、當に人は陰が縮して攣筋し兩脅が舉らざるべし、毛悴色天して秋に死する。

悲哀も亦肺の志である。然るに肝を傷する者は金が木を伐つからである。肝は魂を藏す。魂が傷すれば則ち或は狂亂を爲し、或は健忘を爲す。不精とは見ることが精明の常を失ひ、則ち邪妄にして不正となるを謂ふ。肝は筋を主どる、故に陰縮攣急する。兩脅は肝の部位である、肝が敗れたならば則ち兩脅は舉らぬ。肝の色は青なり、青は蒼壁の如き光澤あるを欲し、藍の如くなるを欲せぬ。木が衰へると金を畏れる、故に秋に死するのである。

肺は喜樂が極りなければ則ち魄を傷す、魄が傷すれば則ち狂す、狂する者は意中に人を存せぬ、皮革は焦け毛悴色天して夏に死する。

喜樂は本來心に屬してゐる、而して肺を傷する者は火が金に乗するからである。肺は魄を藏する、魄が傷すれば即ち鎮靜せられずして狂する。意中に人を存せぬとは傍若無人を云ふなり。肺は皮を主どる、故に皮革が焦げるなり。肺の色は

白し、白きは鵝羽の如きを欲し、鹽の如きを欲せぬ。金が衰へて火を畏る、故に夏に死するのである。

腎は盛怒して已まねば則ち志を傷す、志が傷すれば則ち善く其前言を忘れ、腰脊は俛仰屈伸せられぬ、毛悴色天して季夏に死する。

怒は肝の志である、而して腎を傷する者は子母(腎は母にして肝は子なり)が相通するからである。腎は志を藏す、志が傷すれば則ち好く其前言を忘れる。腰は腎の府であり脊は腎の路である。腎が傷すれば則ち俛仰も屈伸もせられぬ。腎の色は黒である、黒は漆を重ねた如き色を欲し、地蒼の如くなるを欲せぬ。水が衰へては土を畏れる、故に季夏(土用)に死するのである。

恐懼して解せねば則ち精を傷す、精が傷すれば則ち骨が痿み痿厥して精が時に自ら下る。此も亦腎傷である。特に本藏の志を傷するが前と異なるとなすのである。恐れると則ち氣が下る、故に精が傷する。腎は骨を主どる、精が傷せば則ち骨が痿す、痿とは陽の痿みである。厥とは陽の衰にして閉藏が職を失へば則ち交感に因らずして精が自ら下るのである。

### 第八節 素問經絡別論抽出

食氣が胃に入て精を肝に散じ氣を淫しよしむ(精は食氣の輕清な者である、肝は筋を主どる、故に胃家は肝に散布する、即ち筋に淫浸して滋養するのである)。食氣は胃に入り濁氣は心に歸し精を脈に淫しよしむ(濁とは食氣の厚濁なる者である、心は血脈を主どる、故に食氣が心に歸すれば即ち精氣は脈に浸淫するのである)。脈氣は經に流れ經氣は肺に歸し肺は百脈を朝し精を毛皮に輸いたす(脈に淫しよむ者は必ず經に流れ、經脈が流通する

は必ず氣に由る、氣は肺が主どり而して五藏の華蓋となる、故に百脈の朝會を爲す、皮毛は肺の合である、是を以て精を輸するのである。毛脈は精に合し氣を肺に行らす（脈は毛を主どり、心は脈を主どる、肺は氣を藏し、心は血を主どる、一氣一血、奉じて以て身を生かし、一君一相、皆其上に處る、而して氣を氣府に行らすは即ち膻中である）。府精は神明にして四藏に流れ氣は權衡に歸す（膻中は即ち心胞絡にして心の府である受くる所の精を權つて還命を神明に稟く、神明は心に屬す、五臟の君主である、其精を四臟に流せば則ち四藏の氣は悉く其平を得て而して權衡に歸せられる、權衡とは平なり、故に主が明なれば則ち下は安く主が不明なれば即ち十二官は危しと云ふ）。權衡が以て平なれば氣口が寸を成して以て死生を決す（藏府が既に平なれば必ず氣口に朝宗する、即ち一寸の脈を成して以て死生が決せらる）。飲は胃に入つて精氣を游溢し、上は脾に輸し脾氣は精を散じて上は肺に歸す（水飲が胃に入れば先づ脾に輸す、是を以て中焦は漚の如くなるなり、脾氣は精を散じて肺部に朝す、地氣の上昇に象つて蒸して雲霧を爲す、是を以て上焦は霧の如きなり）。水道を通調して下は膀胱に輸す（肺氣が運行すれば水は隨て注ぐ、故に水道を通調して下は膀胱に輸すのである、是を以て下焦は瀆の如くなり、若しも氣が下化せねば則ち小便は通せぬ、故に膀胱は州都の官にして津液を藏し、氣が化すれば則ち能く出づとは曰ふ）。水精が四布して五經は並び行り四時に合ふ、五藏陰陽の授度は以て常と爲すなり（脈が氣を化して以て水を行らし四藏に分布すれば則ち五藏の氣は並に行る、四時に合するとは上輸は春夏の升るに象り、下輸は秋冬の降るに象る、五藏陰陽とは即ち精を散じ精を淫み精を輸すを謂ふ、是の如きは即ち道授法度を愆まらぬ、故に以て常とは爲す）。

### 第九節 素問五運行大論抽出

黄帝の曰く病の生變は如何、岐伯の曰く氣が相得れば則ち微なり、相得ねば則ち甚なり。

相得るとは彼と此とが相生するなり。則ち氣が和すれば病は微であり、相得ざるとは彼と此と相尅すれば則ち氣が乖いて病は甚し。

帝の曰く主歲は如何、岐伯の曰く氣が有餘なるは則ち己が勝つ所を制して勝たざる所を侮る、其不及なるは即ち己が勝たざる所が侮つて之に乗じ、己が勝つ所は輕んじて之を侮る。

主歲とは五運と六氣と各々主とする所がある歲を謂ふ。己が勝つ所とは我が彼に勝つなり。勝たざる所とは彼が我に勝つなり。假令ば木氣が有餘なれば則ち己が勝つ所を制するは土が其尅を受けて濕化が乃ち衰ふるのである。勝たざる所を侮るとは則ち金が反て木の侮りを受くるのである。木氣が不足なれば則ち己が勝たざる所とは金が來て之を侮るのである。己が勝つ所とは土も亦之を侮るのである。

侮れば反て邪を受け、侮つて邪を受くるは畏るゝに寡かれはなり。

我が能く勝つを恃んで彼を侮ることが甚しければ、則ち勝てば必ず復讐があつて反て其邪を受く。即ち木が來て土を尅するに之を侮ることが甚しければ、則ち脾土の子たる實せる肺金が、木の虚に乗じて來て母の讐を復するのである。吳王が國を傾けて兵を起し中國と争ひ、越が其虚に乗じて遂に入つて吳を滅すが如し。此れ侮て反て其邪を受くるは始に畏れ慎むことが寡きに因る、五行の勝復は自然の理である。

### 第十節 靈樞決氣篇抽出

兩神が相搏ち、合して形を成すに、常に身より先んじて生ず、是を精と謂ふ。

兩神相搏つとは即ち陰陽が交媾し精が五つて形を成すには精が形の先驅を爲す。本神篇に曰ふ「兩精相搏つを之を神と謂ふ」と。此に又兩神云々と曰ふ者は蓋し神は精の宰を爲し、精は神の用を爲す、即ち神中に精があり精中にも亦神があるからである。蓋し神の虚靈はあらざる所なきを見る。精は且つ身に先んじて生じ、神は復精に先んじて立つ、前にしては始めがなく、後にしては終りがない、此理を知る者にして則ち與に神を語るに足るべし。

上焦は開發して五穀の味を宣べ膚に熏じ身に充て毛を澤うるほすこと霧露のそ既そぐが如し、之を氣と謂ふ。

氣は陽に屬し、天に本づく者は上に親しむと云へば則ち上焦にあつては開發宣布す「上焦は霧の如し」とは是を謂ふ。邪客篇に曰ふ「宗氣は胸中に積み喉嚨に出で以て心肺を貫いて呼吸を行ふ」と。又刺節眞邪篇に曰ふ「眞氣は天より受け穀氣と並びて身に充つる者なり」と。又營衛篇に曰ふ「人は氣を穀より受け、穀は胃に入り以て肺に傳ふ」と。五藏六府は皆以て氣を受く、故に能く膚を熏じ身に充て毛を澤ほすのである。

腠理は發泄し汗の出づること溱々たり、是を津と謂ふ。

津は陽の液にして皮膚腠理に充實す、而して汗は津の發するなり。

穀が入て氣が満ち淖澤として骨に注ぐ、骨屬は能く屈伸し洩澤す、腦髓を補益し皮膚を潤澤す、是を液と謂ふ。

液は陰の精である、穀が胃に入り氣が満ちて液に化す、故に能く骨を潤ほす、骨が潤ひを受けて能く屈伸せられ、經脈

に流れて能く洩澤となる。内にしては腦髓を補ひ外にしては皮膚を潤ほすは皆液である。

中焦が氣を受け汁を取て變化して赤し、是を血と爲す。

水穀は必ず胃に入る、故に中焦が穀を受け其精微を運化し變じて汁と爲す、又變じて赤と爲し以て生身を奉ず、是を名づけて血と爲す。

營氣を壅遏して避くる所なからしむる、是を脈と謂ふ。

壅遏とは隄防と言ふが如し、猶ほ道路の境界、江河の岸隄の如きなり。營氣をして他に避くる所なからしめ、必ず其隧管の中を行る者を脈と謂ふ、脈とは氣を指すでなく血を指すでなく、氣を行らし血を行らす所以の者である。

精が脱する者は耳が聾す。

耳は腎の竅である、精が脱すれば則ち耳は其機能を失ふ。

氣が脱する者は目が明らかならぬ。

藏府の精微なる陽氣は皆上つて目に注ぐ、氣が脱すれば則ち目は其機能を失ふ。

津が脱する者は腠理が開け汗が大に泄る。

汗は陽津なり、汗が過多なれば即ち津は必ず脱す、故に汗多きを亡陽と曰ふ。

液が脱する者は骨屬は屈伸が不利となり色は天し腦髓は消し脛は痿み耳は數々鳴る。

液が脱すれば則ち骨髓が枯れる、故に屈伸は不利となる、腦が消し脛が痿み色も亦枯天するなり、耳鳴する者は液が脱すれば則ち腎が虚するに依るのである。

血が脱する者は色が白く天然として澤ならず。

色の榮えは血である、血が脱すれば則ち色は必ず枯白となる。

薛雪が曰ふに藏府の分るゝ所は固より微渺である、指して之を列せば則ち現象の按すべき者がある、古の至神と稱せられる醫師は垣を見るが如く内を照すが如くなるは、咸此の象を用ふるに由るのみ、然れど變々化々法を以て常律とすべからざる者がある、則ち現象やは而も神である、故に象を廢する者は暗き夜に行くが如く象に膠する者は迷へる兔を待つが如しと曰ふべし。

## 第五章 診察の心得

### 第一節 總 說

治病を本領としてゐる醫師は先づ疾病を知り情状を斷ずることが第一要件である。其知病診斷は如何なる方法に依るのである乎。機械化に堪能な歐米人は檢溫器を製して熱度を知る標準としてゐる。檢溫器は誠に重寶なもので醫師には知病上固より必須の一具であらうが、さて伏熱——外感病の發熱を實熱といふに對して内傷病の潮熱するを虛熱といふ、毎日或る時を限り即ち明け方とか晝間とか夕方とか夜中とかに發熱するが潮熱である、其潮熱せぬ時が虛熱の潜伏期として之を伏熱とはいふ——は計られぬ。又檢溫器は獸肉を主食とする歐米人の平溫を三十七度に標準としてゐるが、此標準三十七度を穀食日本人の平溫に適用することが意味をなさないことに近來は氣が付いたやうである。然るに醫師が使用してゐる檢溫器は其儘三十七度の標

準朱線を改めてぬより察するに、日本人の平溫は未だ不明であると思ふ。平溫が不明な日本人の病熱が如何にして此の檢溫器で有熱の昂度が精細に知られるであらう。又若し檢溫器の水銀の升降に狂ひが生じてゐるに氣付かずして使用したならば、飛んだ見當違ひの誤謬的失態を招いた悲劇もある。又檢溫器を腋下に挟ませるが元來各局部に依て相違がある體溫を腋下に決定する理由は何か根據があるのであらうか。

次に西方を涼とし時令では秋に配し内藏では肺に配してゐる。涼帯に生息する歐人には呼吸に關する肺に故障が起り易い、からして聽診器の使用も必要不可欠であらうが、溫帯に生育してゐる日本人には肝藏と胃府とに重を爲して診察せねばならぬから、日本人としての醫師が聽診器に重要な任務を托せねばならぬであらうか。

檢溫器と云ひ聽診器と云ひ誠に重寶であり且つ便利である。此の便利重寶を無視して之を廢止せよとは云はぬ、初心の間は之に據て診病の手引とするは善い。併乍ら畢竟は機械である、絶對の信賴は出來ない。唯其參考に便すとすれば良い。而して日本人を治療する醫師は我國の上古より傳來せる皇漢醫道的に依り疾病は簡にして要を得る診法を洗心靜思して實際的可能化を努力して欲しい。

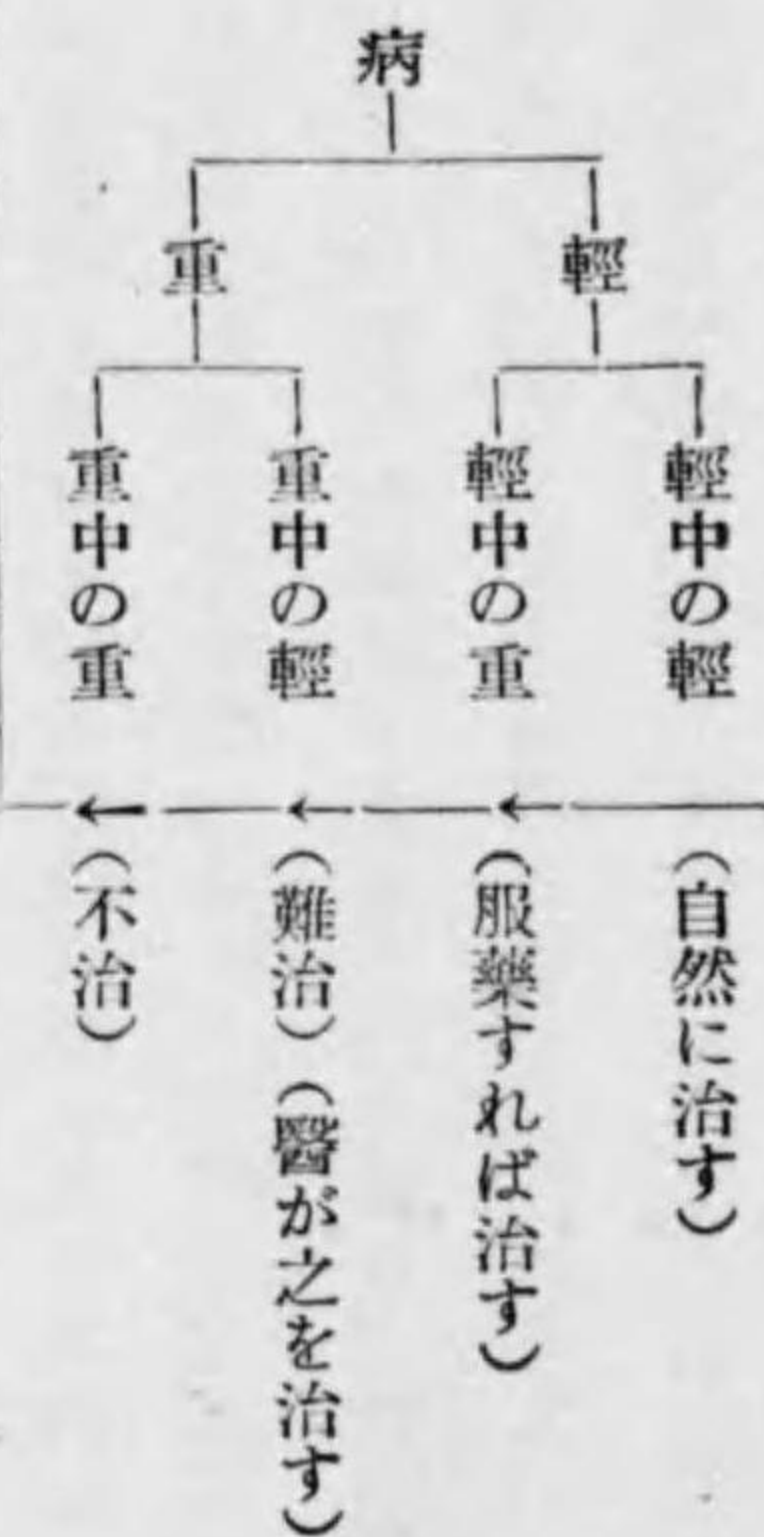
さて我國傳來の診察方法は吾人の五體に於て最貴とせらるゝ機關を使用するのである。即ち吾人が五藏の精華が發揮してゐる眼に頼り色を見て其疾病を觀する。次には耳に頼り聲を聞て其病疾を察する。次には口に頼り飲食、居所、業務、嗜好、睡眠、二便などの状態を問うて其疾病を判する。飲食は其多少及び種類、



間食の有無、居所は乾燥か卑濕か、閑静か雜鬧か、透光通風の良否、業務は勞心か勞力か、嗜好は精神的趣味か肉體的享樂か其種類、睡眠の多寡、二便の通否。次に指頭に頼り血脈を切して其疾病を斷する。手を國語でテと譯して喜びて來るとか、飛びて跳ねて舞うてなどテの音は接續詞であるから、自他連絡の媒介となり、又やり手、つかひ手、手こする、手前など人格的代名詞にも使用せられて人身の機關として重要な任務に居る。

眼に色を見分くるを望診と云ひ耳に聲を聞分くるを聞診と云ひ、色とは只青赤黃白黒の五色は勿論なるが其間色と其色相とを見分けねばならぬ。聲も宮商角徵羽の五聲なるが其清濁と其聲相とを聞き分くることである、口頭に經過や證狀を語らすを問診と云ひ、指頭に脈形や脈勢を切するを切診とは云ふ。之を四診と名づけて其外に舌診があり腹診がある。醫師は心を洗ひ精神を清め此四機關を神聖にして患者に對せねば疾病の狀情を診斷し得ることは不可能である。看護婦に任せて脈搏の多少や熱度の高低を表記せしめた丈けでは、眞誠に脈相も熱勢も判定が出来得るものではない。「病を診するには小心翼翼々、案を下すには放膽果斷」とは古人が我に教ふる至言である。

診察が了つて同時に診斷が確定せらる即ち



庸醫は自然に療する患者をも誤治して輕中の重と惡化させ、慢性的難治に逆進せしめ、遂には不治に轉歸せしむる。

醫師は其斷案が確定して第一の輕中の輕なる患者には、藥を與へなくとも治する疾病であるから話頭にて治せられる。若し虚弱な質であり神經家なれば健胃的藥劑を與へ或は養生的刺灸などを施せば良い。次に第二の輕中の重になると投藥か鍼灸かせねば治せぬ、而も對症的賣藥でも民間的療法でも治せられる疾患である、餘りに突つき過ぎ却て惡化させねば良い。次の第三なる重中の輕は受病の素質か素因かあり、病毒が惡質か猛烈かであるから難治症に屬す。是は醫師が鍼灸なり投藥なりして治せねば決して自然には治愈せず又賣藥や民間療法では容易に快方に向はぬ病症である。愈えしめ全快せしめねば平復せぬ病症には、醫師が其手腕の優秀が發揮せられて、大に其面目をも施せるから治療甲斐があるとも言へる。譬へば凱旋將軍の名譽を贏ち得て不朽の功績を樹てられたるに比すべくもある。次に終りの重中の重なる不治の病魔に見舞はれ

たが最後、萬事が休する矣。如何なる醫聖を地下より呼び起しても施すべき術も手段もないのである。醫師たるもの恁る患者に接したならば、苦しい目をさせたり痛いめをさせたりせず、能く家族へ申含めて患者を慰安させ其欲するまゝに任せ、滋補的藥劑など與へて快く終焉させるが醫師の執るべき最善なる道であらう。但し大方は疑似には迷ふ、輕症に似て重病があり、劇症と斷じて微疾がある、是れ醫師が功罪の分岐點である。恐懼戒慎を要する。

皇漢醫師は此四診を綜合して疾病の病情を診察するのである。四診が悉く堪能となることは容易ではない。其内の孰れか其一なり二なりが堂に上り奥に入れば、正確なる斷案が下されて百中に一失もないと謂うて良

## 第二節 四診概要

四診の方法は清朝の初期に崇文の聞え高き乾隆帝が、天下の大醫を召されて自ら總裁となられ、醫書を編纂せられたのが御纂醫宗金鑑である。賢明なる天子の總裁、手腕ある大醫の勅撰、殊に考證學の盛んな時代であるから、前代の華を抜き先醫の英を聚めて理論は確乎であり秩序は井然としてゐる。故に左に之を譯出して斯道研究に熱心な篤實な方々の參考に供したい。併乍ら若し四診に心を留められて堂に上り奥に入らぬには、唯一遍の素通りの讀み方では決して其庭にも及ばず、門前に立つて堂奥を伺ふに均しい。必ず再三再四を重ねた熟讀の上に精神を凝らして六感が衝動する迄に奮勉せられんことを希望する。古語に「之を思ひ

之を思ひ之を思うて通せねば鬼神は將に之を通せん」と謂ふ、通じて所謂「手の舞ひ足の踏む所を知らぬ」といふ境界に到着するを期待せねばならぬ、至囑々々。

以下御纂醫宗金鑑の三十四卷なる四診心法要訣の概要を示す。

先づ其序文を讀むに、

夫れ醫家が精微に造り幽顯に通せんには先づ望見して之を其胸鏡に感受せらるゝでなくてはならぬ。然るに近世は唯脈を切する指頭の巧なるにのみ意を注いで、望んで之を知る眼光の神を大事とせぬ。是は大に古聖先賢が診病の本旨を失うてゐる者と謂はねばならぬ。今茲に醫經の色診を論ずる文中の最も確然として法則とすべき者を探り、編して四言となし崔嘉言氏が作れる四言の脈訣に合はせ、名づけて四診要訣と曰ふ。實に望(目)聞(耳)問(口)切(指)の道を該てゐる。後の醫師たらん者は是に由て學び、熟讀習玩し時々おしはかるに揣摩の功を積んで歳月に涉らば、必ず自然と能く其妙境を洞悉せられて、精微に造り幽顯に通せらるゝことも蓋し難事ではあるまい。

かく述べてゐる。是に依て見るに唯切脈にのみ苦心する者も完備の診病法とは云はれぬことが判然としてゐる、況や脈數の幾搏を看護婦に記表さするに於てをやだ。而して機械も法則も詮する所死物である、此死物たる法則や機械を活かして運用化するは吾人が靈能の發揮に歸することを返すゝも忠告して置く。

之より本文に入る。

望むに目を以て察し、聞くに耳を以て占ひ、問ふに言を以て審にし、切するに指を以て參ふ、斯の診道を

明にして病の根源を識り、能く色と脈とを合せば以て萬全なるべし。

此章は望聞問切の四事が病を識る要道であることを明示せられた者である。内經に「望んで之を知る、之を神と爲す」と曰へり、是は目に五色の相を明察するのである。次に「聞いて之を知る、之を聖と謂ふ」と曰へり、是は耳に五音を識別するのである。次に「問うて是を知る、之を工と謂ふ」と曰へり、是は言語に五病を審判するのである。次に「切して之を知る、之を巧と謂ふ」と曰へり、是は指頭に五脈を區別するのである。神聖工巧の四者は乃ち診病の要道にして醫師が必ず此の四者を明にし、更に能く互に相參合すれば則ち萬病の根源を識ることを得べく、而して後に療治せば自ら萬舉して萬當となるであらう。

譯者曰ふ、吾人の能と不能とは固より天稟に屬する。「大人は大受し小人は小受す」と云ふも、大受は大人の天稟にして小受は小人の天稟なれば他の如何ともせられぬ所である。人身の五官に於けるも亦天稟の能不能があることを知らねばならぬ。目の能く明かな人、耳の能く聰き人、舌の能く辯ける人、指の能く巧みな人、是等は皆教へぬに自ら美的に可能であるは天稟の致す所となさねばならぬ。支那の上古には醫生を募る試験法の一つに、其指頭にて龜の背上を抑へさせて其龜が次第に元氣が萎縮した者は落第となり、次なる者に此萎縮せる龜を同様に抑へさせて、次第に元氣が旺盛となれば醫師たるべき素質があるとして採用せられる、是も亦醫師に可能な天稟の持主であるを定める好試金石ではあるまいか。又皇國にも難治患者に對して調劑するには、醫師は匙を用ひずして指頭にて直々藥種を撮んで調合すると聞く、指頭を重んずるは指頭に特殊的天稟があるからである。故に四診に於けるも各自が其長ずる所を利用して、其一なり其二なりに堪能となれば則ち吾能事了れりと云うて宜しからん。乃ち目の人は見て知られ、耳の人は聞て覺られ、口の人は證に因て察せられ、指の人は脈を按へて判ぜられ、各其能所を利用して宜しかるべく、四診の全能は容易に望み難い、孰れなりとも其一若くは其二を徹底に自得せられるやうに努力を希望する。

### 第三節 望 診

五行は五色を爲す、青赤黃白黒にて復青を生ずること環の常德の如し。

此條は天の五行に因て人の五臟は化生せられ、又五色が相生するは環の常德は乃ち循環して端なきが如きを明かにせられた者である。乃ち木は青色を、火は赤色を、土は黄色を、金は白色を、水は黒色を化生するを主とる（五行）。肝は青色を心は赤色を脾は黄色を肺は白色を腎は黒色を化生するを主とる（五臟）。

變色の大要は生尅と順逆とに依る、青赤は兼化と爲し赤黃は合一と爲す、黃白は淡黃となり黒青は深碧となる、白黒は淡黒にして白青は淺碧なり、赤白は紅に化し青黃は綠に變じ、黒赤は紫を成し黒黃は黧を立つ。

此條は五色が相生し相尅し順逆し兼化し合化する變色を明にせらる。五色が兼化したり合化するは中々複雑にして容易に數へ盡されぬが、其大要を擧ぐれば相生の順色が五あり相尅の逆色も亦五ある。青は木化に、赤は火化に、黃は土化に、白は金化に、黒は水化に屬する、此が乃ち五行の化する所の常色である。木と火と、火と土と、土と金と、金と水と、水と木と、是の五者は皆同化する。又金と木と、木と土と、土と水と、水と火と、火と金と、此五者は皆兼化する。此が五行の化する所の變色である。若し青と赤とが合化すれば紅が青を兼ぬる色となり、若し赤と黃とが合化すれば紅が黃を兼ぬる色となり、若し黃と白とが合化すれば黃が白を兼ぬる淡黃の色となり、若し白と黒とが合化すれば黒が白を兼ぬる淡黒の色となり、若し黒と青とが合化すれば黒が青を兼ぬる深碧の色となる。此等は皆相生的變色にして不病と爲す順色に屬する。若し白青の兼化は青が白を兼ぬる淺碧の色となり、若し赤白の兼化は白が赤を兼ぬる紅色となり、若し青黃の兼化は青が黃を兼ぬる綠色となり、若し黒赤の兼化は黒が赤を兼ぬる紫色となり、若し黃黒の兼化は黃が黒を兼ぬる黧色と

なる。此等は皆相尅的變色にして病を主とする逆色に屬する。醫師は能く之を識別すれば則ち五藏の主病であるか又は兼病であるか、而して言なるか凶なるかなど變化の情が推知せられる。

天に五氣あり、人を食ふに鼻より入り五臟に藏す、上つて面頤に華す、肝は青く心は赤く脾藏の色は黄なり、肺は白く腎の黒きは五藏の常とす。

此條は色の本原は天より出で、人の五藏に徵象せられ、不病的常色の診法を明かにせられた者である。天は風、暑、濕、燥、寒の五氣があつて人を養ふに鼻より入る。乃ち風氣は肝に入り暑氣は心に入り濕氣は脾に入り燥氣は肺に入り寒氣は腎に入り、人の五藏に藏して其精氣を蘊め上つて面に華はれる。乃ち肝の精華は化して青色を爲し、心の精華は化して赤色を爲し、脾の精華は化して黄色を爲し、肺の精華は化して白色を爲し、腎の精華は化して黑色を爲す。

藏の色を主と爲し時の色を客と爲す、春は青く夏は赤く秋は白く冬は黒く長夏の四季は色の黄を常則とす、客が主に勝つは善く、主が客に勝つは悪し。

此條は四時乃ち春夏秋冬に病のない常色の診法を明かにせられた者である。五藏の色は五形の人（五形の事は後章に詳かにす）に隨て現はれ百歲即ち一生涯不變である、故に主色と爲す。四時の色は四時に隨て加臨し推遷が常ならぬ、故に客色と爲す。春氣は肝に通じて其色は當に青かるべく、夏氣は心に通じて其色は當に赤かるべく、秋氣は肺に通じて其色は當に白かるべく、冬氣は腎に通じて其色は當に黒かるべく、長夏四季の氣は脾に通じて其色は當に黄なるべし、此が四時常則の色である。主色は人の藏氣から生ずる所であり、客色は歲氣の加臨から化する所である。夫れ歲氣が人氣に勝つは順とするから、客色が主色に勝つを善と爲し、人氣が歲氣に勝つを逆とするから、主色が客色に勝つを惡と爲す。凡て所謂勝つとは青は白に反すべく、赤は黒に反すべく、白は赤に反すべく、黒は黄に反すべく、黄は青に反すべきを謂ふ。

色と脈と相合ふ、青は弦に赤は洪に黄は緩に白は浮に黒は沈なれば乃ち平かなり、已に其色を見て其脈を得ず、尅を得れば則ち死し生を得れば則ち生く。

此條は色脈が相合ふと相反するとに依て生死を診する法を明かにせらる。凡そ病人の面は青く脈は弦である。面は赤く脈は洪である、面は黄で脈は緩である、面は白く脈は浮である。面は黒く脈は沈である、是等は色と脈とが相合うてゐる無病平人の候と爲す。若し病人が已に青色を見はしてゐるに弦脈を得なければ、此は色と脈とが相反してゐるから病的色脈たるを主とする。若し浮脈なれば是は脈が色を尅してゐるから則ち死を主とする。若し沈脈なれば是は脈が色を生じてゐるから則ち生を主とする、其餘の他色も皆此に準じて推知すべし。

新病は脈が奪はれ其色は奪はれず、久病は色が奪はれ其脈は奪はれぬ、新病の愈え易きは色と脈とが奪はれぬにあり、久病の治し難きは色と脈とが俱に奪はるゝに依る。

此條は色脈を相合はせて病の新久に難易があるを診する法である。脈が奪はるとは脈が微小なるを謂ひ、色の奪はるとは色に光澤なきを謂ふ。新病は正氣が邪氣に制せられてゐるから脈が奪はるゝが、其邪氣を受くことが未だ久しからぬから色は奪はれぬ。久病は邪氣を受くことが已に久しければ色は奪はるゝが、久しうても病が進まぬから脈は奪はれぬ。若し新病にして色も脈も俱に奪はれぬば則ち正氣が衰へずして邪氣は盛ならぬから愈え易いと云ひ、久病にして色も脈も俱に奪はれてゐれば則ち正氣は已に衰へて邪氣が方に盛なれば治し難いと云ふ。

色は皮外に見はれ氣は皮中に含む、内には光があり外には澤があり氣色は相融る、色あつて氣なきは病まざれども命は傾かん、氣あつて色なきは困しむとも凶ならず。

此條は五色を五氣に合はす診法である。青赤黄白黒が顯然として皮膚の外に彰かなる者は乃ち五色である。此五色が隠

然として皮膚の中に含んである者は乃ち五氣である。内光が灼々として動くやうに皮紋の筋路の中より映出して、外澤が玉の浮かばぬやう光が油亮なる者は、則ち氣と色とが並び至て相生無病の容狀である。若し外にのみ五色を見はして内に含映がなければ則ち色があつて氣がないとする。内經にも「色があつて氣が至らぬ者は死す」と曰へり。凡そ四時にも五藏にも五部にも五官にも百病にも之を見れば皆死するから、たとひ目下病はなくとも生命は必ず傾くと謂はれたのである。若し外色は淺淡であり光澤がなくとも内に含む光氣が映出してゐれば則ち氣があつて色がないとする。内經にも「氣が至て色が至らぬ者は生く」と曰へり。凡そ四時五藏五部五官百病に之を見れば皆生くるから、たとひ現在病に困んでゐても凶でないといふ。

縞に雄黄を裹むは脾の狀が並に臻る、縞に紅を裹むは肺にして縞に朱を裹むは心なり、縞に黒赤を裹みて紫艶なるは腎の綠とし、縞に藍赤を裹みて石青なるは肝に屬す。

此條は氣と色とが並至る容狀の診法を明かにした者である。縞は白羅である。若し白羅に雄黄を裹めば黄中に紅を透す色が映出する、是は脾の氣と色とが並至る容狀である。若し白羅に紅を裹めば淺紅の白を罩めた色が映出する、是は肺の氣色が並至る容狀である。若し白羅に朱砂を裹めば深紅な正赤の色が映出する、是は心の氣色が並至る容狀である。若し白羅に黒赤を裹めば黒中に赤紫艶を透す色が映出する、是は腎の氣色が並至る容狀である。若し白羅に藍赤を裹めば藍中に揚紅石青の色が映出する、是は肝の氣色が並至る容狀である。

青きは蒼壁の如くにして藍の如きを欲せず、赤きは白にて朱を裹むがよく、𧈧赭なるは死の原とす、黒は漆を重んじ始を嫌ふ、白羽を吉とし枯と鹽とを惡む、雄黄を羅に裹むは善く、黄土なるは終に難しと爲す。

此條は四時百病五藏五部五官五色に付き生死の診法を明かにする。蒼壁とは碧玉である、藍は藍靛の葉である。内經に

「青きは蒼壁の色の如からんことを欲す」と曰へり、即ち石青の色は生々した青色である。「藍の如きを欲せず」とは即ち靛葉の色は死んだ青色なれば好ましくない。𧈧血とは死血を云ひ、赭は代赭石を謂ふ。内經に「赤きは白にて朱を裹むが如からんことを欲す」と曰へり、即ち正赤色は生氣のある紅色であり、𧈧赭の如くなるを欲せず」とは即ち死血や赭石の色は死んだ紅色なるを忌む。漆を重ねた光潤は紫色となる、始は地上に蒼枯せる黒土を指す。内經に「黒きは漆を重ねたるが如からんを欲す」と曰へり、即ち光潤ある紫色は生きた黒色である、「始の如きを欲せず」とは即ち枯れた黒土の如き死せる黒色なるを嫌ふ。白羽は白鷺の羽、枯は枯骨、鹽は食鹽を謂ふ。内經に「白きは鷺羽の如からんを欲す」と曰へり、即ち白くて光澤のある鷺羽の色の如きは生きた白色であり、「枯鹽の如くなるを欲せず」とは即ち枯骨や食鹽の如き死んだ白色なるを厭ふ。内經に「黄は羅に雄黄を裹むが如からんを欲す」と曰へり、即ち黄中に紅を透す色は活氣がある黄色である。「黄土の如きを欲せず」とは即ち枯れた黄土の如きは死せる黄色なれば好まぬ。

舌は赤く巻くと短きとは心官の病の常なり、肺は鼻が白きは喘し胸満し喘張す、肝は目眦が青く、脾の病は唇が黄とす、耳の黒きは腎病にして淺深にて分彰す。

此條は五色を五官に合はせ病の虚實を主とする診法である。舌は心の官とす、舌の赤きは心病にして其色が深赤に焦げて巻く者は邪氣の實と爲し、色が淺紅に潤うて短き者は正氣の虚と爲す。鼻は肺の官とす、鼻の白きは肺病にして其色が淺白にして喘はあれど胸が滿せぬ者を正氣の虚と爲し、色が深白にして喘し且つ胸が滿する者は邪氣の實と爲す。目は肝の官とす、目眦が青きは肝病にして其色が深青な者を邪實と爲し淺青な者を正虚と爲す。口唇は脾の官とす、唇の黄は脾病にして其色が深黄な者は邪實、淺黄の者は正虚なり。耳は腎の官とす、耳の黒きは腎病にして其色が深黒なるは邪實、淺黒なるは正虚なり、所謂「淺深分彰」とは即ち淺淡なるを虚と爲し深濃なるを實と爲す、之が分明に顯彰せらるゝを謂ふ。左頰部は肝とし右頰部を肺とす、額は心にして頰は腎なり、鼻を脾の部位とせよ、部毎に本色を見はす、

深も淺も病累にして若し他色を見れば法を按し類を推すべし。

此條は五色を五部に合はせ五(虚邪、實邪、賊邪、微邪、正邪)を診する法を主とする。左頬は肝の部、右頬は肺の部、額上は心の部、額下が腎の部、鼻は脾の部と爲す。以上の五部に各其本色を見はし、淺淡なるを不及とし深濃なるを太過とし皆以て病色と爲す。例へば鼻の如きは脾の部位とし黄の本色を見れば則ち本經が自ら病む正邪と爲し、若し白色を見れば則ち子(肺)が母(脾)氣を盜むと爲す、即ち之が虚邪である。若し赤色を見れば則ち母(心)が子(脾)氣を助くと爲す、即ち實邪である。若し青色を見れば則ち彼が能く我を尅すと爲す即ち賊邪である。若し黒色を見れば即ち我が能く彼を尅すと爲す即ち微邪である。所謂「法を按し類を推すべし」とは餘の四

藏も此法を準按して其類を推知すべしとの謂ひである。

天庭は面首にして鬢上は咽喉なり、鬢中は印堂とし肺の原を候す、山根に心を候し年壽に肝を候し兩傍に膽を候す、脾と胃とは鼻端にして頬は腎と腰と臍と爲す、額下は大腸にして額内は小府なり、面王を子勝として額に當つて肩を候し額外に臂を候す、額外の下は乃ち手を候する位とし根傍は乳に膺り、繩上に背を候し牙車は下の股と膝と脛と足との位なり。

此條は上部に候し下部に足を候し中部に藏府



を候し、五色に合せて病を主とする診法である。鬢中とは兩眉の間を指す、之を印堂とも云ひ又は明堂とも謂ひ、中部では

最高位にあつて肺疾を候するに應ずる。印堂の上を鬢上と名づけ、鬢上より髮際までを天庭と名づく。天庭を上部の上と爲し頭面の疾を候するに應ずる。鬢上を上部の下と爲し咽喉の疾を候するに應ずる。山根とは兩目の間に當る即ち下極である、肺の下部に居れば心疾を候するに應ずる。年壽とは下極の下にして即ち鼻柱である、心の下部に居れば肝疾を候するに應ずる。面傍とは年壽の左右にして膽は肝に付着してゐる、故に膽疾を候するに應ずる。鼻端とは年壽の下にあり、之を面王と謂ひ即ち準頭鼻孔である、肝の下部にあつて脾疾を候するに應ずる。鼻孔とは即ち上方である、脾胃は相連なるに依り胃疾を候するに應ずる。耳前の下を兩頰と謂ふ、四藏は腹に於て皆一個である、唯腎のみは脊に着いて兩個ある、依て兩頰は腎疾を候するに應ずる。腰と臍とは腹脊相對すれば又腰臍の疾をも候するに應ずる。頰内の高骨を兩額と謂ふ、其下は腎の下部にあるに依り大腸の疾を候するに應ずる。額内とは即ち兩頰の内にして小府とは小腸の府を謂ふ、小腸は大腸の上にあれば之を候するに應ずる。準頭の上より庭に至る迄を皆之を明堂と謂ひ、準頭の下より額に至る迄を皆之を面王と謂ふ。面王は即ち人中と承漿との部位に當る、膀胱は腎の府であり子處は即ち精室血海である、皆腎の下に居る、故に面王は子處と膀胱との疾を候するに應ずる。此に依て藏府の上下内外の部位を定むる。

五部の類にて腎を候するは水が極下に於て且つ子處は兩腎に中通するに由る。天庭にて心を候するは火が極上に於て由る。次に左頬にて肝を候するは木位が左に於てあり、右頬にて肺を候するは金位が右に於てあり、鼻にて脾を候するは土位が中央に於てあるからである。額に當るとは兩頰骨の部位に當るを謂ひ、頰は骨の本にして外部の上位に於るから肩の病を候するに應ずる。肩は臂に接するより頰骨の外位が臂の疾を候するに應ずる。臂は手に接するより頰外の下位が手部の疾を候するに應ずる。根傍とは山根の兩傍にして兩目の内眥の部位に當つて内部の上位に居るから膺乳胸前の疾を候するに應ずる。兩頰にて腰腎を候し、頰外の頰骨の上部より引くを繩骨と曰ふ、之が脊疾を候するに應ずる。頰

外の頰骨の下部より引くを牙車骨と曰ふ、之が股下脛足部の疾を候するに應ずる。此が肢體の上下内外の部位である。庭闕と鼻端との高起して直平なる、顴頰は藩蔽し大廣に豐隆に、骨格の明顯なるは壽は遐齡を享け、骨格の陷弱なるは邪攻を受け易し。

此條は五官と五部とに依て強弱と壽夭との診法を明かにする。天庭闕中より鼻端まで皆高く起て直平であり、兩顴も兩頰も耳門を藩蔽して皆大く廣く且つ豐隆であり、十歩を隔て、皆外に見はるゝを則ち骨格の明顯と爲す。其人は唯病がないのみでなく且つ遐齡の壽を享けられる。若し天庭や顴頰や耳門の諸所が骨は卑く肉も薄ければ則ち骨格の陷弱と爲し、其人は唯病を免かれないのみでなく且つ壽命も永くは保てない。

黄赤は風熱なり、青白は寒を主どり、青黒を痛と爲し甚しきは則ち痺攣す、恍白は脱血にして微黒を水寒とす、痿黄は諸虚にして顴の赤きは勞の纏ふなり。

此條は五色が其所在に隨ひ五官五部内部外部上部下部など病の診法を主どる。黄赤を陽色と爲す。其病も亦陽病に屬し風を主どる所以にして熱を爲し、青白黒は陰色である。其病も亦陰病に屬し寒を主どる所以にして痛みを爲す。若し甚だ黒きは脈にあつては則ち麻痺を爲し、筋にあつては即ち拘攣を爲す。恍白とは淺淡な白色を謂ふ。大吐衄、脱血、下血、を主どる。若し吐衄や下血がなければ則ち心臓が血行を主どらぬと爲し從つて色に榮がないとする、微黒とは淺淡な黒色を謂ふ、腎病と爲し水寒を主どる。痿黄とは淺淡な黄色を謂ふ、諸虚に屬する病を主どる。兩顴が澤紅赤色なる者は陰火の上乗に因り虚損する勞病を主どる。

色の銳が向ふ所の部官を見る、内より外に走るは易く外より内に走るは難し、官部と色脈と五病と交々參ふ、上るは逆にして下るは順なり、左と右と反せばあやふ陸し。

此條は五色が官部に傳乘する診法を明にする。色の尖れる處を銳と爲す。凡そ病の相傳相乘するには當に其色の銳所向ふ所が何官何部であるかを視れば、則ち何官何部より起て何官何部に傳乘すが知られて、乃ち生尅順逆が自然と明かにせられる。

銳所が外に向ふは是が内部より外部に走ると爲す。即ち内藏より府に傳へ府は外表に傳ふると爲す、誠に治し易き病に屬す。銳處が内に向ふは是が外部より内部に走ると爲す、則ち外表より府に傳へ府より内藏に傳ふると爲す、之が難治の病に屬する、而して内走にも外走にも固より難易はある、併し更に當に五部や五官や五色や五脈や五病を交々相推參すべし、則ち又微か甚か生か死かの區別が判然する。

凡そ病色が下より明堂を衝いて額に上るは即ち水が火を尅する賊邪とするから逆である。上より明堂を壓して額に下るは則ち火が水を侮る微邪とするから順になる。反とは互に相反するを謂ひ、陸とは危険を謂ふ。男子は左を主とし女子は右を主とする。男子の色は左より右を衝くを從と爲し右より左を衝くを逆と爲す。女子の色は右より左を衝くは從、左より右を衝くは逆となる、逆とは相反するを謂ひ、相反するが故に危證となる。前條は内外の部位に依り順逆を分ち、此條は上下左右に依り順逆を分けて説明せられた者と知らねばならぬ。

沈濁晦暗は内に久しくして重く、浮澤明顯は外に新にして輕し、其病が甚しからざるは半澤半明なり、雲散は治し易く搏聚は攻め難し。

此條は五色の明晦と聚散とに依り久重と新輕と及び易治と難治とを別つ診法と爲す。色の深きを沈と爲し病が内にあるを主どる。若し更に濁滯して晦暗なれば久病にして且つ重症なるを主どる。色の淺きを浮と爲す、病が外にあるを主どる。若し光澤があり明顯なるは新病にして且つ輕症なるを主どり、若し其色が枯晦ならねど亦明澤でもなければ即ち甚しからぬ疾患なるを主どる。凡そ諸病の色相は雲の撒散するが如きは病が將に愈えんとし且つ治し易きを主どり、搏聚凝滯

すれば即ち病の漸進を示して治し難きを主とする。前條は内外上下左右に因り順逆を分け、此條は淺深晦明聚散に因り順逆を分つた者である。

黒は庭に赤は顴に出づること拇指の如くなれば病は少しく愈ゆと雖ども亦必ず卒に死せん、唇面の黒青と五官に黒が起ると汗粉を擦残したる白色とは皆死す。

此條は非常なる色相が現はれて人が暴死する診法を明かにせらる。出づる、拇指の如しとは塊を成したり條を成したり搏聚したりして散ぜぬを謂ふ。即ち拇指の如き黒色が天庭に出でたり、拇指の如き赤色が兩顴に出でたりするは、此れ皆水火が相射る兆候である。病者が或は少し愈えたやうに思ひ喜ぶこともあらうが、亦必ず卒然として死する、病者の唇面が青黒であつたり、五官に忽ち黒色が起つたり、白色が汗粉を擦り残したやうな状態があつたなれば即ち即今は病がなくとも亦皆卒死するを主とする。

善色は病まずといふ、義に於ては誠に當る、惡色も病まずといふ、必ず凶殃を主とする、五官の陷弱なる、庭闕の張らざる、藩蔽の卑小なる、而も病まぬは神の強きによるならん。

此條は其色を見て其病を見ぬ診法を明かにする。善色とは色と氣とが並び至る好色なれば其人は理に於て當に病なかるべく、惡色とは沈深晦滯の色にして其人が即今は病患ならねど亦必ず凶殃を主とする。凶殃とは即ち骨相家が所謂紅は焦勞や口舌を主どり、白は刑罰や孝服を主どり、黒は非災や凶死を主どり、青は憂訟や暴亡を主とする類である。五官陷弱とは五官の骨が陥り肉が薄きを謂ひ、庭闕不張とは天庭や闕中が豐隆張顯ならぬを謂ひ、藩蔽卑小とは頰側や耳門が卑低にて廣からぬを謂ふ。此は皆今は不病でも天壽の形相である。若し之に惡色が加はれば豈に能く堪へられんや、然るに其無病の者があるは必ず其人の神氣が強旺にして素より其形に稱うてゐるのであらう。

肝の病は善く怒り面色は當に青かるべく左に動氣あり、轉筋し脇疼み、諸風は掉眩し疝病を爲し、耳聾を爲す、目視は眩々として將に捕へられんとして驚くが如し。

以下五條は皆色と病とが相合ひ本藏が自ら病み其虚實の診法を明かにせらる。怒は肝の志であるから病めば則ち好く怒る。青は肝の色であるから病めば則ち面色當に青かるべく、肝の部位は左にあるから病めば即ち左脇に動氣があり且つ疼む。肝は筋を主とするから病めば即ち轉筋する。掉とは動搖抽搐するを謂ひ、眩とは昏黒となり不明となるを謂ふ。肝は風を主とするから疝を病む。肝と膽とは表裏をなすから耳聾を病む。此等は皆肝實に屬する病である。若し肝が虚すれば即ち目視が眩々として見る所がなくなる。是れ肝が竅を目に開いてゐるからである。肝が虚すれば隨つて膽が薄くなるから不時に人に捕へられんとするやうな驚きがある。

心は赤く善く喜ぶ、舌は紅に口は乾く、臍上に動氣あり、心胸に痛煩あり、健忘し驚悸し怔忡して安からず、實すれば狂して昏冒し虚すれば悲んで悽然たり。

喜は心の志であるから病めば即ち好く喜ぶ。赤は心の色であるから病めば即ち面色が赤くなる。心は竅を舌に開くから病めば則ち舌が赤紅となる。心は熱を主とするから病めば即ち口が乾き心煩しい。心の部位は上にあるから病めば則ち臍上に動氣を發する。胸は心肺の宮城であるから病めば則ち心胸が痛む。健忘も驚悸も怔忡も皆是れ心神不安の病である。熱が心に乘じて實すれば則ち發狂し昏冒する。神が怯えて心が虚すれば則ち悽然として好く悲しむ。

脾は黄に好く憂ふ、臍に當て動氣あり、善く思ひ食少く倦怠して力が乏しく腹は滿し腸は鳴り痛んで下痢す、實すれば即ち身が重く、脹滿し便閉す。

黄は脾の色であるから病めば則ち面色は黄となる。憂思は脾の志であるから病めば則ち好く憂思する。脾の部位は中央



にあるから病めば則ち臍に當て動氣がする。脾は味を主とするから病めば則ち食が少い。脾は四肢を主とするから病めば則ち倦怠して力が乏しい。脾は腹を主とするから病めば則ち腹滿し腸鳴し痛んで下利する。此等は皆脾が虚しての病である。脾は肉を主とするから實すれば則ち身重や腹脹滿や便閉を病む。

肺は白く善く悲しむ、臍右に動氣あり、灑淅として寒熱すれば咳唾し嘔噦し喘呼し氣促し膚は傷み胸は痺す、虚すれば則ち氣が短にして是を續くること能はず。

白は肺の色であるから病めば即ち面色が白くなる。悲は肺の志であるから病めば即ち好く悲しむ、肺の部位は右にあるから病めば即ち臍右に動氣が起る。肺は皮毛を主とするから病めば即ち灑淅として寒熱し膚が痛む。咳嗽も唾痰も嘔噦も流涕も喘呼も氣促も皆肺の本病である。胸は肺の府であるから病めば則ち胸痺して痛む。肺が虚すれば則ち胸中に氣が少くなる。故に喘も咳も俱に氣が短縮となり息が續けられぬ。

腎は黒く善く恐る、臍下に動氣あり、腹脹し腫喘し溲便は不利なり、腰背も少腹も骨も痛みて欠氣す、心懸は饑うるが如く足は寒えて厥逆す。

黒は腎の色であるから病めば則ち面色が黒くなる。恐は腎の志であるから病めば則ち好く恐る。腎の部位は下にあるから病めば則ち臍下に動氣が發する。腎は水を主とするから病めば則ち水畜して腹脹し腫喘し喘して臥せられぬ。腎は竅を二陰に開くから病めば則ち溲便が不利となる。腎は骨を主とし膀胱と表裏をなすから病めば則ち少腹が滿し背と骨とが俱に痛む、腎は欠を主とするから病めば則ち呵欠する。腎邪が上部の心に乗じて病めば則ち心が空いて饑ゑたやうになる。諸厥は下部に屬して病めば則ち足が寒えて厥逆する。

正病は正色にして病たる多くは順なり、病色は交錯して病たる多くは逆とす、母が子に乗ずるは順にして

子が母に乗ずるは逆なり、相尅すれば逆にして凶、相生は順にして吉とす。

此條は五色を五病に合せて順逆生死の診法を明かにする。例へば肝病なれば色の青は是れ正病正色である。若し反て他色を見れば是は病色の交錯と爲す。若し黒色を見れば則ち腎水の母が肝木の子に乗ずるとし相生にして順と云ふべく、若し赤色を見れば則ち心火の子が肝木の母に乗ずるとし相生なるが逆といふべく、若し黄色を見れば則ち肝病が脾土の黄色を尅してゐるとして其病は悪化せぬ。是を凶中の順と爲す。若し白色を見れば肺金の白色が肝病を尅してゐるのである。病が甚しうなくとも之を凶中の逆と爲す。相尅逆凶とは大抵は相尅を凶と爲す。凶中の順ならば尙ほ施すべき術はあれど、凶中の逆は必ず絶望なるべきをいふ。相生順吉とは相生は吉とするが、子が母に乗ずるが如きは吉中の小逆と爲し、母が子に乗ずるが如きは吉中の大順と爲すを謂ふ。餘の四藏も皆此に倣うて推知すべし。

色は藏より生じ各々其部に命す、神は心に藏し外候は目にあり、光の晦きは神が短に、了々たるは神が足る、單失は久病にして相失は則ち故す。

此條は色相を以て兩目の神に合せ疾病の生死を診する法である。蓋し五色は五藏より生じ各々其部位に命じて顔面に見はれる。神が心に藏するとは識り得られぬとしても其外候は目にありと爲す。其目光の晦暗なるは則ち此れ神が不足であり病死の候と爲し、若し目睛が清瑩にして瞭々と分明であれば即ち此れ神が有餘であり不病の候と爲す。單失とは或は色か或は神か孰れか其一を失うて居れば則ち必ず久病なるを謂ふ。双失とは神も色も俱に失うて居れば則ち必ず死を主とするを謂ふ。

面目の色は各々相當るあり、交々互に錯見するは皆身亡を主とする、面の黄なるは救へることあり、背の紅なるは疹瘍にして背の黄なるは病が愈え晴の黄なるは發黄とす。

此條は色相を兩目の色に合せて病を診する法である。面目の色は各々相當の色がある。面の色相は肝は青く心は赤く脾は黄に肺は白く腎は黒きが如く、又目の色相は睛腫は黒く烏珠は青く白珠は白く兩眦は紅に兩眶は黄なるが如し。若し目の青、目の赤、目の白、目の黒等が面色と同じからずして皆交互に錯見を爲して病む者は皆必ず死亡を主とす。唯面色の黄なる者のみは脾土が未だ敗れず、五行上に救はるゝ道がありとせられて皆死なぬ。若し傷寒病にして兩目の目眦が紅なれば則ち疹瘍を發する兆と爲し、兩目の目眦が黄なれば則ち病が將に愈えんとする徴と爲す。若し兩睛が通黄なれば則ち黃疸を發する候とせらる。

目を閉づるは陰の病にして目を發くは陽を病む、朦朧は熱盛にして時に瞑するは衄の常なり、陽絶には戴眼し陰脱には目が盲し氣脱には眶が陥り、睛の定まるは神の亡するなり。

此條は目に依て陰陽生死を診する法である。凡そ病者が目を閉づるは則ち病が陰分にと爲し、目を開くは則ち病が陽分にと爲す。朦朧として昏く了々ならぬは、閉目するでもなく則ち熱盛の爲に神を傷するのである。視て時に瞑するは閉目ではなく則ち衄血の常候と爲す。目上して直視するを戴眼と謂ふ、則ち陽絶の候と爲し、視れども物の見えぬを目盲と謂ふ。則ち陰脱の候と爲し、目眶が忽ち陥るは則ち氣脱の候と爲し、睛が定つて轉せぬは則ち神亡の候と爲す。以上は色診即ち望診の大概である。熟讀し咀嚼し自得せられて、之を實際化し必須的のものとなせねばならぬ。

#### 第四節 聞診

五色は既に審かにせり、五音を當に明にすべし、音は聲を以て生じ聲の餘韻なり、音は遂に以て名あり、角徵宮商は羽と並んで五聲とす。

此條は五音は乃ち天地の正氣であり人類の中聲であることを明かにせらる。聲があつてから音がある、故に聲は音の本にして音は聲から生ずる。聲の餘韻、即ち之を音と謂ふのである、聲の外に別に音がある譯ではない。五色が五藏に命じて人の病を診することは既に審かにせられた。而して五音が五藏に通じて人の病を診することも亦當に明かにせねばならぬ。角は木に屬して肝に通じ、徵は火に屬して心に通じ、宮は土に屬して脾に通じ、商は金に屬して肺に通じ、羽は水に屬して腎に通ず。

中は空にして竅あり、故に肺は聲を主とす、喉を聲路と爲し會厭は門口たり、舌を聲の機と爲し唇齒は煽助す、寬あり隘あり銳あり鈍あり厚あり薄あるの故なり。

此條は聲音に各々主とする所がある診法を明にする、凡そ萬物の中空にして竅のある者は皆能く鳴る。故に肺が之に象つて聲を主とす。凡そ發聲は必ず喉より出づ、故に喉を聲音の路とし、必ず會厭の開闔に依る。故に會厭を聲音の門戸とし、必ず舌を藉りて宛轉させる。故に舌を聲音の機とし、必ず之を牙齒と唇口とに資する。故に唇齒を聲音の煽助とする。喉と會厭と舌と唇と齒との五者が相須つての故に能く五音を出して遠近に宣達せらるゝのである。若し夫れ喉には寬隘がある。寬なるは聲が大に隘なるは聲が小に、又舌には銳鈍がある。銳なるは聲が辨ぜられ鈍なるは聲が真ならぬ。又會厭に厚薄がある。厚い者は聲が濁り薄い者は聲が清む。唇にも亦厚薄がある。厚き者は聲が遅く薄き者は聲が疾い。牙齒にも疎密がある。疎なるは聲が散じ密なるは聲が聚る。此五者は皆無病の聲音である、乃ち音聲の大小も辯納も清濁も遲速も散聚も唯形質の稟賦が同じからぬ迄である。此に由て推考すれば喉にあり會厭にあり舌にあり齒牙にあり唇にあり齒を以て當に區別があるべき譯となる。

舌は中に居て發す喉音の正宮とす、極めて長く下は濁る、沈厚にして雄洪なり、口を開いて顎を張れば口音の商は成る、次に長く下は濁る、鏗鏘として肅清なり、口を撮むは唇の音にして極めて短く高清に、柔細

にして透徹す、尖利なるは羽の聲なり、舌を齒に點する音にして次に短く高次に、抑揚あり咏起す、微の聲は始て通ず、角は舌を縮むる音なり、條暢して正中す、長短も高下も清濁も和平なり」。

此條は聲音の無病な常情の診法を明かにせらる。内經に「天は人を養ふに五氣を以てし、五氣は鼻に入り心肺に藏し、上は五色を修明にし能く聲音を彰かならしむ」と曰へり、故に五藏には各々正音があつて五音に合ふ。舌は正中に居て喉より發音する、此が宮の正音である。其聲は極めて長く極めて下り極めて濁り沈洪雄厚な韻があつて土に屬し入て脾に通ずる。

口を開き嚶を張れば音は口より出づ、此が商の正音である。其聲は次に長く次に下り次に濁り鏗鏘清肅な韻があつて金に屬し、入て肺に通ずる。

口を撮んで唇より發音する、此が羽の正音である。其聲は極めて短く極めて高く極めて清く柔細尖利の韻があつて水に屬し入て腎に通ずる。

舌を齒に點して音を成す者は乃ち微の正音である。其聲は次に短く次に高く次に清く抑揚咏越の韻があつて火に屬し入て心に通ずる。

内に其舌を縮めて音を成す者が乃ち角の正音である。其聲は長短も高下も清濁も相和して條暢中正の韻があつて木に屬し入て肝に通ずる。此が五藏不病の常聲である。嚶とは齒の本にある肉を謂ふ。

喜ぶ心の感ずる所は忻散の聲なり、怒る心の感ずる所は忿厲の聲なり、哀む心の感ずる所は悲嘶の聲なり、樂む心の感ずる所は舒緩の聲なり、敬する心の感ずる所は正肅の聲なり、愛する心の感ずる所は溫和の聲なり。

前條までには咽喉、會厭、舌、齒、口唇の稟賦の構造が不同であつて無病の聲音を分けられたが、此條は又人の情緒が物に感じて發する無病なる聲音を明かにせらる。

喜が心に感じての發聲は必ず忻悅であり且つ散ずる。怒が心に感じての發聲は必ず忿急であり且つ厲しい。哀が心に感じての發聲は必ず悲悽であり且つ嘶く。樂が心に感じての發聲は必ず舒緩であり且つ迫らぬ。敬が心に感じての發聲は必ず正直であり且つ肅斂である。愛が心に感じての發聲は必ず溫柔であり且つ和する。醫師は茲に類を比べて不病の聲音を推知すれば自ら有病の聲音が認識せらるゝであらう。

五色の變あり、變すれば則ち病は生ず、肝は呼んで急に、心は笑うて雄に、脾は歌うて以て漫に、肺の哭は促聲にして腎の呻は低微なり、色の尅するは則ち凶とす。

此條は五聲の變より病を生ずる診法である。五聲が正を失へば即ち之を變と謂ふ。變すれば即ち病が生ずる。肝は呼ぶ而して聲は急なり。肝聲が正を失へば病は肝に生ずるを知り、心は笑ふ而して聲は雄なり。心聲が正を失へば病が心に生ずるを知り、脾は歌ふ而して聲は漫なり。脾聲が正を失へば病が脾より生ずるを知り、肺は哭する而して聲は促まる。肺聲が正を失へば病は肺より生ずるを知り、腎は呻く而して聲は低微なり。腎聲が正を失へば病が腎より生ずるを知る。所謂「色が尅すれば凶なり」とは例へば肝病にして呼聲が急なるに、若し相尅の白色を得たならば則ち凶を主どるのである、餘藏は之に倣うて知らるべし。

好言する者は熱にして懶言するは寒なり、言の壯なるを實と爲し言の輕きを虛と爲す、言の微なるは復し難く氣を奪はると知るべし、譫妄して倫なきは神明は已に失ふ。

此條は聲音により病の寒熱虛實生死を診する法である。中藏經に曰ふ、陽候には語が多い、是れ熱である。陰候には聲

が少い、是れ寒である。發言の壯厲なるは實であり發言の輕微なるは虚である。若し言聲が微小にして喉より出だせなく、言はんと欲して又言へない者は是れが則ち奪氣である。謔言妄語して親疎を區別せぬ者は神明が已に喪失してゐる、此等は皆死候を主とる。

失音すれば聲は重し、内火外寒、瘡の痛み久しき、勞啞が然せしむ、啞風の語らざる治すと雖ども命は難し、謳歌して失音するは治せずとも亦愈ゆ。

此條は失音の病が同一ならざる診を明にする。失音すれば聲が粗重となる、乃ち内火が外寒の爲に肺が過鬱せられた者である。若し聲が粗重でなく且つ瘡が爛れて痛が日久しう流連する者は、是れ勞啞に因て然かせしめらるゝのである。小兒が抽風の爲に語らぬ者、大人が中風に依り語らぬ者、共に之を啞風と謂ふ。力を竭して之を治しても生命は則ち終に挽回し難い。是は金(肺)が木(肝)を制せられぬに因る。謳歌して失音する者は是は放歌に因て喉嚨を傷めたのである、治療を施さなくとも亦自ら痊える。

「附言」天に分野があり地に方隅がある。之に依て聲音にも各民族に異同がなくてはならぬ。宮(土、喉)商(金、口)角(木、舌)徵(火、齒)羽(水、唇)は支那の五聲であるが、皇國の五聲は「ア」は喉音、「オ」は唇音、「ウ」は齒音、「エ」は舌音、「イ」は牙音と云ふ順序となり、アオウエイが木火土金水に該當せられ、濁音半濁音を合せて七十五聲となる。而して在來の五十音とは其配列を異にしてゐる、是が古傳の眞澄鏡と稱せられる者である。皇國固有の聲音には鼻音や拗音の如き雜糅の者はなく、悉く純正な聲音のみが發せられて、茲に國體民族が如何に優秀なるかを候ひ知らるゝ。聲音に依り診病がせらるゝと同様に、推して其性格の一斑をも大觀するを得べく、言靈の妙諦は別に眞澄鏡に就いて研鑽し會得せられんことを希望す。

### 第五節 問 診

聲と色とは既に詳かなり、問も亦當に知るべし、其五入を視て以て起止を知る、心は五臭を主どり自ら入るを焦と爲し、脾は香とし腎は腐とし肺は腥とし肝は臊とす、脾は五味を主どり自ら入るを甘と爲し、肝は酸とし心は苦とし肺は辛とし腎は鹹とす、腎は五液を主どり心は汗とし肝は泣とし自ら入るを唾と爲し脾は涎とし肺は涕とす。

此條は五入によりて病を問ふ診法を明かにせらる。肺は五聲を主どり、肝は五色を主とる。五入の内にて其二は前條に於て已に之を詳明せり。而して之を問うて病を診する道も亦當に知るべし。内經に「之を治するは一に極す」と曰へり、此の一なる者は其因由を問うて其情偽を得ることである。其要諦は五入を視るにあり、即ち之に依て病情の起止が知られる。例へば心は五臭を主とる、凡そ病者が臭を喜び臭を惡むは皆心の機能が之を主とる、之は統合して之を言ふのである。若し區分して之を各藏に就いて言ふならば則ち心自ら入る焦を喜び病は心に生じ、脾に入る香を喜び病は脾に生じ、腎に入る腐を喜び病は腎に生じ、肺に入る腥を喜び病は肺に生じ、肝に入る臊を喜び病は肝に生ずと知られる。脾は五味を主とる、凡そ病者が味を喜び味を惡むは皆脾の機能が之を主とる。此は統合して之を言ふのである。若し區分して之を各藏に就いて言へば則ち脾自ら入る甘を喜び病は脾に生じ、肝に入る酸を喜び病は肝に生じ、心に入る苦を喜び病は心に生じ、肺に入る辛を喜び病は肺に生じ、腎に入る鹹を喜び病は腎に生ずと知られる。

腎は五液を主とる、凡そ病者に液が多い液が少いのは皆腎の機能が之を主とる。此は統合して之を言ふのである。若し區分して之を各藏に就いて言へば則ち腎自ら入り出で、唾となれば病は腎に生じ、心に入り出で、汗となれば病は心に

生じ、肝に入り出で、涙となれば病は肝に生じ、脾に入り出で、涎となれば病は脾に生じ、肺に入り出で、涕となれば病は肺に生ずと知られる。其聲の微壯と色の順逆との診法も同様に推知せらる。

百病の常は晝は安く朝は慧く夕は加はり夜は甚だしきは正邪の進退による、潮の如く作る時は精神は貴と爲す、衰へざる者は實にして困弱なるは虚の累ひなり。

此條は問うて精神の盛衰虚實を知る診法である。凡そ病は朝に慧い譯は、朝は即ち人氣が始めて生じ衛氣が始めて行く時であるから慧いのである。晝に安い譯は日中は則ち人氣が長じて邪氣に勝つ時であるから安いのである。夕に加はる譯は夕は則ち人氣が始めて衰へ邪氣が生ずる時であるから加はるのである。夜に甚だしき譯は夜半は則ち人氣が藏に入り邪氣が身に居る時であるから甚しいのである。此を百病の消息、邪正が進退する常規と爲す。凡そ病が潮の如く來り發作する時に精神を貴しと爲す譯は、病が至ても精神が衰へねば則ち邪氣が正氣に勝たれない爲め乃ち正氣が實してゐるからである。又病が至て精神が困弱であれば則ち正氣が邪氣に勝たれない爲め乃ち正氣が虚してゐるからである。

晝に劇にして熱するは陽が陽に旺し、夜に劇にして寒するは陰が陰に旺す、晝に劇にして寒するは陰が上つて陽に乘じ、夜に劇にして熱するは陽が下つて陰に陷る、晝夜に寒厥するは重陰にして陽がなく、晝夜に煩熱するは重陽にして陰がない、晝に寒し夜に熱するは陰陽の交錯なり、飲食の入らざるは死して終に却け難し。

此條は問うて晝夜の起居を知り病の陰陽、氣血生死を診する法である。晝は陽、熱も陽である。凡そ病の晝間は則ち増劇煩熱し夜間の安靜な者は、是は陽が自ら陽分に旺して氣が病んで血が病まぬに因る。夜は陰、寒も陰である。凡そ病に夜間は則ち増劇寒厥して晝間の安靜な者は、是は陰が自ら陽分に旺して血が病んで氣が病まぬに因る。凡そ病が晝間は則

ち増劇寒厥して夜間の安靜な者は、是は陰が上つて陽分に乘じた病である。凡そ病が夜間が則ち増劇煩熱して晝間の安靜な者は、是は陽が下つて陰分に陥つた病である。凡そ病が晝夜俱に寒厥する者は是は重陰無陽の病であり、凡そ病が晝夜俱に煩熱する者は是は重陽無陰の病である。凡そ病が晝間は則ち寒厥し夜間は則ち煩熱する者は陰陽交錯と名づくる。陰陽交錯にして若し飲食が咽に下らねば其人は死して終に病は却け難い。

食は多く氣は少きは火化が新に痊ゆ、食が少く氣が多きは胃肺の兩愆とす、冷を喜むは熱あり熱を喜むは寒あり、寒熱虚實は多少の間なり。

此條は問うて飲食を知る診法である。食が多く随つて氣も亦盛なるは此れ其常法である。若し食が多きに比して氣が少きは是れ胃病ではない。火化即ち病が新に愈え食食して穀氣が未だ足りないに因る。食が少く随つて氣も亦少きは此れ其常規である。若し食が少きに比して氣が多ければ、則ち必ず胃病的な食か肺病的氣逆か胃肺兩經の故障に因る。冷物を好む者は胃中に必ず熱があり、熱物を喜む者は胃中に必ず寒がある。若し虚熱なれば則ち冷を飲むことが少く、實熱なれば則ち冷を飲むことが多く、又虚寒なれば則ち熱を飲むことが少く實寒なれば則ち熱を飲むことが多い。故に寒熱虚實の辨は多少の間に存在してゐると心得ねばならぬ。

大便の通閉は虚實に關す、熱なきは陰結にして寒なきは陽利なり、小便の紅白は熱寒を主どる、陰虚は淺紅にして濕熱は白泔とす。

此條は問うて大小二便を知る診法である。大便の利と不利とは裏の虚實に關する。閉するを實と爲す。若し内外並に熱證がなければ則ち陰結の便閉と爲す。通するを虚と爲す。若し内外並に寒證がなければ則ち陽實の熱利と爲す。小便の紅と白とは裏の寒と熱とを主どる。紅を熱と爲す。若し平素より淺紅淡黄なれば則ち陰虚と爲し。白きを寒と爲す、若し平

素が白濁なる米泔（よど）の如きは則ち濕熱の化する所と知るべし。

望んで以て色を觀、問うて以て情を測る、醫を召して榻に至らしむ、眄（ま）みず驚かず、或は之に痛みを告ぐ、並に苦しき容なし、色と脈と皆和せば詐病の欺蒙なり。

此條は色診と問診とを斟酌して病の眞僞を斷する法である。望色は只病の個處を知るに止る。問はねば病の情は測られぬ。大抵病者は初診の醫師が榻（た）に至れば則ち眄（ま）視（し）て驚起せぬ者はない、若し驚起せずして眄（ま）視（し）するは病がないでないが必ず驕恣の輩である、又若し病者が或は之に痛を告ぐるに依り醫師が其面を視れば少しも病苦の容態がなく、而も其色も其脈も皆和するを診すれば、此は乃ち詐病して醫師を欺蒙するものである。

之を脈すれば呻吟するは病者の常情なり、頭を揺りて言ふ、護る處は必ず疼む、三言して三止す、言の蹇（せま）むは風と爲し唾を嚙んで呵欠するは皆病にあらざる微なり。

此條は聲を情に合せて病の眞僞を診する法である。醫師が脈を診すれば病者が呻吟するは其病の爲に苦しむものにして、之を如何ともせられぬが常情である。凡そ言はんと欲して先づ頭を揺る者は、是れ極めて痛むが爲に發聲に難み、頭を揺つて痛みを緩めたい意志を示すのである。若し手で腹を護れば則ち裏痛と判じ、頭を護れば則ち頭痛と認む。唯護る所がある處に必ず痛む所がある。脈を執る時に病人が三言三止するとは、言はんと欲して言へず、言へぬと言はうと思ふことが三度にも及ぶ。言語が蹇（せま）んで發せられぬ者は風病である。若し言語が蹇（せま）む風病でなく徒に三言三止する者は、是は詐病の態を作らんが爲めである。或は診脈する時に唾を嚙んだり呵欠（あ）したりするは皆病がない微である。抑も嚙唾する者は裏氣が和して居り、呵欠する者は陰陽が和しあるからである。此二事を擧げて其情狀の眞僞を診別すれば則ち其他も推測せられる。蓋し意（い）は病者をして其欺（たぶ）きを售る能はざらしめ、又醫師をして患者に欺かれて妄りに治を施さざらしむるにある。

黒色にして痛みなきは女疸の腎傷ならん、疸にあらざれば畜血か、衄下して後は黄となる、面の微かに黄黒にして、紋の口角を繞ぐる、饑瘦の容は詢へば必ず噎膈なり。

此條は色に合せて病を診する法である。黒色は當に痛を主どるべし。而して之を問へば痛む所がない。則ち或は腎傷の女勞疸であらうか、之を察するに又女疸でもなければ、則ち其中に畜血があつて顔の外面に變色すると推せらる。併し畜血の爲に黒ければ則ち必ず或は吐衄（と）し或は下血したる後は即ち黄色に轉ずる。是れ瘀血が去つたからである。又顔面の微黒黄なりとは乃ち淺淡な瘀色を言ふのである。而して其壽帶（じゆう）紋（もん）を視るに短きか若しくは口角を繞繞してゐれば亦畜血ではない。乃ち人相家が所謂「蝮蛇（ほう）が口に入るは其人の饑死を主どる」ものにして、更に其人に饑餓削瘦の容態があるを視れば、則ち食せられぬ噎膈病があると斷じて良い。

白けれど脱血ならず脈は亂絲の如し、問へば恐怖に因る、氣は下り神は失ふ、乍ち白く乍ち赤く脈の浮なるは氣の怯なり、羞愧し神が蕩して此氣色あり。

此條は色を情に合せての診法である。白きは脱血して元氣が虚したる色である。然るに之を察するに更に脱血の證がない、之を問うて始めて恐怖に因りしことが知られる。恐すれば則ち血が氣に隨つて下るから色が白くなり、怖すれば則ち神が氣に隨つて失はれるから脈が亂絲の如くなる、又乍ち白く乍ち赤きは氣血が不定の色であり、脈は浮にして氣の怯ゆるは神氣が不安な象である。之を問うて始めて中心に羞愧があつて此の氣色を見はしたと知られる。羞づれば則ち氣が収まるから氣が怯ゆる、愧づれば則ち神が蕩するから脈が浮となる。茲に情色の二端を擧げて一には病を診し一には情を診す。他は類推すべく總て臨床にある者は神にして之を明かにせねばならぬ。

眉に五色の起るは其病は皮にあり、營が變じて蠕動するは血脈と知るべし、眇目は筋病にして唇口は肌を

主どり耳は骨病を主どる、焦枯し垢泥す。

此條は色相を皮、脈、肉、筋、骨に參合しての診病の法である。凡そ眉間に五色が起れば病が皮部にありと爲す、是れ肺が皮毛を主どるに由る。營が五色に變じて蠕々然と動くは病が脈部にありと爲す、是れ營には血脈が行ぐるに由る。背目に五色が起れば病が筋部にありと爲す、是れ肝が筋を主どるに由る。唇口に五色が起れば病が肌部にありと爲す、是れ脾が肉を主どるに由る、耳に五色が起れば病が骨にありと爲す。是れ腎が骨を主どるに由る、焦枯垢泥とは乃ち枯骨は光澤がなくして外榮せぬをいふ。

### 第六節 雜 診

髮上は火に屬し鬚下は水に屬し皮毛は金に屬し眉の横はるは木に屬す、土に屬する毫は腋陰と臍腹と爲す、髮の直なる麻の如きは毛焦れて死故す。

此條は毛髮に因て診病する法を明かにする。髮は心に屬して上に長い、之を火に擬し。鬚は腎に屬して下に長い、之を水に擬し。通身の毛は肺に屬して皮膚に生ず、之を金に擬し。眉は肝に屬して横に長い、之を木に擬し。腋下や陰上や臍邊や腹中の毫は脾に屬して四維に應ず、之を土に擬す。凡そ毛髮は五藏に屬してゐるが併し皆血液より生ずる所と爲す、故に光澤があるを喜ぶ。若し毛髮が直立して麻の如く、又鬚毛が焦枯するは皆死候と爲す。

陰の絡は經に従うて常色あり、陽の絡は常なく時に隨うて變色す、寒の多きは則ち凝り、凝れば則ち黒青となる、熱の多きは則ち淖ぐ、淖げば則ち黃紅となる。

此條は色を絡脈に合せての診法である。絡には陰陽がある。陰經に従ふ絡を陰絡とし陽經に従ふ絡を陽絡とす。陰絡は

深くして内にあり陽絡は浮いて外にある。内にある者は見はれぬに依り唯經常の色に従うて之を治する、故に常色ありと曰ひ。外にある者は能く見はるゝに依り則ち四時の推遷する變色に従うて之を治す、故に陽絡は常がないと曰ふ。併し陽絡の變色も亦其色に依り寒熱を診するに外ならぬ。寒が多ければ則ち脈が凝る、凝れば則ち色が青黒となる。熱が多ければ則ち脈が淖ぐ、淖げば則ち色が黃紅となる。

胃の大絡を名づけて虛里と曰ふ、左乳の下に動く、過と不及とあり、其動くこと衣に應ずるは宗氣の外に泄るゝなり、促と結とは積聚にして至らざれば則ち死す。

此條は宗氣に因て病を診する法を明かにした者である。胃の大絡を虛里と名づくる。此の大絡は膈膜を貫いて肺を絡ひ左乳の下に出で、動いて衣に應ぜぬと宗氣を此處に候する。若し其動氣が微にして見えなければ則ち不及とし、宗氣が内に虚してゐると爲す。若し其動氣が甚しく上衣にまで應ずるは則ち太過とし、宗氣が外に泄るゝと爲す。若し動氣が三四至して一止し或は五六至して一止すれば則ち積聚ありと爲す。若し動病が絶えて至らねば則ち死を主どる。

脈と尺とは相應す、尺の寒なるは虚瀉にして尺の熱なるは温を病むか陰虚の寒熱か、風病は尺が滑し痺病は尺が濇し尺の大は豊盛に尺の小は虧竭す。

此條は尺を診する法を明かにする。尺とは關上より尺澤穴に至る皮膚をいふ。内經に「脈が急なれば尺の皮膚も亦急であり、脈が緩なれば尺の皮膚も亦緩であり、脈が小なれば尺の皮膚も亦減じて氣が少く、脈が大なれば尺の皮膚も亦貴して起り、脈が滑なれば尺の皮膚も亦滑となり、脈が濇なれば尺の皮膚も亦濇となる」と曰ふ。故に脈と尺とは相應するのである。若し尺の皮膚を診して寒なれば則ち虚瀉を主どり、尺の皮膚を診して熱なれば則ち温病を主どり、温病ならねば則ち陰虚寒熱勞疾を主どる。凡そ風病なれば則ち尺膚が滑であり、痺病なれば則ち尺膚が濇であり、氣血が實すれば則ち尺肉が豊盛であり氣血が虚すれば即ち尺肉が虧竭する。

肘に腰と腹とを候し手は股と足との端とす、尺外を肩背とし尺内を膺前とす、掌中に腹中を知り魚の青きは胃の寒とす、寒熱の所在に病は熱寒を生ず。

此條は肘臂の診法を明かにする。肘の上を髀と曰ひ、肘の下を臂と曰ふ。髀と臂との交節を肘と曰ひ、臂内を尺と曰ひ、尺外を臂と曰ふ。肘上に腰と腹とを候し、手は股と足とを候するを主どり、尺は胸膺を候するを主どり、掌中は腹中を候するを主どり、手の大指の本節後を魚と名づく。魚に或は青色があり或は青脈を現はせば胃中に寒あるを候す。其寒熱の所在の何處なるかを診して病に寒熱を生ずることを主どる。

臍の上下を診す、上は胃にして下は腸なり、腹皮の寒熱は、腸胃に相當す、胃は冷飲を喜み腸は熱湯を喜む、熱を灼々にする勿れ、寒を滄々にする勿れ。

此條は臍を診する法を明かにする。臍上に胃を候し臍下に腸を候す、其上下の腹皮を捫して寒熱あらば則ち胃腸に於ける寒熱に相當する病があるを知る。胃中に病があれば毎に冷飲を好み腸間に病があれば多くは熱湯を好む。是が其徵象である。併し之に熱飲を與へても灼々たる熱に過ぎてはならぬ。又之に寒飲を與へても滄々たる寒に過ぎてはならぬ。蓋し其意に任せば恐らくは過失があるかも知れぬ。只當に其溫冷の宜しきに適するを思はねばならぬ。

胃熱には口が糜る、懸心して善く饑う、腸が熱すれば利も熱し黄を出すこと糜の如し、胃が寒なれば清厥し腹脹して疼む、腸が寒なれば尿は白く殄瀉すれば腸鳴す。

此條は胃腸の寒熱が病を爲す診法を明かにす。胃中に熱があれば則ち上には口糜を發し、懸心、即ち心が空いて善く饑うる。腸中に熱があれば即ち瀉出の物も亦熱して其色が黄にして粥のやうである。胃中に寒があれば即ち面が清く、冷厥すれば即ち腹が脹つて疼む。腸中に寒があれば即ち小便が白く殄瀉して腸鳴がある。

木形の人其色が必ず蒼し、身は直にして五小、五瘦、五長なり、多才にして心を勞し多憂にして事に勞す、軟弱と曲短と、一つあれば良にあらず。

此條より以下の五條は皆色を形に合せての診法である。木形の人其色は青に合ふが碧蒼の如き潤あるを貴ぶ。身の直なるは木の幹が直なるに象る。五小とは頭が小、手足が小なるを謂ふ。乃ち木の巔枝に象る。五瘦五長とは身も手足も木の條細なるに象つて瘦長きを謂ひ、多才とは木の用は剗るに隨つて材を成すを謂ふ。多才の人は必ず心を勞する。多憂とは木の性は自ら靜かにしてゐられぬを謂ふ。多憂の人は必ず事に勞する。若し何處かに一つ形質に軟弱があつたり曲短があつたなれば皆良材とはせられぬ。

火形は赤明なり、小面にして五銳あり、反露に偏陋に神の清きは貴きを主どる、重氣にして財を輕んじ少信にして慮は多し、好く動いて心は急なり、最も不配を忌む。

火形の人は其色が赤に合うて明なるを貴ぶ。五銳とは頭額鼻面口の五ヶ所が火の炎上して尖銳なるに象るを謂ひ、五反五露とは五官が反外し露外するを謂ふ。是は火の性が張顯して外露するに象る。五偏五陋とは五官が不正にして醜陋なるを謂ふ。火が體を寄するには物に隨つて定め難きに象る。凡そ此の反露も偏陋も皆火の敗形である。若し神が清くして明かであれば是は火の神を得た者と爲し即ち反つて貴きを主どる。重氣とは火が陽に屬して多氣なるに象るを謂ひ。輕財とは火の性が多散なるに象るを謂ひ、少信とは火の性が變じ易いに象るを謂ひ、多慮とは火の明が物を燭するに象るを謂ひ、好動とは火の用が靜かならぬに象るを謂ひ、心急とは火の性が急速なるに象るを謂ふ。最も神が痴鈍であり氣が濁り色が悖れるを忌み嫌うて即ち不配と爲す、皆敗形である。

土形の狀は黄亮にして五圓なり、五實に五厚に五短の全きを貴ぶ、面は圓に頭は大に、腹も股も肩も厚く、



人を容れて信あり、行は緩かに心は安し。

土形の人其色は黄に合うて亮かなるを貴ぶ。五圓とは土の形が圓なるに象るを謂ひ、五實五厚とは土の質が實厚なるに象るを謂ひ、五短とは土の形が敦短なるに象るを謂ふ。圓實であり厚短であり五者が俱に全く各一形を成すは皆土の正形であれば則ち貴きを主とる。面圓も頭大も厚腹も美肩も美股も皆土の厚實なる状である。人を寛容して信があり行は緩かに心の安きは皆土の賦性が厚いのである。

金形は潔白とす、五正に五方に五朝に五潤に、偏削は敗亡なり、居處は靜悍に、行は廉に性は剛に、吏と爲して威肅あり、小を兼ねるも傷むことなし。

金形の人其色が白に合うて潔なるを貴ぶ。五正五方とは金の形が方正なるに象るを謂ひ、五朝とは金は骨を主どり骨節は内は明堂に朝するを貴ぶを謂ひ、五潤とは金が水を藏するに象るを謂ふ。偏すれば則ち方正ならず、削すれば則ち骨が露陷する。是は敗亡の形である。居處靜悍とは金は靜肅であり且つ精悍なるに象るを謂ひ、行廉性剛とは金の性は潔白であり且つ剛健なるに象るを謂ひ、爲吏威肅とは金の性が肅殺なるに象るを謂ひ、兼小無傷とは方正朝潤なれば則ち小なればとて金の正形を傷むに足らぬを謂ふ。

水形は紫潤なり、面は肥えて平かならず、五肥に五嫩に五秀に五清に、流動して身を搖るがし、常に敬畏せず、内に欺き外に恭し、粗濁なるは廢を主とる。

水形の人其色が紫に合ひ潤色なるを貴ぶ。面が肥えて平かならぬは水が面積は廣く波浪あるに象る。五肥とは水の形は廣く且つ大なるに象るを謂ひ、五嫩とは水の性が滋潤なるに象るを謂ひ、五秀五清とは水の質が清澈なるに象るを謂ふ。肥嫩の質は發行するに常がある。流動搖身とは水が流動して一處に居らぬに象るを謂ひ、常不敬畏とは水の性は下に趨い

て上らぬに象るを謂ひ、内欺外恭とは水の質は内が虚にして實なきに象るを謂ふ。若し神氣が粗濁であれば皆廢形を主とる。

相得るに貴び、最も相勝を忌む、形の色に勝つは微にして色の形に勝つは重し、勝つ時の年に至て加ねて感ずれば即ち病む、年忌は七と九とす、猶ほ宜しく慎恐すべし。

此條は其形を得て其色を得ない診法を明かにせらる。例へば木形の人其法則から云へば當に色は青でなければならぬ。是が形と色が相得て不病と爲し貴い形とせらる。若し之が黄色を得るとか或は白色が見はれたとすれば、是を相勝と爲して病を主どり最も忌む所である。黄色を見はした者は則ち形が色に勝つとして病は微なるを主どり、又白色を得たとすれば則ち色が形に勝つとするから病は重きを主とる。其病の生ぜんとするは必ず木に勝つ時の年に至り、木に勝つ者は金、即ち(申酉の歲)重ねて外邪に感ずれば即ち病むのである。年忌とは五行の人の形色が相勝つ者を謂ふ。凡そ生れて七歳に至る之を年忌と爲す。例へば子歳生れの七歳は午歳に當り子が水、午は火であるから相忌む。其餘は之に準じて知るべし。而して是の七歳に九を遞加して十六歳二十五歳三十四歳四十三歳五十二歳六十一歳は皆年忌の年である。九を遞加するは九が極數であるからだ。此の年忌の年に當て加ねて外邪に感じ病を得れば則ち劇甚である。故に尤も宜しく戒慎恐懼すべしとは云ふ。

さて皇國の厄歳と言ふは十九歳二十五歳三十三歳(女)三十七歳四十二歳(男)を云ふ。殊に三十三歳四十二歳の厄歳には非常に恐懼戒慎して其産土神社に除厄を祈願するが國習となつてゐる。

形に強弱あり肉に脆堅あり、強者は犯され難く弱者は干され易し、肥えて食の少なきは痰なり、最も綿の如きを怕る、瘦せて食の多きは火なり、骨を著はすは全うし難し。

此條は形肉に依て生死の診法を明かにする。五形の人が各其純粹を得た者を皆強と謂ひ、其雜駁を得た者を皆弱と謂ふ。強者には加感の邪は犯し難く弱者には加感の邪に干され易い。能く食して形の肥えたる者は強である。若し食が少きに能く肥えたるは強ではなく乃ち瘵病である。肥人は最も之を按へて綿絮の如きを怕る、之を無氣と稱へて則ち死を主とる。食が少くして瘦する者は弱である。若し食が多くして瘦する者は弱ではなく乃ち火病である。瘦人は尤も肉が乾びて骨を著はすを怕る。之を消瘦と名づけて亦死を主とる。

形と氣と已に脱すれば脈は調へども猶ほ死す、形氣は不足するとも脈が調へば醫すべし、形は盛にして脈の小なる、少氣なるは治するを休めよ、形の衰へて脈の大なる、多氣なるは死の期なり。

此條は形を色に合はせて生死を診する法を明かにする。内經に「形氣が已に脱すれば九候は調ふとも猶ほ死す」と曰へり、是れ形が脱して元氣が貯へられぬを謂ひ、形氣が俱に虚してゐても寸口の脈が調へば醫せられるとするは、形氣が未だ全く相失はぬを謂ふ。形は旺盛にして肥滿してゐても脈が小であり、氣が少い者は氣が形に勝たれぬを謂ひ、形が衰弱して削瘦してゐても脈が大であり、氣が多い者は形が氣に勝たれぬを謂ふ。此等は皆形氣が平衡を失うてゐるから死を主とると爲す。

頭の痛むは喘の疾なり、目裏に腫水し、面が腫れたるは風水とし足が腫れたるは石水とす、手が腫れて腕に至り足が腫れて踝に至り面が腫れて項に至る、陽の虚にして嗟くべし。

此條は形が腫れて病む者の生死を診する法を明かにす。其病者を視るに人迎穴の頸動脈搏が大なるは喘して臥せられぬ病を主とる。目裏の上下が腫れたる者は水氣ある病を主とる。面より腫れが起る者を風水と名づけて陽水と爲す。足脛より腫の起る者を石水と名づけて陰水と爲す。若し手の腫れが腕に至り足の腫れが踝に至り面の腫れが項に至るは水病では

ない。乃ち陽氣の虚結にして不歸の死證と爲す。

頭を傾け視ること深く背を曲げて肩に隨ひ坐すれば則ち腰は痿え、轉搖すること遲回にして行けば則ち僂俯し、立てば則ち振掉するは形神が將に奪はれんとす、筋骨は尪頰なり。

此條は形が憊れて死候の診法を明かにする。内經に「夫れ五藏は身の強なり」と曰へり。頭は精明の府である、然るに頭が傾き深視するは精神が將に奪はれんとする兆と爲す。背は胸中の府である、然るに背が曲つて肩に隨ふは府が將に壞れんとする徴と爲す。腰は腎の府である、然るに轉搖が難澁なるは腎が將に憊れんとする候と爲す。膝は筋の府である、然るに伸びず歩行せられず則ち僂俯するは筋が將に憊れんとする證と爲す。骨は髓の府である。然るに久しう立つて居られず歩めば則ち振掉するは骨が將に憊れんとする象と爲す。凡そ此等は形も神も將に奪はれんとし、筋骨が尪頰の形狀なるが故に皆死候を主とる。

太陰の情狀は貪にして不仁なり、入るを好んで出すを惡む、意を下して貌は親み、時勢に隨はず、後れて人に動き、長大にして僂に似たり、其色は黧々たり。

此條より以下は陰陽の人の情狀により陰陽の盛衰を別つ法を明かにする。太陰は陰が盛んであり柔に過ぐるから貪欲であり不仁である。好入惡出とは陰の性は深藏するを謂ひ、意を下して貌は親しむとは陰の性が卑柔なるを謂ひ、時勢に隨はずとは陰が靜かなるを好むを謂ひ、人に後れて動くとは陰の性が遲なるを謂ひ、長大とは陰盛の形を謂ひ、僂に似たりとは好んで身を曲げ僂して意を下すの態を謂ふ。其色が黒きこと黧々たるは陰盛の色と爲す。此が太陰の人の情狀である。

少陰の情狀は少しく貪つて賊心あり、失ふを喜び得るを慍る、傷害して恩なし、立てば則ち險躁にして和

すること寡く親むことなし、行くに伏鼠の如く懼れ易く欣び易し。

少陰は陰が微にして殘忍である。故に小を貪つて賊心がある。失ふを喜び得るを愠るとは陰性の嫉妬を謂ひ、傷害して恩なしとは陰性の殘忍なるを謂ひ、立てば則ち險躁なりとは陰性の危險なるを謂ひ、行くには伏鼠の如しとは陰性の隱伏するを謂ひ、懼れ易く欣び易しとは鼠の得失は欣然として進み懼然として退くが如きを謂ふ。此が少陰の人の情狀である。

太陽の情狀は自大にして軒昂し胸を仰ぎ腹を挺し足は高く氣は揚る、志は大にして虚説し事を作して強きを好み敗ると雖も悔ゆることなし、自ら用ふること常の如し。

太陽は陽盛であり過剛である。故に自大にして軒昂なり。胸を仰むけ腹を出し足を高くし氣を揚ぐるのである。好んで志を大にするは陽性は剛強を好むからである。好んで虚説するは陽性は誇張を好むからである、事を作しては強を好み事が敗れても悔いぬ者は、其平常に好んで自ら用ひ自らはとすることからであり、是も亦陽が過剛な爲に斷するに果なるに依る。此が太陽の人の情狀である。

少陽の情狀は諛諦と自ら貴とし、志は小にして盈ち易く外を好んで内せず、立てば則ち好んで仰き行けば則ち好んで搖がし、兩臂も兩肘も常に背より出づ。

少陽は陽が微であり明が小である。故に諛諦として小を察し、自ら小官を貴とし志も小にして盈満し易い。外飾を好んで内實せぬは陽の性が外部であるからである。立てば則ち好んで仰きとは陽性の上るを謂ひ、行けば則ち好んで搖るぐとは陽性の動くを謂ひ、兩臂や兩肘が常に背より出づる者も亦陽の性が露出する事を喜び密藏する事を好まぬに依る。此が少陽の人の情狀である。

陰陽の正しきを得るは平和の人なり、懼々を爲すことなく忻々を爲すことなく、婉然として物に従ひ肅然

として自ら親しむ、謙々たる君子なり藹々たる吉人なり。

此條は陰陽平和の人の情狀を明かにせらる。妄りに懼れを爲さない者は中心に主とする所があつて而も威武に屈せぬ。徒に忻びを爲さない者は外物に惑はず而も富貴に淫せぬ。婉然として物に従ふとは豁然と大公無私であるから物が来るに隨て順應するを謂ふ。肅然として自ら親しむとは尊嚴を持って外を方正にし、恭敬を保ちて内を正直にするを謂ふ。夫れ此の如き人は天が必ず之を祐けるであらう。人も必ず之を愛するであらう。隨て福祿も之を綏んずるから如何でか之を謙謙たる君子とも藹々たる吉人とも謂はざるを得ぬであらう。以上の五者を明かにせば其人の陰陽盛衰が自ら察せられる。

## 第七節 脈 診

【序言】 四言の脈訣は漢の張仲景師が平脈法より創始せられ、宋の崔嘉彦氏が之を敷衍し、明の李時珍氏が刪補し及び李中梓氏が又之が補缺を爲し、大略其差謬を刪つて復註釋を加へられた。固より已に文は簡潔にして義は該博である。然も猶ほ經義と合はぬ所があるから、今皆刪去して其未だ備はらぬ者は之を補ふ事と爲した。

脈は血の府となす、百體を貫通す、寸口の動脈は大會して朝宗す。

内經に「脈は血の府なり」と曰へり。周身の血脈は其運行が之に由て貫通せぬはない、故に百體を貫通すると曰ふ。難經には「十二經中には皆動脈がある、而して獨り寸口を取て死生を決す」と曰へり。寸口とは左右兩手の寸關尺の寸であり乃ち手太陰肺經の動脈である、此處を脈の大會と爲す。故に「寸口に動脈は大會朝宗す」と曰ふ。

人の脈を診するは高骨の上を取る、何に因て關と名づくる、寸尺を界す。

凡そ人の脈を診するに其手を仰がしめば掌後に高骨が隆起するを見る。即ち之が關部の脈處である。醫師は手を覆うて

之を取る。先づ中指にて關部を取り定め、方に前後の二指を寸尺部の上に下す。病人が長なれば指を下すには宜しく疎なるべく、病人が短なれば指を下すには宜しく密なるべく、其寸尺二部の間を界するに因て名づけて關とは曰ふ。

魚に至ること一寸、澤に至ること一尺、此に因て名を命す、寸を陽とし尺を陰とす。

高骨より上つて魚際穴に至る一寸あり、此に因て命名して寸と曰ひ、高骨より下つて尺澤穴に至る一尺あり、此に因て命名して尺と曰ふ。寸部にて上を候ふから陽と爲し、尺部にて下を候ふから陰と爲す。

右寸は肺と胸と、左寸は心と膈と、右關は脾と胃と、左は肝と膈と膽と、三部は三焦にして兩尺は兩腎なり、左は小と膀胱と、右は大腸と認む。

右寸に指を浮べて胸中を候ひ沈めて肺を候ひ、左寸に指を浮べて腹中を候ひ沈めて心を候ふ。右關に指を浮べて胃を候ひ沈めて脾を候ひ、左關に指を浮べて膈と膽とを候ひ沈めて肝を候ふ。兩尺には指を沈めて俱に腎を候ひ、左尺は浮べて小腸と膀胱とを候ひ右尺は浮べて大腸を候ふ。膈とは腹中乃ち包絡なり。兩乳の中間に位し、氣海と稱せらる。五藏中の四藏は皆一個であるに唯腎のみ二個あるから兩尺に兩腎を候ふとは曰ふ。然るに内經は府を言うて膽に及ばぬは肝に寄するからであり、大小腸膀胱に及ばぬは腹中に統べらるゝからであり、三焦に及ばぬは寸にて胸中を候うて上焦を主どり關にて胸中を候うて中焦を主どり尺にて腹中を候うて下焦を主どる。此が内經の三部に分配しての診脈法に遵うた者である。然るに僞訣の方は大小腸を寸上に配し、三焦を左尺に配し命門を右尺に配し、而して其手厥陰包絡は竟に置いて言はぬなどは悉く不經に屬する。滑壽氏は左尺にて小腸膀胱及び前陰の病を候ひ、右尺にて大腸と後陰との病を候ふ事にしてゐる。是は千古の隻眼とも稱すべし。浮べて外に府を候ひ沈めて内に藏を候ふは府陽は外、藏陰は内なるに因り浮沈の義が生ずる、猶ほ卷末に詳かにする。

命門は腎に屬す、生氣の原なり、人に兩尺がなければ必ず死して瘥えず。

兩腎の中間を命門と名づく。即ち命門穴は兩腎の中間にあり、故に兩尺は之に屬する。命門の相火は即ち腎間の動氣にして是が人間生氣の原動である。若し兩尺の脈がなければ則ち生氣の絶えたる者にして病者は必ず死して平愈せられぬ。關脈は一分なり、右を食とし左を風とす、右を氣口と爲し左を人迎と爲す。

陰は尺中に一寸を得、陽は寸内に九分を得、合せて一寸九分が寸關尺脈の診せらるゝ處と爲す。之を三分に分つ。此に關上の一分と云ふは乃ち關上の一部分なり。左關の一分を人迎と名づく乃ち肝膽の脈である。肝膽は風を主どる。故に人迎が緊盛であれば傷風を主どり、右關の一分を氣口と名づく乃ち脾胃の脈である。脾胃は食を主どる、故に氣口が緊盛であれば傷食を主どる。此説は王叔和氏より創めらる。然るに之を實診に試みると毎多多くは應ぜぬ。されど此説が後世には崇宗せらるゝ所であるから、姑らく斯説を存せねばならぬ。されど内經の「足陽明胃經の頸上を通過する動脈を人迎と爲し、手太陰肺經の高骨にある動脈を氣口と爲す」と曰ふを觀れば、其誤謬なるを知るに足らん。



脈に七診あり、浮中沈と曰ふ、上竟と下竟と左右に推尋す。

浮とは軽く指を皮脈の間に下して得たる脈である。沈とは重く指を筋骨の間に下して得たる脈である。中とは輕からず重からず指を肌肉の間に下して得たる脈である。上とは兩寸を云ひ、竟とは即ち内經の所謂上竟の事である。乃ち上は胸や喉の中の事である。下とは兩尺を云ひ、竟とは即ち内經の所謂下竟の事である。乃ち下は少腹や腰や股や脛や足の中の事である。左右とは左右の手脈である、此七診にて乃ち取脈の法を推尋する、併し内經の獨大、獨小、獨寒、獨熱、獨遲、獨疾、獨陷下の七診脈を謂ふのではない。

男の左の大なるは順にして女の右の大なるは宜し、男の尺は恒に虚し女の尺は恒に實す。

天道は陽が左に盛んであり地道は陰が右に盛んである。故に男は左、女は右の脈が大なるを順とし宜しとす。天陽は南、天陰は北にあり、地陽は北、地陰は南にある。陽道は常に饒かにして陰道は常に虧くる。故に男の寸は恒に實し尺は恒に虚し、女の寸は恒に虚し尺は恒に實す。

又三部あり天地人と曰ふ、部に各三あり九候と名づく、額と頰と耳前と寸口の岐銳と、下は足三陰と肝と腎と脾胃となり。

此條は内經の三部九候論に遵ひ十二經中に皆動脈の診法があるを明かにする。三部九候とは上中下を謂ひ、天地人とは上中下の三部に各天地人の名があるを曰ひ、乃ち三部に各天地人の三があつて之を三にして合せて九候の名となる。上部の天は兩頰の動脈にして頰脈の部位に當り足少陽の脈氣の行ぐる所に頭角を候ひ、上部の地は兩頰の動脈乃ち地倉人迎兩穴の部位に當り足陽明の脈氣の行ぐる所に口齒を候ひ、上部の人は耳前の動脈乃ち和髎穴の部位に當り手少陽の脈氣の行ぐる所に耳目を候ふ。

寸口岐銳とは寸口の岐骨銳骨を謂ふ。中部の天は乃ち掌後の經渠穴の寸口の動脈にして手太陰の脈氣の行ぐる所に肺を候ひ、中部の地は乃ち手の大指の次指の岐骨の間の合谷穴の動脈にして手陽明の脈氣の行ぐる所に胸中を候ひ、中部の人は乃ち掌後の銳骨の下の神門穴の動脈にして手少陰の脈氣の行ぐる所に心を候ふ。

下足三陰とは五里、太谿、箕門の三穴にして肝腎脾胃を謂ふ。下部の天とは乃ち氣衝穴の下三寸なる五里穴の動脈にして足厥陰の脈氣の行ぐる所に肝を候ひ、下部の地は乃ち内踝の後の跟骨の傍の太谿穴の動脈にして足少陰の脈氣の行ぐる所に腎を候ひ、下部の人は乃ち魚腹上の越筋の間の箕門穴の動脈にして足太陰の脈氣の行ぐる所に脾胃を候ふ。

寸口の大會、五十は經に合ふ、其動に満たずして氣なければ凶なり、更に疎數を加へ止つて還らなければ期は短かるべく歲内に死し生き難しと定まる。

寸口の動脈が五十動にして一止するは經常とし不病の脈に合ふ。若し四十動に一止するは一藏の氣を失ふとし四藏の中に死するを主どり、三十動に一止するは二藏の氣を失ふとし三藏の中に死するを主どり、二十動に一止するは三藏の氣を失ふとし二藏の中に死するを主どり、十動に一止は四藏の氣を失ふとし一藏の中に死するを主どる。十動に満たずして一止するは五藏悉く氣を失ふとし、若し更に乍ち數、乍ち疎、止つて還へらぬ脈は則ち死期は短かるべく必ず一藏の中をも保ち難かるべし。

五藏の本脈は各々管<sup>つかさ</sup>どる所あり、心は浮大散、肺は浮濇短、肝は沈弦長、腎は沈滑軟、從容として和する脾は中遲緩なり。

此條は五藏には各々管する所の本脈があるを言ふ。必ず皆大ならず小ならず從容として和し、而る後に始めて五藏が病まぬ脈とせらる。

四時の平脈は緩にして和し<sup>と</sup>勻<sup>な</sup>ふ、春は弦に夏は洪に秋は毛に冬は沈なり。

此條は四時に各々應見する本脈があるを言ふ、必ず皆疾からず徐ならず緩かにして和し<sup>と</sup>勻<sup>な</sup>うて始めて四時不病の脈とせらる。

太過は實にして強なり、病は外より生じ、不及は虚にして微なり、病は内より生ず。

外感<sup>そと</sup>は六氣即ち風寒暑濕燥火の邪脈に因すれば洪大緊數弦長滑實を見はして太過となり、内傷<sup>うち</sup>は七情即ち喜怒憂思悲恐驚の傷脈に因すれば必ず虚微細弱短濇濡孔などの不及となる。

飲食や勞倦の診は右關にあり、力あるを實と爲し力なきを虚と看る。

凡そ病は外の六氣にも因せず内の七情にも因せぬ者を不内外因と爲す。即ち飲食や勞倦に傷せらるゝを謂ふ。飲食は胃を傷し勞倦は脾を傷する、故に右關の脈を以て診す。飲食は形を傷す、故に有餘となつて右關脈に力があり。勞倦は氣を傷す、故に不足となつて右關脈に力がない。三因百病の脈は陰陽浮沈遲數滑澹大小を論ずることなく、總じて力あるを皆實と爲し力なきを皆虚と爲す。内經に曰ふ「諸の陽脈は之を按へて鼓せず、諸の陰脈は之を按へて鼓すこと甚だし」とは此れ之を謂うたのであらう乎。

凡そ病脈を診するは平旦を準と爲す、虚靜に神を寧んじ息を調へて細かに審かにす。

内經に「常に平旦を以てするは陰氣は未だ動かず陽氣は未だ散せず、飲食は未だ進めず經脈は未だ盛ならず絡脈は調勻し氣血は未だ亂れぬ、乃ち有過の脈を診すべし」と曰ふ。又「診脈には道がある、虚靜を寶と爲す」と曰ふ。無思無慮、其心を虚にし且つ靜かにして、唯專一に神思を指下に凝らすを謂ふ。調息細審とは醫師が自己の氣息を調勻して精細に審察するを謂ふ。

一呼一吸を合せて一息と爲す、脈の來ること四至なるは平和の則なり、五至は痾なし閏以て太息とす、三至を遲と爲し、遲なれば則ち冷と爲す、六至を數と爲し數なれば則ち熱證たり、轉た遲に轉た冷に轉た數に轉た熱に。

醫師が氣息を調勻して一呼に脈が再至し一吸に脈が再至す。呼吸の息を定めて脈が來ること四至なるが乃ち和平の準則と爲す。併し何を以て五至を無痾とするか。凡そ人の氣息は時に長く時に短く、凡そ三息を鼓すると必ず一息の長があり、五息を鼓して又必ず一息の長がある。之を太息と名づく。猶ほ曆に於ける三歲に一閏があり五歲に再閏があると同視

せらる。言ふこゝろは脈は必ず四至を平と爲し、五至は便ち太過と爲すべきであるが、唯正當の太息の時にのみ始めて無病と曰へるのである。乃ち此れ息の長きにして脈の急なるにはあらずと知るべし。

若し正しい太息でなく四至に合ふものがある。乃ち性急な人は五至を平脈として太息の例に拘はらぬ。蓋し性が急なれば脈も亦急となる。若し一息にて脈が三至するは即ち遲慢にして不及とし、遲は冷病を主とす。若し一息に脈が六至するは即ち急數にして太過とし、數は熱病を主とす。若し一息に僅に二至を得たり甚しきは一至するなど、即ち遲なれば遲なる程冷病は深刻となる。若し一息に七至し甚しきは八至九至す。即ち數であれば數である程熱病は劇甚となる。一至も二至も八至も九至も皆死脈と爲す。

遲數は既明かなり、須らく浮沈を別つべし、浮沈と遲數とに内外の因を辨せよ、外は天に因し内は人に因す、天には陰陽あり風雨晦明とし、人には喜憂怒思悲恐驚あり。

浮脈は天に法りて表の病を候ふ即ち外因であり、沈脈は地に則りて裏の疾を候ふ即ち内因である。外因とば天の六氣にして風淫は木疾、寒淫は陰疾、暑淫は心疾、濕淫は腹疾、燥淫は澗疾、火淫は陽疾と爲す。内因とは人の七情にして喜は心を傷し怒は肝を傷し憂は思を傷し悲は肺を傷し恐は驚とは腎を傷す。

浮沈は既に辨す、當に滑澹を明かにすべし、澹は血滯と爲し滑を氣壅と爲す。

以上の六脈を諸脈の提綱と爲す。乃ち浮沈の二脈は諸の浮上沈下の部位を統べ、遲數の二脈は諸の三至や六至の至數を統べ、滑澹の二脈は諸の滑流澹滯の形狀を統ぶ。脈象は多々なれど部位に屬せねば即ち至數に屬し、至數に屬せねば即ち形狀に屬す。總ては此六脈に外ならぬ。故に諸脈の提綱とせらる。

浮脈とは皮脈にして沈脈とは筋骨なり、肌肉には中を候ひ部位は統屬せらる。

皮膚に取つて得たる者を浮脈とし、筋骨に取つて得たる者を沈脈とす。此は乃ち上下の部位に就いて名を與へた者である。凡ゆる脈の部位に因つて名を得た者は皆浮沈に統べらる。故に部位統屬とは曰ふ。心肺は俱に浮ぶ。皮毛に取つて之を得る者は肺の浮であり、血脈に取つて之を得る者は心の浮である。故に浮脈を皮脈と曰ふ。肝腎は俱に沈む。筋平に取つて之を得る者は肝の沈であり、至骨に取つて之を得る者は腎の沈である。故に沈脈を筋骨と曰ふ。肌肉は浮と沈との中間にあり、故に中を候ふと曰ふ。

浮にして力なきを濡とし、沈の力なきは弱なり、沈にして極めて力あるは牢とし、浮の極めて力あるを革とす。

浮脈にして力なき者を濡脈と曰ひ、沈脈にして力なき者を弱脈と曰ひ、浮脈の極めて力あるを革脈と曰ひ、沈脈の極めて力あるを牢脈と曰ふ。

三部に力ある其名を實と曰ひ、三部に力なき其名を虚と曰ふ。

浮中沈の三部が俱に力あるは實脈であり、浮中沈の三部が俱に力なきは虚脈である。

三部に力がなく之を按へて且つ小にして、有に似たり無に似たるは微脈と考ふべし。

浮中沈三部が極めて力がなく、之を按へるに頗る小にして、有るやうな無いやうな者は微脈と名づける。

三部に力なく之を按へて且つ大に、渙漫として收らざるは散脈と察すべし。

浮中沈三部が極めて力がなく、之を按へて且つ大であり渙漫にして收らぬを散脈と曰ふ。

惟中に力なき其名を朮と曰ふ、筋を推し骨に着けて伏脈を求むべし。

浮沈には力があり唯中に取つては力がない者を朮脈と曰ふ。筋を推し骨に着け、之を按へ始めて得らるゝを伏脈と曰ふ。

以上の十脈乃ち濡、弱、牢、革、實、虚、微、散、朮、伏は皆部位に因つて名を得た者である。故に皆浮沈の二脈に統べられる。

三至を遅と爲し六至を數と爲し四至を緩と爲し七至を疾脈と爲す。

一呼一吸を一息と爲す。一息に三至が遅脈、一息に六至が數脈、此は脈の至數に依り名を得た者である。凡そ脈が至數に因つて名を得たる者は皆遅と數との二脈に統べらる。一息に四至は緩脈、乃ち脾脈の現はれにして平脈とし、一息に七至を疾病の脈と爲す。

緩にして止まるを結と曰ひ、數にして止まるを促と曰ふ、凡そ此の診は皆至數に統べらる、動て中止し自ら還ること能はざれど至數には乖かざる代は則ち痊え難し。

四至の緩脈が時に一止するを結脈と曰ひ、六至の數脈が時に一止するを促脈と曰ふ。結と促との脈が動いて中止すれど即ち能く自ら還る。若し是の中止が自ら還へられず、須臾して復動き或は十至し或は二三十至して一止するが、其至數には乖かぬを代脈と曰ふ。難痊とは五十動に満たずして止る代脈が内經の「痊え難き死脈に」合ふのである。以上の緩、疾、結、促、代の五脈は皆至數より名を得たる者である。故に孰れも遅と數との二脈に統べらる。

形状は珠の如く滑溜して定まらず、往來の滯滯するは澹脈を證すべし。

脈動の形状が珠の如く滑かに溜つて定まらぬを滑脈と曰ひ、脈動の進退が艱ましく往來に滯滯があるを澹脈と曰ふ。此は脈の形状に因つて名を得たものである。凡そ脈が形状より名を得た者は皆滑と澹との二脈に統べらる。

弦は細にして端直なり、且つ勁きを弦と曰ふ、緊は弦に比べて粗に、勁く左右に彈く。

脈狀が弓の弦に類し細く端直にして之を按へて勁いのを弦脈と曰ひ、弦脈に比べては則ち粗であり且つ之を按へて勁く

左右に指を弾くを緊脈と曰ふ。

來るには盛に去るには衰ふは洪脈の名に顯はる、大は則ち寛濶に、小は則ち細減なり。

上り來る時は盛に指に應じ、下り去る時は衰へて力が減するを洪脈と曰ひ、脈形が濶然と粗大なるを大脈と曰ひ、脈形が絲の如く細減するを小脈と曰ふ。即ち細脈である。

豆の如く亂動し、移らずして約々たり、長は則ち迢々たり、短は則ち縮々たり。

脈形が豆の亂動して約々なるが如く動搖して移らぬを動脈と曰ひ、來るにも去るにも迢々として長きを長脈と曰ひ、來去が縮々として短きを短脈と曰ふ。以上の弦、緊、洪、大、小、動、長、短の八脈は皆形狀より名を得た者である。故に皆滑と濇との二脈に統べらる。

浮は陽にして表を主とる、風の六氣に淫して力あるを表の實とし力なきを表の虛とす、浮にして遲なるは表の冷なり、浮にして緩なるは風溫とし浮にして濡なるは傷暑とし浮にして散なるは虛の極なり、浮洪は陽盛、浮大は陽實、浮細は少氣、浮濇は血虛、浮數は風熱、浮緊は風寒、浮弦は風飲、浮滑は風痰なり。

浮は陽脈にして表を主とる。六氣中の風邪は外因病にて表より入るから之に屬する。浮の力あるは表實の風病、浮の力なきは表虛の風病である。遲は寒の脈なるに依り表冷と曰ひ、緩は濕の脈なるに依り風濕と曰ひ、濡は氣虛の脈である。氣が虚すれば則ち暑熱に傷せらるゝに依り浮にして濡なるを傷暑と曰ひ、散は氣の散する脈である。氣が散すれば則ち虛の極なるに依り浮散を虛極と曰ひ、浮洪は陽盛の脈、浮大は陽實の脈と爲す。細は氣が少い脈である。氣が少く充實せぬから氣少と曰ひ、濇は血が少い脈である。血が少く枯滯するから血虛と曰ふ。數は熱脈なるに依り風熱と曰ひ、緊は寒脈なるに依り風寒と曰ひ、弦は飲脈なるに依り風飲と曰ひ、滑は痰脈なるに依り風痰と曰ふ。

沈は陰にして裏を主とる、七情と氣と食とに因る、沈にして大なるは裏の實にして沈にして小なるは裏の虛なり、沈遲は裏の冷、沈緩は裏の濕、沈緊は冷痛なり、沈數は熱の極、沈濇は痺の氣、沈滑は痰食、沈伏は閉鬱、沈弦は飲の疾なり。

沈は陰の脈にして裏を主とる。情と氣と食との内因病は皆裏より生ずるから之に屬する。大なるは有餘の脈なるに依り裏實と曰ひ、小なるは不足の脈なるに依り裏虛と曰ふ。遲は寒脈なれば裏冷と曰ひ、緩は濕脈なれば裏濕と曰ひ、緊も寒脈なれば冷痛と曰ひ、數は熱脈なれば熱極と曰ひ、濇は血滯の脈なれば痺氣と曰ひ、滑は痰食の脈なれば痰食と曰ひ、伏は痛みが甚しく吐瀉もせられぬ脈なれば閉鬱と曰ひ、弦は飲脈なれば飲疾と曰ふ。

濡は陽虛の病にして弱は陰虛の疾なり、微は諸虛を主とる、散は虛の劇しと爲す。

濡は陽分の力がない脈とするから諸の陽虛の病を主とる、弱は陰分の力がない脈とするから諸の陰虛の病を主とる。微は陰陽血氣の不足する脈であるから諸虛を主とる、散は元氣が散る脈であるから虚劇と曰ふ。

革は精血を傷す、半産と帶崩となり、牢は疝と癥瘕と心腹の寒疼とす。

革脈は内空の脈である。男子は亡血して精を傷する病を主とる、婦人は半産や崩帶の疾を主とる。牢脈は内堅の脈である。諸疝や癥瘕や心腹が寒冷の爲に疼痛する病を主とる。

虛は諸虛を主とる實は諸實を主とる、見ると隨て知るべし。

虚脈は三部共に力がない脈である、諸の虚證を主とる、實脈は三部共に力がある脈である、諸の實證を主とる、乳脈は營血が空虚の脈である。失血を主とる。さて此三脈は皆見る所の部位に隨つて其上下内外の病が知られる。

遲は寒にして臟を主とる、陰冷相干す、力あるは寒痛にして力なきは虚寒なり。



遲は陰脈、藏は陰に屬す、故に之を主どる。凡て陰冷の病は皆之に屬する。力あるを寒實よりの痛と作し、力なきを虚寒よりの痛と爲す。

數は熱にして府を主どり數細は陰の傷とす、力あるは實熱にして力なきは虚瘡なり。

數は陽脈、府は陽に屬す、故に之を主どる。凡て陽に屬する病は皆之に屬する、數脈を陽の盛と爲し細脈を陽の不足と爲す。故に陰を傷すると曰ふ。力あるを實熱と爲し力なきを虚熱と爲す。數脈は亦瘡をも主どるから虚瘡と曰ふ。

緩は濕にして脾胃なり、堅大なるは濕の壅がり、促は陽鬱と爲し結は則ち陰凝とす。

緩は脾胃の常脈であり又濕邪をも主どる。故に緩脈は濕邪が壅脹する病を主どる。若し搏指が堅大であれば則ち濕邪が壅脹する病と爲す。促脈は陽が盛んにして鬱する脈と爲し、結脈は陰が盛にして凝る脈と爲す。

代は則ち氣乏とし跌打して悶絶し奪氣なるか痛瘡なるか、女胎なれば三月とす。

代脈は眞氣が缺乏して代脈は求められる。若し打跌に因つて氣が悶するか、暴病にて氣が奪はれたか、瘡痛にて氣が傷せられたか、女子が胎氣に阻せられたかに因らずして、而して故なく之を見れば則ち必ず死脈と爲す。

滑は痰病を司どり關は食風を主どる、寸にて吐逆を候ひ尺なれば便の血膿とす。

滑は陽脈にて陽盛を痰とするから痰病を主どる。右關にて胃を候ふから痰食を主どり、左關にて肝を候ふから風痰を主どる。寸にて上焦を候ふから吐逆を主どり、尺にて下焦を候ふから大便の血膿あるを主どる。

澹は虚にして濕痺とす、尺は精血の傷み、寸は汗津の竭くる、關は膈と液亡とす。

澹脈は血が少く滯澹する脈である、六脈に之を見れば營血が虚して濕痺を受くる病を主どる、若し兩尺に之を見れば則ち傷精と傷血との病を主どり、兩寸に之を見れば則ち發汗が多きに過ぎて、津液が傷する病を主どり、兩關に之を見れば

則ち噎膈反胃、津液が亡して結腸する病を主どる。

弦は關にて飲を主どり木は脾經を侮る、寸の弦なるは頭痛にして尺の弦なるは腹疼なり。

弦は陰脈にして陰盛なるは飲と爲す、弦は木脈なれば肝木が旺して脾土を侮り、脾土が虚して濕を制せられぬ。故に飲病が生ずる。寸の弦なるは陰が陽に乗するのであるから頭痛を主どり、尺の弦なるは陰が陰に乗するのであるから腹疼を主どる。

緊は寒の痛みを主どり、洪は是れ火の傷み、動は痛熱を主どる、崩汗し驚狂す。

緊脈は寒實の脈である。故に寒痛を主どり、洪脈は熱實の脈である。火の傷を主どり、動脈は陰陽が相搏する陽脈とするから諸痛を主どる。而して陰動は汗が出で血崩するを主どる。

長は則ち氣の治り、短は則ち氣の病にして、細は則ち氣の衰へ、大は則ち病の進むなり。

長脈は氣の暢ぶる脈である、故に氣治ると曰ひ、短脈は氣の縮まる脈である、故に氣病と曰ひ、小脈は正氣の衰ふるを示し、大脈は病邪が進むと知る。

脈の病を主どる、宜しきと宜しからざるとあり、陰陽順逆にて吉凶を推すべし。

病には陰陽があり、脈にも亦陰陽がある。順應なれば則ち吉でかり、逆見すれば則ち凶となる。

此條より以下「其死可測」の句に至るまで凡そ二十七條は詳かに某病に某脈を見るは吉なると、某病に某脈を見るは凶なるとを分かつ。

中風の脈は却て浮にして遲なるを喜ぶ、堅大にして急疾なるは其凶なること知るべし。

中風は虚證に屬する、虚脈を見るべし。故に浮遲が順とせられる。若し反つて堅大急疾を見れば逆である。決して生く

傷寒の熱病は脈の浮洪なるを喜ぶ、沈微濇小なるは證に反して必ず凶なり、汗後は脈の靜かに身の涼なるは則ち安し、汗後に脈は躁しく熱の甚しきは必ず難し、陽證に陰を見れば命は必ず殆きなり、陰證に陽を見れば困しむと雖も害なし。

此條は皆傷寒の順逆を言ふ。傷寒の熱病にて裏に傳へ熱に屬するは脈が浮洪なる陽脈を吉と爲す。若し沈微濇小なる陰脈を見たならば是は證と脈とが相反するから凶である。發汗させ邪氣が解したならば即ち當に脈は靜かに身は涼なるべく、若し躁しく熱すれば所謂汗後に其汗の爲に邪氣が衰へぬを陰陽交と名づけて必ず難治と爲す。陽證に沈濇細微弱遲などの陰脈を見るは則ち脈と證とが反するに依り生命は必ず危殆なり。陰證にて浮大數動洪滑などの陽脈を見るは、脈證相反するに依り他證にあつては甚だ之を忌む。唯傷寒では陰邪が陽に還へり將に解せんとする診として、病は頗る危困なれど生命には害がないと爲す。

勞倦は脾を傷す、脈は當に虛弱なるべし、自汗して脈の躁しきは死して却るべからず。勞倦の爲に脾を傷したならば脈は虛弱なるが當然であり又是が順である。若し自汗があり脈が反つて躁疾ならば則ち逆である。如何でか死を免かれん。

瘧脈は自ら弦なり、弦遲には寒が多く弦數には熱多し、代と散とは則ち難し。瘧は寒熱の病である。弦を少陽の脈と爲す。少陽病は寒熱の往來を主とる。凡て寒熱病は多くは少陽の半表半裏の界に屬する。故に瘧脈は自ら弦の象を得る。而して其遲脈には寒が多く數脈には熱が多い。是が理の自然である。若し代脈や散脈を得れば邪氣が猶ほ未だ解せず、而も正氣は已に衰へてゐる、故に生命は全うし難い。

泄瀉下利は沈小滑弱なるべく、實大浮數にて發熱すれば則ち惡し。

瀉痢があれば裏が虛する、脈は宜しく沈小滑弱なるべく是を順と爲す、若し反つて實大浮數の脈があれば則ち身には必ず發熱があつて惡候と爲す。

嘔吐反胃にて浮滑の者は昌え、沈數細濇に結腸する者は亡ぶ。

嘔吐反胃は脾虛にして痰がある。浮を虚とし滑を痰とす。浮滑が順脈であるから昌と曰ふ。若し沈數細濇の脈があれば則ち元氣が少く津液が枯ると爲し、遂には結腸に至り糞は羊屎の如くなり、死して救はれぬ。

霍亂の候に脈の代なるは訝かること勿れ、舌は卷き囊は縮まる、厥伏すれば嗟くべし。

霍亂の診は陽脈を佳と爲す。若し代脈を見るは一時的清濁が混亂するに因ての故に、脈が接續せぬが死候ではない。若し脈が伏して見えず四肢は厥逆し、舌を卷き囊が縮むは陰寒の甚しき者と爲す。則ち嗟くべき變ありと知るべし。

嗽の脈は多くは浮なり、浮にして濡なるは治し易く、沈伏して緊なれば死期は將に至らんとす。

嗽は乃ち肺の疾患、脈は浮なるを宜しと爲す。兼ねて濡を見る者は病は將に退かんとするのである。若し沈伏と緊とがあれば則ち相反して病が深い、死せずして何をか待たんやだ。

喘息して肩を擡ぐ、浮滑は是れ順なり、沈濇にて肢の寒ゆるは切に逆證と爲す。

喘の陽證に實が多きは風と痰とに因る。脈は浮滑を順と爲す。陰喘に虚が多いのは寒と虚とに因る。故に脈が沈濇であり四肢が寒ゆる者は均しく不治の證とす。

火熱の證は洪數を宜しとす、微弱にして神なきは根本の脫離とす。

熱證に洪數を得るは乃ち正應である。若し微弱を見るは證脈相反して根本が脫離した者なれば藥餌を施すも詮がない。

骨蒸の發熱は脈が數にして虛なり、熱して濇小なるは必ず其軀を殞す。

骨蒸病は腎水が不足するより壯火が僭上してゐる、故に虛數の二脈は是れ正象である。若し濇小の脈があれば所謂發熱脈、靜と名づけて救はれぬ。

勞極の諸虛は浮軟微弱とす、土が敗すれば双弦となり、火災は細數とす。

虛證には宜しく虚脈を見るべく、若し兩關脈が弦なるを双弦と曰ひ弦は乃ち肝脈にして、右關に之を見れば是れ肝木が脾土に乗ずと爲す、故に土敗勞證の脈と曰ふ。若し細數を見れば乃ち陰虛火盛にして上つて肺金を刑する者と爲す、故に即治せられぬ。

失血の諸證は脈は必ず芤を見はす、緩小なるは喜ぶべく、數大なるは憂ふるに堪へたり。

芤脈には中空の象がある。失血する者は宜しく然るべく、緩小の脈も亦虚脈とす。故に順にして喜ぶべく、若し數脈にして且つ大脈なるは之を邪氣が勝つと曰ふ。憂ふべし憂ふべし。

畜血が中にある牢大は却て宜し、沈濇にして微なるに速に癒ゆる者は稀なり。

畜血は有形の實證である。牢大の脈を見れば脈と證とが相順應して宜しい。若し沈濇にして微なるは是れ虚を挾む者と爲す。既に自ら其血を行らす能はず、又峻猛の劑も施し難い、いかで速に癒ゆることを望まれるであらうか。

三消の脈は數大の者は生く、細微短濇なるが手に應ずれば驚くに堪へたり。

渴いて飲みものが多きを上消と爲し、水穀を消化して善く饑うるを中消と爲し、渴いて小便が數なるを下消と爲す。三消は皆燥熱が太過なるに因る。只數大の二脈を見れば吉と爲し、細微短濇の諸脈であれば死して救はれぬ。

小便の淋閉する鼻色は必ず黄なり、實大なるは療すべく濇小なるは亡と知れ。

鼻頭の色が黄なるは必ず小便難を患ふる。六脈が實大なる者は唯攻病の劑を用ふれば必ず愈ゆ。若し濇小なるに逢へば、精氣の不化なるを證す。死亡が將に至らんとしてゐる。

癩は乃ち重陰にして狂は乃ち重陽なり、浮洪なるを吉の象とし沈急なるは凶殃とす。

癩狂の二證は皆浮洪の脈を吉となすは其病が尙淺きに取る。若し脈が沈にして急なるは病が已に骨に入つてゐる、扁鵲倉公が再生しても之を能く救ふことは出来ない。

癩は宜しく浮緩なるべく、沈小急實なる、但し弦にして胃なければ必ず死するを失はぬ。

癩病は本來風痰の病である。脈が浮緩なるは自ら應に然るべく、若し沈小急實なれば是は病が深く、或は但弦脈のみがあつて胃脈がなければ則ち肝の眞藏脈の見はれである。何ぞ其更生が望まれるであらう。

心腹の痛は其類に九あり、細遲なるは速に癒え、浮大なるは延久す。

九種もある心腹痛は皆脈は遲細に宜しく隨つて施療し易い。浮にして大なる脈があれば之を中虚と爲し、邪氣が方に盛なれば捷かに功は收められぬ。

疝は肝病に屬す、脈は必ず弦急なり、牢急の者は生き、弱急の者は死す。

肝は筋を主どる、疝は則ち筋が急となる、故に肝病に屬する。肝脈が弦急なるは是れ其常である。疝は陰寒の咎に係る。牢脈は裏寒を主どる脈である。是も亦其常である。若し且つ弱く且つ急なるは必ず生命に憂がある。

黄疸は濕熱なり、洪數なるは便ち宜し、浮大なるを妨げず、微濇なるは醫し難し。

濕蒸に因つて熱が瘵し黄疸病は生ずる。脈が洪數浮大なるは其の宜しき所である。一度微濇が見えたならば虚衰が已に甚しいと爲す。必ず食は少く瀉が多くなつて鍼灸藥餌では療せられぬ。

腫脹の脈は浮大洪實なり、細にして沈微なるは岐黃も術なし。

水腫脹滿は有餘の證に屬す。故に宜しく有餘の脈を見るべく、即ち浮大洪實が即ち其脈である。沈細にして微なるは之を證、實脈虚と謂うて岐伯でも黃帝でも施すべき術はない。

五藏を積と爲し六府を聚と爲す、實強は生く可く沈細は癒え難し。

積も聚も俱に實證である。實脈の強盛なるは是れ當然とす。沈細を虚と爲す。眞氣が收絶すれば如何ともなし難い。

中惡して腹脹するに緊細なれば乃ち生く、浮大なるは何と爲ん、邪氣は已に深し。

中惡とは不正の氣に打たれた病である。脈が緊細なれば則ち吉とし、浮大なるは則ち凶なり。

鬼祟の脈は左右が齊しからず、乍ち大に乍ち小に乍ち數に乍ち遲に。

鬼祟に犯されると左右の脈象は一様でなくなる。忽ち大かと思へば忽ち小となり、忽ち數なるに忽ち遲となり、一定の脈形が得難い。

癰疽の未だ潰えざる時は洪大の脈なれば宜しい、其の已に潰ゆるに及んでは洪大は最も忌む。

癰腫が未だ潰えぬ時は實に屬するから洪大なるが正脈である。既に潰えて後は則ち虚する。若し尙洪大を持続するは則ち邪脈として最も忌む所と爲す。

肺癰の已に成るときは寸は數にして實す、肺痿の證は數にして力なし、癰痿は色白く脈は宜しく短澹なるべし、數と大と相逢ふは氣損失血とす、腸癰は實熱なり、滑數は相宜し、沈細無根なるは其死は期すべし。

肺癰に寸口の脈が數實なれば化膿と知られる。肺葉の焦痿は相火に傷せらるると爲す。是を以て脈が數なれど力が無い。肺痿も肺癰も白色なるは肺の本色を見はしてゐるのである。又短澹の脈を得れば肺の本脈であるから均しく相宜しい。若

し數大の脈に逢へば是は火が來て金を尅する賊邪であると診す。故に氣損若しくは失血と爲す。又腸癰は實證であるから滑數は相宜しい。沈細は虚脈であるから證、實脈虚にして死期が將に至る者とす。

婦人に子あれば陰の搏は陽に別つ、少陰の動くこと甚し、其胎は已に結ぶ、滑疾にして散すれば胎は必ず三月なり、之を按へて散せざれば五月と別つべし、左は男にして右は女なり、孕乳を是れ主とす、女腹は箕の如く男腹は釜の如し。

此條は女科に屬し胎前の脈を明にせらる。陰搏陽別とは寸を陽とし尺を陰とす。尺陰の脈は指を搏して動き、寸陽の脈は則ち指を搏せぬ、之が適かに別とせらる。此を妊身の診と爲す。或は手少陰の心脈が獨り甚しう動いてゐる。蓋し心は血を主どり血は胎を主どる、故に胎を結べば動くことが甚しい。動くとは往來流利し動いて滑かなるを曰ふ。而して脈々と動揺して病的の動きではない。疾は即ち數脈、乃ち滑にして且つ數となり、之を按へて散するは三ヶ月の胎であり、之を按へて散せぬは五ヶ月の胎である。左を陽とするから左の疾きを男胎と爲し、右を陰とするから右の疾きを女胎と爲す。五六ヶ月後に孕婦の乳房に結核があつて之を吮へば乳が出る者も則ち妊身を主どる。女胎の腹の形狀は箕の如く圓く、男胎の腹の形狀は釜の如く上は小さく下は大きくある。父母の年齢を相加し胎兒の齡一を加へ、若し翌年の分娩なれば二を加ふ。其父母と胎兒との總和を三除して餘數が奇數なれば男、偶數若しくは割切れた場合は女と爲す。是は孫子が占産兒の算法である。筆者は九人の子寶の持主である、孫子の占算は違はぬ、序に附記する。

産せんと欲すれば經を離る、新産は小緩なり、實弦牢大は其れ凶にして死せざらん。

此條は産中の脈を明にす。産せんと欲すれば脈が經を離るゝとは、經常の脈と離れて見はれるを謂ふ。蓋し胎が中に動けば脈が外に亂れるは勢の必然とする所である。産後は氣血が俱に兩虚となるから緩小なる虚脈を見るを吉と爲す。若し

之が實大弦半などの實脈が見えたならば、其凶たるを免かれぬ。

經脈と病脈と業已に昭詳なり、將に絶せんとする形は更に當に度量すべし。

經常の脈も主病の脈も皆前條迄に明かに陳述せり。而して死絶の脈も察せねばならぬ。此より後條に分列する。

心絶の脈は帶鉤を擦るが如し、豆を轉ずる如く躁疾なり、一日を憂とすべし。

内經に「脈の來ること前曲後居にて帶鉤を擦るが如きを心絶と曰ふ」と曰へり。前曲とは軽く取るに則ち堅強にして柔かならぬを曰ふ。後居とは重く取るに則ち牢實にして動かぬを曰ふ。革帶の鉤を持するが如く全く沖和の氣を失うてゐる。但し鈎脈となると胃氣がないから心死と曰ふ。鈎は即ち洪脈のことである。轉豆とは即ち内經に所謂蕙子すだまを循づるが如く累々然たる狀を曰ふ。其短實堅強なるは眞藏の脈である。又内經に「心絶は一日にして死す」と曰ふ。

肝絶の脈は双を循づるが如く責々たり、新に張れる弓弦のごときは死すること八日にあり。

内經に「眞肝の脈が至る時は中外に急にして双を循づるが如し」と曰ふ。又「脈の來ること急溢にして動きこと新張の弓弦の如きは肝死と曰ふ」と云へり。又「肝絶は八日にして死す」とも云へり。

脾絶は雀啄す、又屋漏やのりに同じ、杯を覆へして水の流るゝがごとし、四日にして救ふことなし。

舊註に曰ふ、雀啄とは連りに來て四五たび啄ばむ形容を謂ひ、屋漏とは少刻にして漸く一點落つるを謂ひ、杯を覆へして水の流れる如きは皆脾絶である。内經に「脾絶は四日にして死す」と云へり。

肺絶とは維れ何ぞ、風の毛を吹くが如く、羽毛の膚に中るが如し、三日にして號ぶ。

内經に「風の毛を吹くが如きを肺死と曰ふ」と云へり。又「眞の肺脈が至れば毛羽にて人の膚に中つるが如し」と曰へり。皆其が唯浮んで胃の氣がなきを形狀した者である。又「肺絶は三日で死す」と云へり。

腎絶は伊れ何ぞ、發すること索なほを奪ふが如く、辟々として石を彈する如し、四日にして作す。

内經に「脈の來ること索を奪ふが如く辟々たるは石を彈くが如きを腎死と曰ふ」と云へり。又「腎絶は四日にして死す」と云へり。舊訣に曰ふ、石を彈くは硬く來り直に散ずる、指搭して散亂することは索を解くが如しとは正に之を謂ふ。石は即ち沈脈を指す。

命脈の將に絶えんとするは魚の翔けるが如く鰕の遊ぶが如し、至ることは湧泉の如きは挽留すべきなし。

舊訣には魚翔とは有るに似たり又無きに似たるを謂ひ、鰕遊とな靜中に忽ち一躍するが如きを謂ふ。内經に曰ふ「渾々として革し至ることは湧き出づる泉の如く、綿々として其去ることは弦の絶ゆるが如きは皆死脈なり」と。

脈には反關あり、動くこと臂後にあり、別に列缺に由る、證候に干せず。

反關脈とは脈が寸口を行らずして列缺穴の絡より出で、臂後の手陽明大腸經に入り、關上を順行せぬに因り名づけて反關とは曰ふ。一手反關の者があり、兩手反關の者がある。是は有生の初に得た者にして病脈ではない。今病人の爲に側面的其手診の方を立てられたと見ればよい。

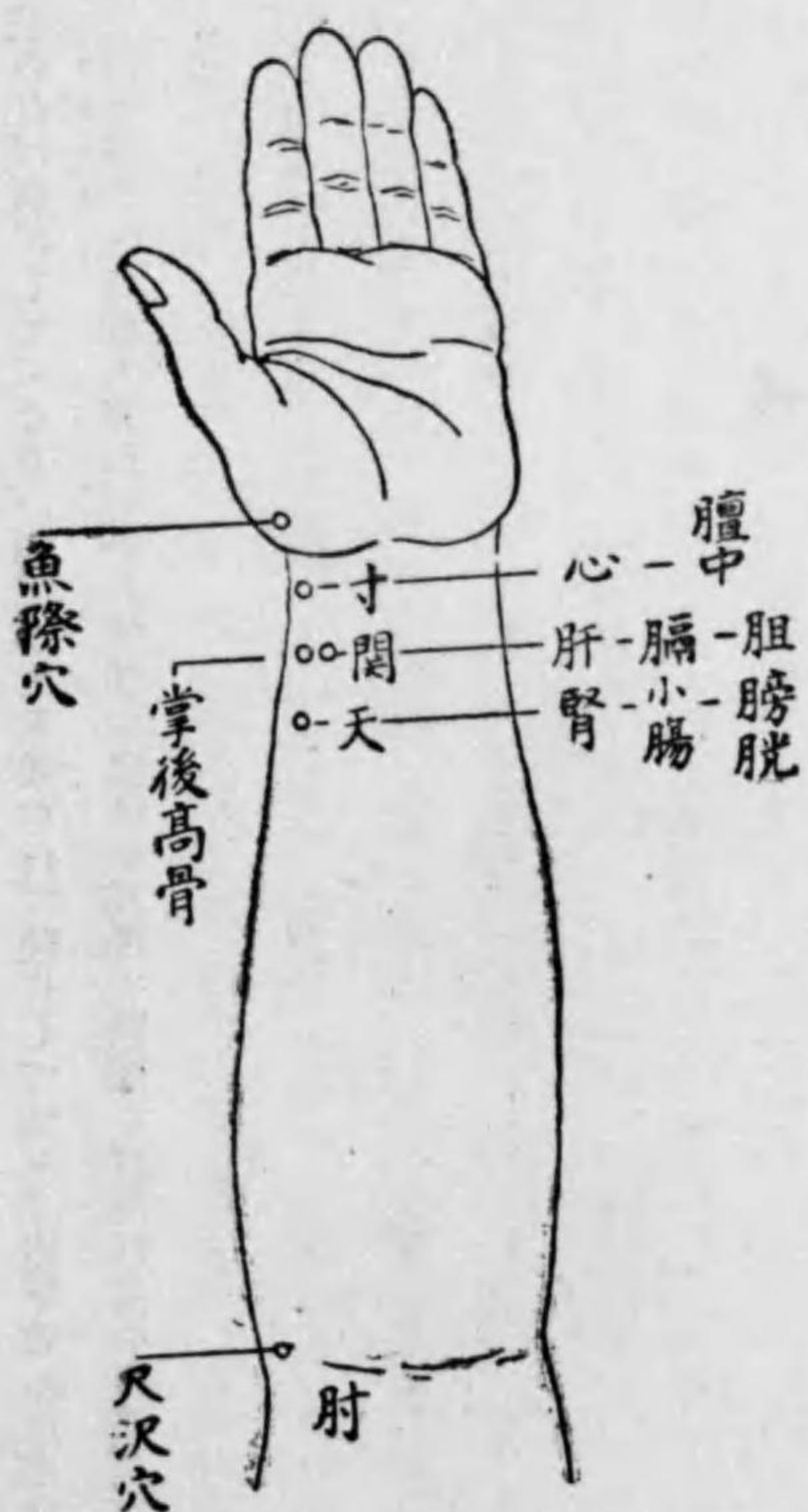
岐黃の脈法は病の死生を候ひ、太素の脈法は陰陽の清を貴ぶ、清きは潤へる玉の如く、至數は分明なり、濁脈は石の如く、糝糊として清からず、小大は貧富を知り、濇滑は窮通を考へ長短は壽夭を明にす、詳かに推して錯綜す。

脈法は黃帝岐伯より倡へられて病の死生を候ふ所以と爲す。楊上善氏や其他風鑑（相學）を爲す者の輩は名を太素脈法に托して其説を神聖にしてゐる。而も毎々驗顯せぬ者が多々ある。併し其中で理に近く探るに足る者がないでもない。六陽六陰の脈論の如きは以て觀るべきである。乃ち清は貴を主どり濁は賤を主どる。清脈の狀は玉の潤淨なるに似て至數も

手右



手左



頗る分明である。濁脈の状は石の粗澁なるが如く至數も些か糝糊としてゐる。小脈は貧を主どり大脈は富を主どり、澁脈は窮を主どり滑脈は通を主どり、長脈は壽を主どり短脈は夭を主どる。質は清く脈が濁るを貴中の賤とし、質は濁り脈が清きを賤中の貴とし清脈の大を兼ぬるは貴にして富み、滑を兼ぬるは貴にして通じ、長を兼ぬれば貴にして壽と爲す。濁脈が小を兼ぬれば賤にして貧しく、澁を兼ぬれば賤にして窮し、短を兼ぬれば賤にして夭と爲す。清脈が小を兼ぬれば貴にして貧しく、澁を兼ぬれば貴にして窮

し、短を兼ぬれば貴にして夭なり。濁脈が大を兼ぬれば賤にして富み、滑を兼ぬれば賤にして通じ、長を兼ぬれば賤にして壽なり。詳推錯綜とは即ち詳かに此の質清や脈清や質濁や脈濁や質清脈濁や質濁脈清を、錯綜させて等説する理を推し擴むべきを謂ふ。

以上は金鑑の四診要訣全部を譯出したつたのである、而して診脈の一事は醫師の生命とも云ふべく、洵に其理は深奥にして頗る複雑である、一分時に何十何搏などいふ淺薄なものではない、脈理に知識が出来たらば人の生命を主どる醫師が看護婦に任せて安心がせられる譯には參らぬ、併し何分にも前述の如く深淵にして且つ複雑であるから、學者は其要を得ねば更に亡羊の嘆に堪へぬ、左に著者が備忘録中より抽出し「附説」として其參考に供する。

第八節 附 說

其一

脈則に曰ふ、「浮沈は脈の大綱である」と。浮にて陽を候ひ沈にて陰を候ひ、陰陽にて表裏を定め淺深を決する。而して此浮沈に遲數を配して寒熱を候ひ、緩緊を配して緩急を察し、滑澁を配して虛實を明かにし、微細を配して榮枯を知る。此十個の脈候に依て證に照らし色を望み、其前後を視て之を推し之を測れば則ち萬病は多端なれど眞に遯るゝ所はない。是が長沙氏が脈候の大法である。(長沙氏とは張仲景を云ふ)

一脈には各々常と變とがある。例へば病が表にあつて熱が外盛なれば必ず浮脈を見る。之が浮脈の常では

ない乎。更に裏熱が外薫して白虎の證があり、及び陽明太陽の傷寒にして脈の浮緩なるがある。之に邪氣が上焦に結して結胸し、及び瓜蒂の證があり、之に血分が灼熱して陽明抵當の證があり、之に虚寒にて陽越し四逆の證がある。是等は凡て皆脈を浮ならしむ。之が浮脈の變ではない乎。

次に沈を裏と爲し寒と爲す。併し亦肌表の寒ともなる。癰や麻附辛湯の證が則ち是れ。又裏熱結實ともなる。陽明の脈沈が裏にありと爲すは則ち是れ。次に數を熱盛と爲す。併し胃冷客熱の病人は脈數となすが則ち是れ。虚寒陽跖となすは少陰病の脈細沈數なるは則ち是れ。次に遲を寒と爲し虚と爲す。併し亦熱結ともなる。結胸及び大承氣の證が則ち是れ。次に弦なるを寒と爲す。併し亦熱盛とも爲すの類は皆其義に依る。

緊は寒熱表裏を通じて病實と爲し、滑は水燥食尿を通じて熱盛と爲し、瀉は通じて血滯と爲し、洪は通じて邪擾と爲すの類は皆其一定せる者である。大には實大があり虚大があり、細にも微細があり緊細がある類は最も須らく分着にせねばならぬ。

脈は狀を以て言ひ勢を以て言ふ。而して浮沈は陰陽の經脈とし遲數弱弦細微は陰陽の緯脈とす。此の經緯が陰陽に亘つて疾と舒との表裏に反し、洪大が内外に亘るは是が脈の狀である。緩は脈の平穩なる者、緊は脈の奔騰なる者、滑は脈の流利なる者、瀉は脈の蹇澁なる者、是等は脈の勢である。緩緊の勢に依て邪氣の劇甚を察すべく、滑瀉の勢に依て精氣の虚實を審にすべし。此四勢は必ず浮沈の經脈に胚胎し、又必ず遲數弱弦細微の緯脈にも含蓄せらる。是に病位を當今に辨せんには乃ち浮沈遲數弱弦細微の脈狀に因り、又轉變を未然に察せんには乃ち緩緊滑瀉の脈勢に因らねばならぬ。是等は皆脈の大經大方である。彼此を參伍して

精緻に至れば則ち疾病の情狀は豈に逃るゝを得んや。

脈の浮は表證と爲す。表に發汗せしむべきが此れ其常法である。併し亦宜しく瀉下すべき者がある。即ち仲景師が曰ふ「若し脈浮大にして心下が鞭し熱あつて藏に屬する者は之を攻むべし、發汗せしむべからず」とは是である。脈沈は裏に屬する。治は宜しく瀉下に従ふべし。而も亦宜しく發汗すべき者がある。即ち少陰病、始て之を得て反て脈が沈なる者は麻附辛湯を以て之を微汗せしむるが如き者は是である。脈の促なるは陽盛と爲す。當に葛根黃連を用ひて之を清むべく、若し促にして厥冷する者は虚脱と爲す。炷灸にて之を温めなくては不可い。茲に又促を陽盛の脈とのみせられぬ。脈の遲を寒と爲す。當に薑附を用ひて之を温むべく、若し陽明病にて脈が遅であり惡寒せず全身に澀々として汗が出づれば則ち大承氣を用ふる。茲に於て遲も亦陰寒の脈とのみせられぬ。此四者は證を主として脈に従はぬ治法である。若し脈を主として證を含む治法は乃ち表證は宜しく發汗すべきが常法である。仲景師が曰ふ「病が發熱し頭痛して脈は反て沈であり、身體が疼痛する者は當に先づ裏を救ふべく四逆湯を用ふ」と。是が脈が沈なるを主として治を爲す者である。裏實には瀉下を用ふるが常法である。若し日晡に發熱する者は陽明に屬す。而して若し脈が浮虚の者ある。裏實には瀉下を用ふるが常法である。若し日晡に發熱する者は陽明に屬す。而して若し脈が浮虚の者は宜しく法として發汗せしむべく桂枝湯を用ふ。茲は脈浮なるを主として治を爲す者である。結胸の證が具はれば自ら當に大小陷胸にて之を治すべく、若し脈が浮大なれば陷してはならぬ。之を陷すれば則ち必ず死す。是は脈と證とに斟酌して之を解決せねばならぬ。身體の疼痛する者は當に桂枝湯にて之を發汗すべく、若し尺中が遅なるには發汗させてはならぬ。榮血が不足するを恐るゝに因る。是は脈を主として其榮血を調

ふべし。此四者は脈を主として證に從はぬ治法である。又脈を含んで證を主とする者は傷寒の脈が浮緩にて大青龍湯を用ひ、陽明病の脈が遅にて大承氣湯を用ふるが如きが是である。又證を含んで脈を主とする者は頭痛し發熱し身體が疼痛して四逆湯を用ひ、陽明病にて脈の浮虚には桂枝湯を用ふるが如き類が是である。

脈浮なれば則ち發汗さすべく脈沈なれば則ち瀉下さすべきは固より其宜しき所とす。而して其脈が浮にして瀉下さすべき者がある。邪熱が府に入て大便難となる時を謂ふ。若し大便難がなければ豈に敢て瀉下させて良からうか。其脈が沈なれども發汗さすべき者がある。少陰病にて身に熱がある時を謂ふ。若し身に發熱がなければ豈に敢て發汗させて良からうか。此は證に取て脈に取らぬ法である。

脱血の人は形が死せるが如く危きことは實に頃刻の間に迫る。而して六脈に根があれば則ち死せぬ。此は宜しく脈に從ふべく證には從はぬ。痰厥の人は六脈或は促、或は絶、而して痰が降れば則ち癒ゆ、此は宜しく證に從ふべく脈には從はぬ。陰虚にて咳嗽し飲食も起居も常の如くなるに、六脈が細數なることが久しく繼續すれば則ち死す。此は宜しく脈に從ふべく證には從ふべきでない。噎膈反胃は脈が常人の如く、久しければ則ち胃絶にて脈が俄に變ずれば百に一生はない。此れ又宜しく證に從ふべく宜しく脈に從ふべき者でない。



其二 陰脈の傳

古今の名醫は陰脈にて萬病を療し生死を決してゐる。然るに醫師の之を識る者が鮮い。陰脈が正しければ則ち萬病は治せざるはなく、陰脈が不正なれば則ち衆病は難治と爲す。陰脈が絶する者は必死の症と知るべし。假令六脈は絶えても陰脈が存してゐれば則ち再治の望みがある。左右(寸關尺)が細數にて陰脈が絶えてゐれば則ち一日二日三日にして死去す。さて陰脈の診法は左右寸關尺の三部は之を診するは常法の如くす。但し寸脈のみは指頭を軽くし、關尺の二部は手を重くす。或は此の關尺二部の脈動が絶えてゐても而も只寸脈のみが通ずるを總て陰脈が正しいとは言ふ。或は之を診して關尺二部は通じてゐても、寸脈が至らねば是を陰脈が絶えたと謂ふ。六部の脈は絶えても陰脈が正しければ則ち之を治すべし。是れ極秘の口傳である、上醫と云ひ庸醫と云ふも之に由て分界せらる、|| 按するに醫師の靜思凝念を要する ||



其三 脈 占

此法は脈搏の變動に依て豫め受病を知り又災害をも識る。道三翁が濱名湖の陥落を豫知して自他共に厄を免かれたは是である。屑や某が傳通院の大火を豫知して、火災の厄を免かれたも是である。醫師は勿論、常人も宜しく心得てゐて然るべし。

其法先づ正座して氣を靜め心を寧くして呼吸を調へ、左手にて人迎(頸動脈)を按へ、右手にて左手の寸口を按へる。人迎脈と左の寸口脈との搏動が整然として一絲亂れねば其日は無事無難と斷すべく、若し之が正調せねば則ち受病か受災か、但し何か社會に變異ある前兆と豫測すべし。

右四診の斷定は中々難しい。雲煙過眼的や一瀉千里の素通りでは理解もせられず合點も參らぬ。凡て皇漢醫道の原理は科學的理窟詰めの淺薄なものでもなく、數學的の二一天作の五となるやうな卑近なものでもない。故に能く心を洗ひ能く思を潜めて懸命に緊揮して靈魂を打込まねば原理の捕捉は容易でなく其妙趣も出ない。是れ形而下に屬する科學や數學とは理論の出發點を異にしてゐるからである。形而上的皇漢醫理には拘泥がなく固着がない。故に四診して重病に見えて存外に輕きもあり、輕症に斷じて非常に重きがある。能く熟して自得せられたならば檢温器や聽診器は迂遠な不安なものとして不必要化せられる。茲に迄徹底せられんことを熱望する。

第六章 治病の指針

第一節 治病に法あり

既に疾病があれば之が治愈の方法を講せねばならぬ。鬮碁にも定石があり布石がある。此の定石布石の方を攻究せぬ碁打は小兒が賽の河原の石遊びに餘念がないと同様、世に之を碁碁と煽てる。治療するに漫然たり漠然たりでは臨床して躊躇し手の下し様がなく、疾病は治愈せられぬ。故に必ず之が方法を立て其方法に據り循々として處置して行かねばならぬ。今其方法を分けて形治、氣治、神治の三大治法と爲す。此の三大治法は悉く理即道に準由する。道を離れては治法が成立せぬ。而して道に經があり緯があり又權がある。病の三因は明確に診斷せられても其狀勢現證は劃一には參らぬ。因て茲に加減の必要が生ずる。醫師の權威は此の加減する手腕の如何に存して「醫は意なり」と云ふ所以も亦明瞭となる。若し醫師が加減の權道に通せぬならば則ち巷間に一定した調劑の賣藥でも事が足る譯となり其店主と擇ぶ所がなく、又家傳の名灸とか行者の夢想灸とか云ふ者に異なる所はない。元來藥劑師は藥を知り藥を製し劑を調ふるが其任務である。殊に忠實に藥物の眞偽を判定して供給するを其本領と爲さねばならぬ。嚴密なる意味から云へば藥劑師の投藥は越權の沙汰であり、且つ絶對に不可能でなければならぬ。何となれば藥劑師は病を知らぬからである。世間

で白井理學博士の逝去を如何に眺める乎。

## 第二節 治療の大綱

治療の大法は補と瀉と補瀉互用との三者に過ぎない。元氣が虚耗し體氣が衰弱するは之を滋補する。補には緩、峻、温の別がある。病魔毒邪を攻撃し驅逐するを瀉と曰ふ。瀉には汗吐下の三方を立つ。邪氣が淺く表（腠理）に居るならば之を發汗せしめ、高く膈上に居るならば之を吐涌せしめ、深く裏（腸胃）に陥るならば之を瀉下せしむ。故に内經に「實する者は之を瀉し虚するものは之を補す」と曰ふ。實するとは邪氣の實盛なるを謂ひ、虚するとは元氣の虚耗するを謂ふ。

補法は多く内因病に用ひられ瀉法は概して外因病に使はる。内因病は歲月を経過して慢性的に浸潤してゐるに依り、自ら元氣が虚耗し體氣が衰弱する。故に之を滋補し之を回復し抵抗力を養成し、元氣も體氣も旺盛となれば則ち邪氣は自ら驅逐せらる。例へば胃弱家に只漫然と消化の宜しい物を選んで食はせてゐたのみでは、何年経ても胃病は療せられぬ。之を消極的療法と謂ふ。胃中の水穀は中焦の醱酵と脾臓の運化とに腐熟する。故に中焦と脾臓との機能を旺盛ならしむる方法を執れば、如何なる食品を攝ても能く消化せられて胃弱は除かれる。之が積極的療法である。

外因病は卒然と邪氣に襲はれて直に苦痛を感じる。而して元氣も體氣も尙未だ虚耗衰弱してゐない。故に迅速に瀉法が適用せられる。又迅速に瀉法を適用して邪氣を驅逐せねばならぬ。唯時と法とを誤らぬが名

醫である。若し因循として苟息に時日を経過せば則ち不測の悪化を醸成して天死を招來する乎、或は慢性に馴致して終世の痼疾に呻吟せねばならぬ乎、其一に居る。而して病魔を瀉出したして之に伴ふ元氣の損傷は、徐に食養的體氣の補充に待てば善い。

角を矯めて牛を殺してはならぬ。鼠に投ずるに器を損せんことを恐る。君側の奸を除くに傷みが君主に及ぼさんことを忌む。邪氣を驅除せんに元氣が堪へられぬを如何せん。更に外感にして内傷的に悪化するがあり、内傷にして外感を兼有するもある。茲に補瀉互用の法を立つる所以が起る。乃ち三補して一瀉し、五補して一瀉し、十補せねば一瀉せられぬもある。病邪は去つたが隨て元氣も盡きて殞る者、世間に其例乏しからず、豈に傷ましからずや。チブスに昂熱を恐れて食事を禁じ補薬を與へぬ。解熱して衰弱に堪へず心臓に痲痺を起して幽界に入つたり、結核に劇劑を與へて腸胃が損傷に堪へず、微菌が未だ撲滅せぬに身は先づ鬼籍に入るが如きは、是れ補瀉互用の原理が明かならぬに禍せらる。豈に悲しからずや。

## 第三節 病に傳移あり

外因病は表より裏に傳へる。即ち皮毛より血脈に傳へ血脈より肌肉に傳へ肌肉より筋に傳へ筋より骨に終る。風寒の感冒を誤治した結果が肺勞其外藏病に極することゝなる。内因病は裏より表に傳へる。即ち藏より府に、府より筋肉に、筋肉より血脈に、血脈より皮膚に了る。例へば肺藏の損傷に始て皮膚の蒼白、毛髮の焦枯に終る。

又病には二方面の傳移がある。難經に「七傳する者は死し、間藏の者は生く」と曰へり。七傳とは己が勝つ所に傳ふるを謂ふ。即ち肝木が病んで脾土に傳へ、脾土が腎水に傳へ、腎水が心火に傳へ、心火が肺金に傳へ、肺金が肝木に傳へ（以上六傳）、而して肝木が再び脾土に傳ふれば七傳となつて死するを謂ふ。間藏とは肝が病んで脾に傳ふべきを、脾氣が旺して邪を受けねば心に傳ふ、即ち肝藏と脾藏とを間隔して心藏が位するより間藏とは謂ふ。即ち己が勝つ所に傳へずして其子に傳ふるのである。即ち肝母が心子に、心母が脾子に、脾母が肺子に、肺母が腎子に、腎母が肝子に傳へて循環するから回春の道がありと爲す。

#### 第四節 治法の種別

治法には内科的即ち化學的藥物療法と、外科的即ち理學的鍼灸、熨蒸、按摩導引など療法と（以上は總て形治的に屬す）、精神的療法と（氣治的と神治的とに屬す。上古は之を移精變氣の治と稱してゐる）の三者が皇漢醫道上分類の大概である。（勿論婦人、經産、小兒、眼、瘍、整骨など各部門もある）。而して調息の一科は素より醫道上氣治的療法の範圍に用ふるが、進んで罹病せぬ唯一的保健良法ともなる。内經に所謂「聖人に已病を治せずして未病を治す」とは是意味に解せらる。次に蘇東坡氏が「藥は病を醫して身を養はず、食は身を養うて病を醫せず」と云ふ。故に食事は治病的範圍には入らぬ。唯保命的滋養に屬すべき者と認めて善い。里芋や蓮根や生薑や眞鯉や鯽魚や鰻鱈の類は副食物の一部であり、又半面には外用的若しくは内服的藥物化して扱はれる場合もありと知るべし。其他指壓とか紅酸とか青酸とか電氣とか磁氣とか、凡百簇出する

苟息的療法は醫道上より之を見て何等の價値を認められぬ者と爲す。併し現代の醫と曰ふ名稱は或者の偏見により頗る狹義に限定せられた觀がある。若し之を廣義に解せば醫は疾病を治愈するが其第一義を爲す。故に手段即ち治療方法は其適法と認識せられたならば、孰れを取捨すべきかは、彼の加減と同様に醫師の權威に存して、而も其手腕に待たねばならぬ。故に廣く研鑽して奏功が顯著な者あらば、縱令常々に輕視せられてゐる民間療法であらうとも其選擇に漏すべきでない。是が患者に對しての醫師が本領たるのみならず、亦國家的治道の裨益にも忠實なる所爲と謂ふべきでない乎。徒に形式に拘はり空理に走り、議論倒れに了て何等治績に益なきが如きは醫家の本分忘却であるまい乎如何。

#### 第五節 治法の梗概

凡そ藥物の寒、熱、溫、涼は氣である。酸、苦、甘、辛、鹹は味である。氣は陽に屬し、味は陰に屬する。今寒藥を用ひて熱病を治するに溫服せしむ、溫服すれば則ち寒性の藥は始めて熱分に行つて之が功を奏せらる。又熱藥を用ひて寒病を治するに涼服せしむ、涼服すれば則ち熱性の藥が始めて寒分を行つて之が治を遂げられる。之が寒藥を以て熱病を治し、熱藥を以て寒病を治する逆用を即ち正治の法と爲す。之を寒因熱用、熱因寒用の法とも云ふ。此の正治に對して寒藥を用ひて寒病を治し、熱藥を用ひて熱病を治する。從用的寒因寒用、熱因熱用の法を反治の法とも云ふ。即ち寒病に對する熱藥、熱病に對する寒藥の逆用が正治であり、熱病に對する熱藥、寒病に對する寒藥の從用が反治となる。反治を誤治と混用してはならぬ。

病には本があり標がある。腎病が膀胱に及ぼし膽病が肝に及ぼす。此に標本の關係を熟知すべく、又前述せる七傳の如きも間藏の如きも本病が本であり傳へられた藏病を標と稱し、先づ本を治して標に及ぶがあり、標を先に治して本を後にするがある。然ども其劇甚なるより先づ手を下すを要とす。故に隔二隔三の治法も生ずる。

諸病の中にて火症に屬するが頗る多い。火には虛火、實火、燥火、濕火、鬱火、相火の別がある。虛火は宜しく補すべく、實火は宜しく瀉すべく、燥火は宜しく滋潤すべく、鬱火は宜しく升發すべく、濕火は濕鬱に因て熱を爲し多くは腑腫を病む。内經に所謂「諸腹の脹大は皆熱に屬し、諸病の腑腫は皆火に屬す」とは此事である。宜しく濕を利し熱を清め兼ねて脾を補ふべし。相火は肝腎に寄る乃ち龍雷の火である。苦寒劑の能く勝つ所ではない。宜しく陰を滋し血を養ひて壯水を主とし陽光を利せねばならぬ。

又火症にして本經が自ら病む者もある。即ち忿怒して肝火を生じ憂悲して肺火を生じ焦思して心火を生じ疲勞して脾火を生じ妄想房勞して腎火を生ずるが如き者を謂ふ。又子母相尅する者がある。即ち心火が肺金を尅し肺火が肝木を尅し肝火が脾土を尅し脾火が腎水を尅し腎水が心火を尅するが如き者を謂ふ。又藏府の相移す者がある。即ち肺火にて咳嗽が久しければ必ず熱を大腸に移して則ち泄瀉し、脾火にて口が渴くことが久しければ必ず熱を胃に移して則ち脹滿し、心火にて煩焦が久しければ必ず熱を小腸に移して則ち淋瀝し、肝火にて脇痛が久しければ必ず熱を膽に移して即ち口が苦く、腎火にて遺精が久しければ必ず熱を膀胱に移して則ち淋瀝水腫するが如きを謂ふ。又別經が相移す者があり、數經が合病する者がある。即ち標本を論せず當に其重く且つ急なる方よりして之を治せねばならぬ。

### 第六節 藥物の用所

さて内科の用藥を調べて見るに補養劑は内因病に用ひ、發表劑は外因病の攻撃劑であつて邪氣の表の腠理にあるを發汗せしむ。涌吐劑は外因病の邪氣が高く上焦にあるを吐出せしむ。攻撃劑は外因病の邪氣が裏の胃腸にあるを瀉下せしむ。表裏劑と和解劑とは是も外因病の邪氣が半表半裏にあるを和解せしむ。理氣と理血との二劑は内因病に適用せられ、祛風、祛寒、清暑、利濕、潤燥及び瀉火の諸劑は外因にそれごとく用ひられ、除痰や消導や收瀉や殺蟲や明目や癰瘍やの各劑は雜病門に配劑せられ、經產劑は婦人科に屬し、嬰兒科及び正骨科は共に別に専門に取扱はれてゐる。

### 第七節 配劑の大意

「茫茫たる宇宙に人は無數、幾個の男兒是れ丈夫」と詩人は謠ふ。渾球上には十六億の人を數ふるが、さて役に立つ人を役に立てる人が極めて少く、實に指を屈める程度に過ぎぬは古今を通じて然りと爲す。天空に懸れる億兆の星辰も光芒の顯著なるは至て寥々であり、下界は動植礦の物より水土に至る迄、其數へ盡されぬ悉皆の藥物も特性希有の者にして廣く其用を爲す者は蓋し少い。適材適所と云ふからには濟々たる多士も其長短を辨せねば部署に就いて其得所を發揮せしめられぬ。同様に藥物の氣味性情を知らねば如何にして

君臣佐使の配劑を爲して其功が責められるであらう。又鹹に九鍼の別があるも此理に異ならぬ。是れ治者醫家が寸時も忽諸閑却せられぬ最大緊急事に屬する要件でない乎。

劉完素氏が曰ふ「寒熱温涼の四氣は天より生じ酸苦甘辛鹹淡の六味は地より成る。からして有形を味と爲し無形を氣と爲す。氣は陽に屬し味は陰に屬す。温熱は天の陽にして凉寒は天の陰であり、辛甘淡は地の陽にして酸苦鹹は地の陰である」と。凡そ藥の酸きは能く瀉し能く收め、苦きは能く瀉し能く燥かし能く堅め、甘きは能く補ひ能く和し能く緩くし、辛きは能く散じ能く潤ほし能く横行し、鹹きは能く下し能く堅きを軟らげ、淡きは能く竅を利し能く滲泄する。之が五味の活力である。

凡そ藥の輕虚なるは浮んで昇り、重實なるは沈んで降る。氣が厚く味が薄きは浮んで昇り、味の厚く氣の薄きは沈んで降る。氣味共に厚きは能く浮き能く沈み、氣味共に薄きは昇るべく降るべく、酸鹹なるは昇ることなく、辛甘なるは降ることなし。寒なるは浮ぶことなく熱なるは沈むことはない。之が昇降浮沈の義である。

凡そ藥根が土中にある半身以上は則ち上昇し以下は則ち下降す。一藥にして根と梢とは用ふる所を異にするから誤り服せば效がない。藥の枝は手足に達し皮は皮膚に達し心たり幹たるは内藏に行ぐる。質の輕きは上つて心肺に入り重きは下つて肝腎に入り中空なるは發表し内實なるは攻裏し枯燥なるは氣分に入り潤澤なるは血分に入る。之が上下内外各自に其類を以て相從ふ者である。

藥には相須つ者があり、同類にて離れられぬがあり、相使ふ者は我の佐使であり、相惡む者は我の能を奪ふ者であり、相畏るゝ者は彼の制を受くる者であり、相反する者は兩々に相合へぬ。相殺する者は彼の毒を

制する、之が異同の義である。以上の數件は醫師たる者は常々心得置かねばならぬ。

### 第八節 五藏と五味との關係

肝は急を苦しむ、急に甘を食うて之を緩うす、肝は散を欲す、急に辛を食うて之を散す、辛にて之を補ひ酸にて之を瀉する。

心は緩を苦しむ、急に酸を食うて之を收む、心は軟を欲す、急に鹹を食うて之を軟にす、鹹にて之を補ひ甘にて之を瀉する。

脾は濕を苦しむ、急に苦を食うて之を燥かす、脾は緩を欲す、急に甘を食うて之を緩うす、甘にて之を補ひ苦にて之を瀉する。

肺は氣の上逆を苦しむ、急に苦を食うて之を瀉す。肺は收を欲す、急に酸を食うて之を收む。酸にて之を補ひ辛にて之を瀉する。

腎は燥を苦しむ、急に辛を食うて之を潤ほす、腎は堅を欲す、急に苦を食うて之を堅む。苦にて之を補ひ鹹にて之を瀉する、之が五味の五藏に於ける補瀉の義である。

風邪が内に淫するには辛凉にて之を治し苦甘が之を佐くる、甘にて之を緩うし辛にて之を散する。

熱邪が内に淫するには鹹寒にて之を治し苦甘が之を佐くる、酸にて之を收め、苦にて之を緩うす。

濕邪が内に淫するには苦熱にて之を治し、酸淡が之を佐くる、苦にて之を燥かし淡にて之を泄らす。

火邪が内に淫するには鹹冷にて之を治し苦辛が之を佐くる。酸にて之を收め苦にて之を發する。燥邪が内に淫するには苦溫にて之を治し甘辛が之を佐くる、苦にて之を下す。寒邪が内に淫するには甘熱にて之を治し苦辛が之を佐くる、鹹にて之を瀉し辛にて之を潤はし苦にて之を堅むる。之が六淫の主治にして各其宜しき所がある、故に藥性は宜しく明かにすべく而して施用は審かにするを貴ぶ。

酸は筋に走るから筋病には酸を多く食してはならぬ、筋が酸を得れば則ち拘攣し收引することが益々甚しうなる。

苦は骨に走るから骨病には苦を多く食してはならぬ、骨が苦を得れば則ち陰が益々甚しう重くして擧げ難くなる。

甘は肉に走るから肉病には甘を多く食してはならぬ、肉が甘を得れば則ち氣を塞ぎ臃腫が益々甚しうなる。辛は氣に走るから氣病には辛を多く食してはならぬ、氣が辛を得れば則ち散じて益々虚する。

鹹は血に走るから血病には鹹を多く食してはならぬ、血が鹹を得れば凝滯して口が渴く、之が五藏の禁ずる所である。

藥物には各形性氣質があつて其人體の諸經に入るに、形の相類するに因る者がある。即ち山梔子が心形に似て心に入り、荔枝核が辜丸に似て腎に入るの類である。性に因て相從ふ者がある、即ち木に屬する者は肝に入り、水に屬するものは腎に入り、潤ふ者は血分に走り、燥く者は氣分に入る。所謂天に本づく者は上に

親み地に本づく者は下に親しむの類である。氣に因て相求むる者がある、即ち氣の香はしきは脾に入り、氣の焦げたるは心に入るの類である。質に因て相同じき者がある。即ち藥の頭は頭に入り幹は身に入り枝は手足に入り皮は皮膚に入り、又紅花や蘇芳汁が血に似て血分に入るの類である。此等は皆自然の理である、吾意を以て自得せねばならぬ。

凡そ藥は火製のもの四つ、即ち煨、煨、炙、炒である。水製の者が三つ、即ち浸、泡、洗である。水火共製の者が二つ、即ち蒸、煮である。酒製は升提し、薑製は溫散し、鹽を入れると即ち腎に走つて堅を軟く、醋を用ふれば則ち肝に注いで收斂し、童便製は劣性を除いて降下し、米泔製は燥性を去つて中を和し、乳製は枯を潤はし血を生じ、蜜製は甘緩して元氣を益し、陳壁土製は土氣を藉りて中洲（脾胃）を補ひ、麵煨麵製は酷性を抑へて上膈を傷めることなく、烏頭を甘草湯に漬せば並に毒を解して平和ならしむ。羊酥や猪脂を塗て焼けば悉く骨に滲み容易に脆斷せらる。穢を去るは脹れを免かれしめ、心を去るは煩を除く爲である。此の如く製治には各其宜しき所がある、藥物を扱ふ者は知らねばならぬ。

藥を用ふるに或は地道に適し且つ眞でなければ則ち美惡が迥に別である。胡桃は北地が藥用に適し南産は只食膳に供せらるゝに過ぎぬ。或は藥肆が偽を飾れば則ち氣味は全く乖き、或は採取に其時を得なければ則ち良否が質を異にする。或は頭尾を誤用せば則ち呼應が不靈となり、或は製治が精ならねば則ち功力が大に減する、用ふる者が此理を察せずして咎を藥の功なきに歸するは、例へば兵を精練せずして寇を盪し敵に勝たんと思ふが如し。却て衆を覆へし尸を輿にすることになる。治療家は忽諸に付して可ならんや。

以上は汪昂氏が藥物惣議の概要を摘出した者である。猶ほ生熟の使途にも亦自ら別がある。生蜜は下劑に適し熟蜜は滋補の用を爲す、生は、總じて氣銳であり柵を抜き塞を破る猛烈さを現じ、熟は概して圓滑にして降を受け暴を撫する寛度を示す。頑固な宿痾や突發的猛毒に對し生氣潑刺な類を用ふべき乎、老練熟達の品に頼るべき乎。之を擇ぶは専ら其體質證狀に鑑みる醫家が其手腕に委ねねばならぬ。馬上で天下を取つても馬上で天下が治められぬと言ふではないか、撥亂反正の後には必ず文治的溫和を主とし、士を慰め民を息しむる手段を講せねばならぬ。

### 第九節 外科的療法

外科的鍼灸療法は結果より原因に及ぼす手段を主とする。例へば顔色を望んで其脾胃の健否は知られる。内藏の脾胃を健全にすれば則ち外形の顔色は美しうなる。併し毎朝毎夕忘れずに顔面の摩擦を繰返す實行を怠たらねば、自然に顔色が潤澤を帯びて来る。從て脾胃も亦漸次に消化の機能が發揮する。之が外より内に則ち結果から原因に及ぼす方法である。内經にも先づ傷む處より刺鍼すべきを論ずるは、即ち局所療法の理を明かにせられた者である。而して些少の痛苦は忍耐せねばならぬが、鍼灸治病の適應症に於ける効果は其迅速なること、及び其確實なることは到底藥石の比肩せられぬ所の者がある。上古には九鍼の區別もあつて現代外科所用の如き利器もあつたのである。而して今の鍼科が専用してゐる者は、九鍼中の毫鍼と稱する者、及び九鍼外に屬する小鍼と名づくる者である。局部若しくは病經に刺して、能く宗氣を振作し邪氣を瀉出す

るを最大目的とする。先づ刺鍼の理を研究せられた洋家が所説の要點を列擧すれば、

- 一、神經を興奮させて反射作用を起す。
  - 一、知覺神經に強刺戟を與へて反射作用を止め、或は永く刺戟を續けて神經を疲勞せしむ。又制止神經を刺戟して其機能を昂む。
  - 一、知覺神經を刺戟して運動神經を興奮せしむ。
  - 一、交感神經を刺戟して麻痺作用を起さしむ。
  - 一、刺鍼は皮膚を刺戟して反射作用を充かめ誘導作用を爲す。
  - 一、刺鍼は電氣作用を起す。
  - 一、シャテール氏の説に重金屬は大抵生活體內の液體に接觸する時は電流を起し酸化作用を充かむ。
  - 一、動物試験の結果に依れば刺鍼後に化膿の傾向なく、運動も飲食も交尾も變化を見ぬ。
- などである。要するに興奮、鎮靜、誘導の三作用を稱揚するに歸する。
- 又文政年間に侍醫法眼石坂宗哲氏は蘭醫シーボルトの爲に、知要一言と云ふ一書を編して鍼灸の大要を論じてゐる。口傳などと稱して教を秘し容易に授けなかつた時代に幕命とは云へ、石坂氏が胸襟を披いて此海寬の量を示されたのは實に稱揚すべく、又シーボルトも亦其技倆に驕らず他山の石を拾ふは、道に醫家が博採の本分を忘れない謙德にして誠に感服に餘りありと謂ふべし。其知要一言の大要を摘出して左に掲ぐ。茲に東西醫家の着眼が偶々相徑庭する所以も推知せられて味ひがあると思はれる。
- 一、漢土にも上古には人體を解剖して其病源を探求した。無病の人には人身悉く鍼を禁すべきが、若し病があれば全身至

る所は刺鍼すべき場所である。例へば瞳孔は至極大切な場所なれど膜眼には刺鍼せねばならぬやうな者である。

一、竹木が身に立つたのも金銀の鍼が立つたのも同じくトゲである。誤つて立つと術あつて刺すとの相違である。竹木のトゲが立つたら人力の及ぶ限り抜去る。若し人力の及ばぬ場合は人の自然の元氣でトゲのある所に熱を生じ、段々と精神や衛榮が集り其トゲのある所は愈々熱を盛んにし、其熱で腐れて膿となり人力にて抜けぬトゲを膿と共に潰して身外に抜け出すのである。膿が出て熱が去つたなら元の無疵の身となる様に、術で金銀の針金を病のある所に刺入すれば竹木のトゲのある所に熱を生ずると同様に、精神衛榮が力を入れて鍼下に集り來るのである。暫時鍼を留て程よく鍼下に集めて其鍼を抜去れば、集りたる精神衛榮が病邪を逐ひ散らして忽ちに消散することは風が雲を吹拂ふ理と同じ譯である。——著者曰く邪氣病毒は人身に於ける、元氣に對する寇賊である。精神衛榮が之を掃蕩せなかつたならば元氣は飛散し體軀は冷灰化する、體氣は異分子を容赦して置かぬ。一致的綜合的組織に従て滿身の官能は、各自其職を守て越權がない、國家の内憂は賊であり外患は寇である。君民上下に罅隙がなければ寇賊の由て起る餘地がなく隨て亡滅の機運は招來せぬ。内治が調はねば賣國奴も生じ外交が拙なれば侮蔑も來る。疾病は物じて外因に治し易く内因に愈え難い。又内因があつて外因に襲はれたなら更に難治となる。例へば淋毒と云ふ賣國奴がある體質に、風寒と云ふ外敵が犯して來たならば、關節炎、神経痛、不仁麻木、其他形式は種々に異つて、身體の缺陷の箇處に乗じて病が擡頭し來る。而して孰れも悉く難治に屬する。賣國奴が國家の秘密を裏切り敵國に洩らして自國の亡滅を速くは、如何にも忘恩的醜奴にして惡むべき極みである。小田原の落城も大阪城の陥没も宋朝の壊滅も其類例は古今の史上に枚擧する邊がない。皇國はかゝる心配は明治の中葉迄は斷然なかつた尊嚴な國體であつた。然るに「安而不忘危」と云ふ聖訓を鑒みず目下の形勢に馴致せしめたは、政黨が朋争の餘弊にして其黨利に没頭して國家に忠實を盡す暇がなく、荏苒として如此迄も亂脈ならしめたるは反すくも長大嘆息の至りである。是れ實に眞誠なる憂國の經世家が出現して悃款を盡して皇運を扶翼し

奉らなかつた結果であると思はれる。

- 一、避けて禁すべき個處は大に動いて止むことがない所である。心肺の二藏と動脈の如き管と宗脈の如き管とである。種種と失敗も生ずるから鍼科は衛氣の道筋と宗脈の道筋とに暗くては素人も同様である。諸病の危急に臨んでは斯道に能く鍛鍊の者は禁じ避くべき所に刺して却て奏功を得ることは、猶ほ戰術に奇兵を用ふると擇ぶ所がない。
- 一、刺鍼してヒ、ハ、クと云ふことがある。今刺した場所から上下左右に響くことは常規である。然るに思ひも依らぬ所に響くことがある。手足へ刺した鍼が頭面や胸背に響くのである。是は宗脈に響くのであり、榮衛の經絡でもなく又筋でもないのである。
- 一、刺法に補瀉迎隨虚實と云ふことがある。補は微鍼にて病人の精神榮衛を努張させ病邪を除く法であり、瀉は榮衛が瘀滯してある地を瀉し除く法である。西洋には鍼の瀉法があると豫て聞及んでゐる。が至て精しいことゝ覺えらる、定めしランセツトや三稜鍼の類を用ふるのであらう。迎隨の法とは補法の術で既に鍼を下したら能く榮衛の往來を考へ、之を迎へ之に隨ふ心持にて病の結ばれを解くに、氣を永くして日の暮れるのも知らぬなど云ふ譬の様にスナホにコダハリなく刺すのを云ふのである。虚法は鍼をすらくと下しすらくと抜き、精神榮衛が俱に盛んなる病氣に用ふる術である。實法は迎隨の術を用ひ手間どりてそらくと鍼を下し少しも痛みがなく響も薄く、鍼の呼吸も間遠に緩くすべく、精神榮衛の虚乏したる者に用ふる術である。さて一人の病でも或は實法を用ひたり或は虚法を用ひたりする。又上部には虚法を用ひて下部には實法を用ふることもある。病の淺深や虚實に依て鍼法の淺深補瀉迎隨虚實があつて、之を用ふるは醫者の工風に存するのである。

石坂氏が知要一言の梗概は右の如し。而して炷灸も外科的療法にして適應の經穴に點して血液の循環を利導し神經の感應を調和し筋肉の凝鬱を軟緩して、病毒を潰散せしむる效は刺鍼に比肩し藥劑湯液の到底遠く



及ばぬ所がある。熨蒸法は熨斗ひたしして温めたり薬湯にて蒸したりする法にして、現今流行の温灸は熨法の應用と見て大差はない。刺鍼は瀉に屬し炷灸は補に屬し熨蒸は補瀉互用の療法に屬する。

## 第七章 經絡の循環

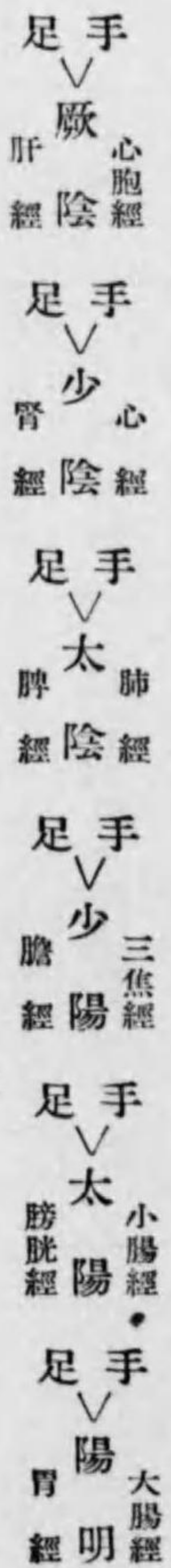
### 第一節 經絡概説

新開の西歐醫學にも解剖生理を其基礎學としてゐる。而して五千年の治績を保有してゐる東洋醫道の基礎とする所は何であるか。即ち骨度學と經絡學と藏象學とである。藏象學とは前章に陳べた内藏の機能を語るものであり、骨度學とは後章に概説する骨格の均衡であり、經絡學は血脈が循環する系統と孔穴の部位とを論ずるものである。此章は經絡と孔穴とを主として説明するのである。

さて經とは織る機の終る迄替はらぬ堅糸を經といふに依り、血脈循環の一定不變な者を經とは名づくる。又地は其掘る所には必ず水がある。此水は地中到處に流通してゐる水脈の潤ひである。即ち體內にも血隧と稱へて血液の通路がある。其隧道の大なる者十二系が所謂十二經脈にして即ち十二月に象つた者である。此十二系の分派支流が絡と稱へて大なる者が十五絡を數へらる。又其分派支流を孫絡と稱へ毛細に迄分れて甲乙が互に相聯絡して肉を滋生する。故に皮膚中何處を刺しても血の滲まぬ所はない。此が水を以て血に譬

ふる所以と爲す。而して經脈は内面を循つて絡脈は外部を循る。故に經を陰と爲し絡を陽と爲す。洋醫の動靜二脈は我經絡に似てゐる所があるやうである。而して啣筒的循環の着想は振つてゐる。

次に十二經の名稱を擧ぐれば即ち厥陰、少陰、太陰、少陽、太陽、陽明、此六者に手足の名が冠せられて十二となる。即ち表示すれば次の如し、



循環の大別は左の如し、

- 一、手の陰經は腹部より手部に行ぐり、
- 一、手の陽經は手部より頭部に行ぐり、
- 一、足の陽經は頭部より足部に行ぐり、
- 一、足の陰經は足部より腹部に行ぐり、

循環する序次は左の如し、

手の太陰肺經に始まり、次に手の陽明大腸經、次に足の陽明胃經、次に足の太陰脾經、次に手の少陰心經、次に手の太陽小腸經、次に足の太陽膀胱經、次に足の少陰腎經、次に手の厥陰心包經、次に手の少陽三焦經、次に足の少陽膽經、次に足の厥陰肝經に終つて又肺經に連絡する。之を表示すれば、



原 <sub>土</sub>	合谷	腕骨	垢墟	衝陽	京骨	陽池	過所
經 <sub>火</sub>	陽谿	陽谷	陽輔	解谿	崑崙	支溝	
合 <sub>土</sub>	曲池	少海	陽陵泉	三里	委中	天井	入所

六府には五藏に比して原土が加へてある。  
序に十五絡の穴圖を示す、

太陰	手列缺	少陰	手通里	厥陰	手内關	陽明	手偏
	足公孫		足太鍾		足蠡溝		足豐

隆	太陽	少陽	任	尾翳	督	長強	脾	大包 <sub>大絡</sub>
	手支正	手外關						
	足飛揚	足光明						

正經十二脈に對して奇經八脈がある。正經に血液が横溢するを調攝する意味に取る。乃ち任、督、衝、陰維、陽維、陰蹻、陽蹻、帶の八脈である。任督二脈の外は正經の孔穴と同所にして其通過の路程を異にしてゐる。故に任督二脈を正經十二に加へて後世に十四經とは名づけた者である。  
奇經八脈の起終を表示すれば、

任脈	會陰	承漿	起	終
督脈	長強	斷交		
衝脈	橫骨	幽門 <sub>同</sub>		
帶脈	章門 <sub>經肝</sub>	維道 <sub>經膽</sub>		

陰維	築賓	廉泉	起	終
陽維	金門	本神		
陰蹻	然谷	睛明		
陽蹻	中脈 <sub>眇</sub>	風池 <sub>經膽</sub>		

さて經絡學は皇漢醫道では醫道の基礎として非常に大切とする所である。漢人の名醫大家は經絡を腦裏に滲み込ましてゐぬ者はない。洋人も漢方に目を注いで非常な研究だとのことであるから、必ず經絡を見逃しは致すまい。ヘット帶なども經絡より思付いたのではあるまいか、現代の醫師が經絡を嘲笑するは無研究からの認識不足であるが猶ほ恕せねばならぬは、其研究の道筋を同じうせぬに因る爲である。然るに皇朝の漢方醫家は古來經絡は鍼灸家の專修、按摩導引の專有とも思はるゝにや經絡を甚だ輕視する傾きがあるは合點が參らぬ。誠に遺憾千萬の次第である。

### 第二節 六經の辨

十二經脈は前に表示した如く六經を手と足とに分けて十二經となる譯であるが、さて此の六經に就いて内經の運氣論に言ふ六經と、傷寒論に言ふ六經と、此經脈の六經とは眞理に於て同一であり其用語に於て同様

であつても其要點の指定が異つてゐるから甚だ混雜し易い。初學の爲め左に簡單に理解して置く。

運氣論の六經は風著濕燥寒火の六氣より起因す、即風氣を厥陰風木と云ひ正二の二ヶ月を主どり、暑氣を少陰君火と云ひ三四の二ヶ月を主どり、濕氣を太陰濕土と云ひ五六の二ヶ月を主どり、火氣を少陽相火と云ひ七八の二ヶ月を主どり、燥氣を陽明燥金と云ひ九十の二ヶ月を主どり、寒氣を太陽寒水と云ひ十一十二の二ヶ月を主どる。

即ち一ヶ年を初の氣二の氣三の氣四の氣五の氣終の氣とし、二ヶ月は六十日にして六氣にて三百六十日乃ち一ヶ年となり、之を地の主氣と爲し永久に變ることはない。而して天の六氣は地の主氣に對して客氣と名づける。干支の循環に従つて年々變ずるから之を加臨の氣又地の主氣に對して客氣とも云ふ。地の德は靜を主とする受動的なるが故に春夏秋冬の四季には變化はない。然るに天の德は動を主とし能動的なるが故に、甲子より癸亥に至る六十年即ち此の一紀間に年々加臨に因て氣候に遲速の變化がある。乃ち冬が暖かつたり春が寒むかつたりする。此變化は地の主氣と天の客氣との歲會の相異より生ずる。即ち平和の歲と大過の歲と不及の歲との三區分に因り病變や災害を豫知する。是が運氣論の六氣に依る六經の大概である。

次に傷寒論の六經は太陽陽明少陽太陰少陰厥陰の順序となる。傷寒は勿論外感病であるから其初氣に犯さるゝは必ず皮膚よりする。故に太陽病と云へば皮膚に病邪のある間を指し、之を表邪と名づくる。此邪が表に居る初起の際に發汗の治法が宜しきに適せば則ち病邪は立ところに驅除して全快せらる。若し發汗の治法を誤れば直に陽明に傳ふるあり、又餘熱の變化は百病の因ともなる。陽明を裏證と云ふは太陽の表證に對して

の謂ひである。陽明裏證に經の脾に傳へた者を脾約即更衣と名づけ、府の胃に傳へた者を胃家實と名づけ及び大便難と名づくる三證に區別せられる、緩峻の別はあるが下劑の治法が時宜に適すれば直に全快する。若し下法が其宜しき得ざれば則ち少陽に傳ふるか、或餘毒の轉變は測り知られぬ。太陽は背部に重きを置いて表證と謂ひ陽明は腹部に重きを置いて裏證と謂ふ。少陽は兩側の脇肋に當るが故に太陽陽明の表裏に對し半表半裏の名がある。是が治法は之を和し之を清める藥味を用ひて法に適せば即ち愈ゆる。之が三陽變化の大概である。太陰少陰厥陰の三陰は陰證と云ひ邪の内陷とも云ふ。病證より云へば勿論惡化せし者である。少陽病の治法を誤つて邪が太陰に傳はり、太陰より少陰に傳へ少陰より厥陰に傳ふ。之が風寒の病邪が傳經の順次である。而して此の六氣の邪が吾人に感ずるは同一にしても各人が受病の證狀は各異つてゐる。是れ蓋し吾人の形體に厚薄があり氣力に盛衰があり内藏に寒熱がある。是に由て其受くる所の病邪は毎々其人の藏氣に従て化す。此化があるに因り生ずる所の病にも各相異がある譯である、是を以て或は虛より化し或は實より化し或は寒より化し或は熱より化す。今之を水火に譬へて言へば水が盛んであれば則ち火が滅し火が盛んであれば則ち水が耗る、凡て物が盛んなれば則ち從て化するは理の固より然る所と爲す。誠に能く此理を詳かにせば又何ぞ陽邪が陰に傳ふるをも、寒が變じて熱に化するをも疑うて遂に以て奇と爲すには足りないではない乎。然るに支那でも後漢の世から千年を経た清朝の初まで、醫說として三陰の寒邪は傳へぬと云ひ、且つ傷寒の傳經も陰邪は直中を爲すと謂つてゐる。苟も直中することを知れば乃ち中寒の證は傳經の邪ではない乎、是等は皆未だ嘗て仲景の傷害論を熟讀せぬより此の誤謬が生ずるのである。

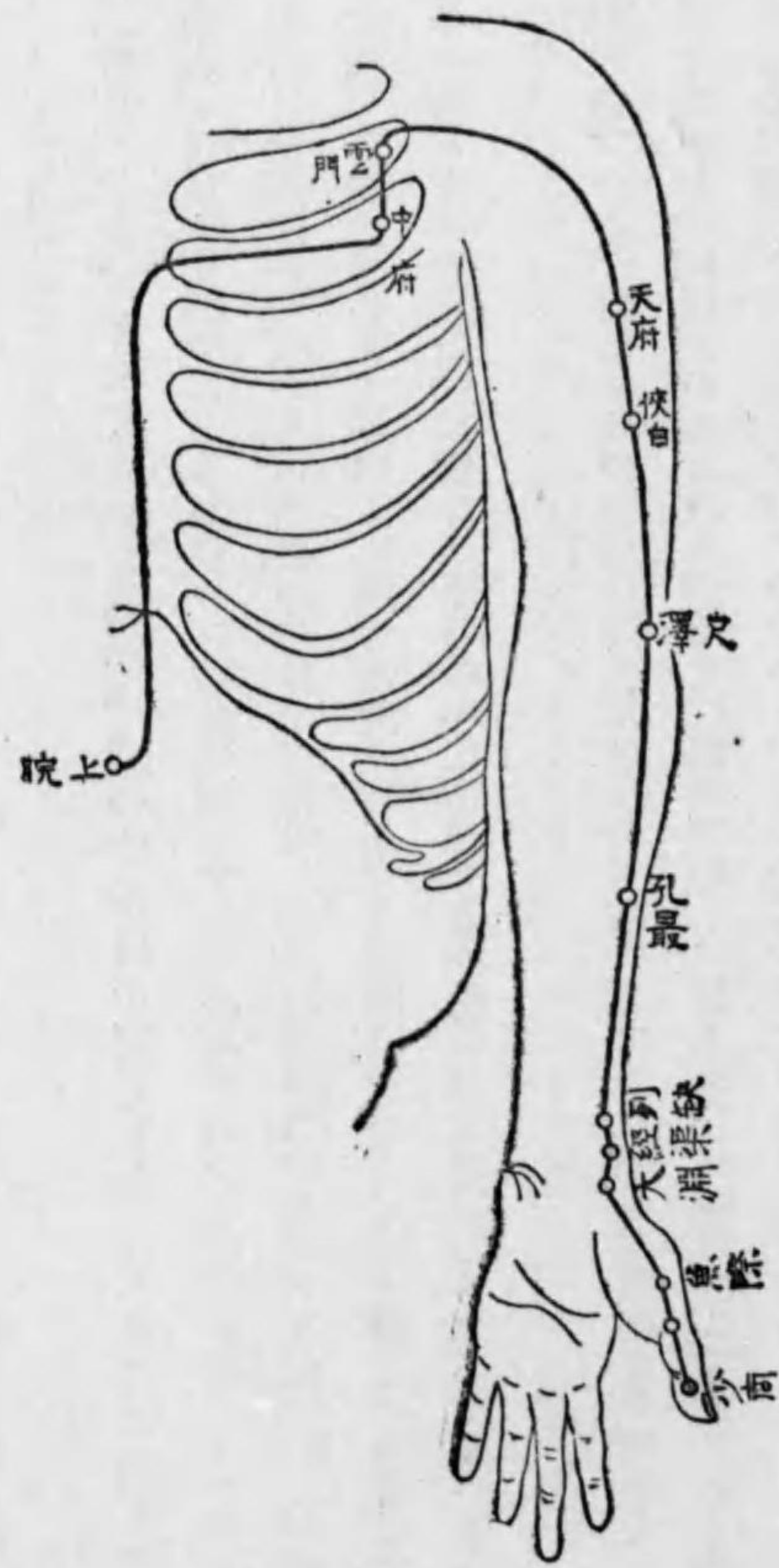
故に外邪が傳經するは更に疑ふべき餘地がない醫學上斷案とは成つてゐる。而して間傳（間隔を措いて傳ふるを謂ふ）があり、直中（直に陰經に中るを謂ふ）があり、合病（二經若しくは三經が同病して一經に併歸せぬを謂ふ）があり、併病（二經若しくは三經が同病して其後に歸併し一經が自ら病む者を謂ふ）がある。故に病理は簡單にして複雑化と爲り、複雑なりと雖も其要領を得ば簡單化せられる。醫に志す者は沈思精讀以て簡單化するを貴としと爲す。

是に於て運氣論と傷寒論との六經の運行轉移を比較するに、運氣論は日月干支の運行を主とするにあり。故に厥陰、少陰、太陰、少陽、陽明、太陽と云ふ順序となり、傷寒論は外邪が皮膚より犯すを主とするに依り、太陽、陽明、少陽、太陰、少陰、厥陰と云ふ次第になるのである。排列の次序に順逆があるに見て要領を握らるべし。而して十二經脈は血脈が總身を循環する順次である。又其主とする所を異にしてゐる。以下述ぶる所に依て肯綮を得らるべし。

### 第三節 手太陰肺經

此經は多氣少血なり、素問の血氣形志篇の文である、以下之に倣へ、古今醫統の内經要旨經度篇の註に血氣多少の義を辨ずることが詳かである。即ち地の六氣（主氣）の主どる所は一歳の寒熱に因て分つ者である。太陰は四之氣にして六月の中より八月の中に至る六十日間と爲す。此時候は熱が盛にして寒が少い。熱は陽にして氣に合し寒は陰にして血に合す。故に人の手足の太陰經は陽氣が多く陰血は少い、且つ難經には「太陰の至るを緊大にして長なり」と。緊は陰にして大も

### 手の太陰肺經圖



長も陽脈である、是も亦太陰は氣に多く血に少き所以と爲す。

### 孔穴歌

手太陰肺は十一穴とす。中府（肺募）雲門、天府と列り、俠白、尺澤、孔最是存す、列缺、經渠、太淵に渉る、魚際少商は非葉の如し。（左右二十二穴）

手太陰の脈は中焦より起り、下りて大腸を絡ひ、還つて胃口を循ぐり膈を上り肺に屬す。

中焦は心膜を謂ふ（鳩尾より臍中に至る間を心と謂ふ）、而して此處は専ら胃の中脘穴を指し胃の正中に當る。胃口は胃の上口にして上腕穴に當る所謂賁門である。胃の下口は下腕穴に當る所謂幽門である。肺と大腸とは表裏を爲し標本とも云ふ。膈は隔の意味にして乃ち心と肺との下に隔つる膜がある、之が膈膜である、脊と脇とに附着して一周してゐる。前部は鳩尾穴に當り後背は七椎の膈俞穴に當る。腸胃の中に腐熟せる穢濁の氣を遮隔して上部なる心肺の清藏を薰ぜしめぬ所以である。

手太陰は中焦が起點である。而して此の中焦は即ち足厥陰の終點にして手太陰は足厥陰より交を受くる所になる。是の中焦より任脈の外であり足少陰腎經の裏である兩間を次第に下行し、臍上水分穴の部位に當りて大腸を繞絡する。是に於て手太陰肺經と手陽明大腸經と藏府相傳を爲すのである、（無間矢鱗に痔を切截して肺疾患を生ぜしむるものは此關係あるに因る）。乃ち復本經の外を行ぐり胃の上口に漸次に膈膜を上つて胸中に至り肺藏に屬會する。

肺の系より横に腋下に出で下りて臍内を循ぐり厥陰心主の前を行き肘中に下る。

肺系とは喉嚨を謂ふ。乃ち呼吸の通路にして肺系を肺管とも云ふ。喉が呼吸の通路であれば喉に因て息氣を候ふ、而して此の喉の下の根本が肺に連接してゐるから之を肺系とも云ふ。肩の下と脇ばらの上との根の際を腋と云ふ、俗にワ、キツ、ボと云ふ。膊（肩の骨にて俗に手打掛と云ふ）の下なる腋に對する所を乃ち肩と肘との間を通じて臍と云ふ。臍の盡くる

處を肘と爲す、肘は臍と臂との關節である。

肺藏より肺系を循ぐり外に出で左右に分れ横行して胸部の第四行（一行は任脈、二行は腎經、三行は胃經、四行は肺經）の中府雲門の二穴を循ぐり腋下に流出し、腋下より手に下りて臍の内面を循ぐり天府俠白の二穴を歴て、手少陰心經と手厥陰心主經との前を流れ行き、下りて肘關節の中に入り尺澤穴に抵る。蓋し手少陰は臍臂を循ぐつて小指の端に出で、手厥陰は臍臂を循ぐつて中指の端に出づ。手太陰は則ち此二經の前を行くのである。

臂内の上骨の下廉を循り寸口に入り魚に上り、魚際より大指の端に出づ。

肘より以下が臂である。乃ち肘と腕との間を臂と爲す。廉は隅（かど）又邊（ほとり）の意味、掌後の内踝の高骨の旁なる動脈を關部と爲す。關部より腕の方を前と云ふ。故に關前腕後にある動脈を寸口と爲す。魚と云ひ魚際と云ふは掌骨の前（掌後の腕骨）、大指本節の後（手の大指の第二番目の節が本節である）、肥肉が隆起する處を總じて魚と謂ふ。魚の腹に似てゐるからの名である。而して魚際は其間の穴名なり。

既に肘關節の中に下り乃ち臂内の尺澤穴より大指の通りの上骨の下廉を循ぐり、孔最穴を歴て斜に列缺穴に出づる、寸口の經渠大淵の二穴に入りて漸く魚に上る（腕と尺澤との間を一尺とし、其一寸を腕後に當てる、其間を寸口と云ふ、乃ち經渠は寸口の際にして關の部位に當り、大淵は寸の部位に當る、故に列缺より斜に寸口に入て經渠大淵を歴て漸くに魚際の上り行かんとする）。既に魚腹に行き掛りて魚際の穴を循り、手大指の内側の端に出で爪甲角の少商穴に至つて終る。

中府穴 雲門の下一寸、乳上の肋骨の三枚の上、四枚の下、兩肋の間、此處に動脈があつて手に應ずる陷かなる中である

雲門穴 巨骨（膺の上、天突穴の後に横たはる天骨を巨骨と云ふ）の下、氣戸（胃經の穴）の傍を挟む二寸陷かなる

中であつて、動脈が手に應ずる、臂を擧げ肋骨の陷みを見て之を取る。

天府穴 腋下の横紋頭より尺澤を目的に三寸に點する。臍の内廉の動脈がある處、臂を擧げ鼻を摘んで取る。

俠白穴 天府の下にあり、肘の尺澤を去る五寸の動脈中に取る。

尺澤穴 肘中の約文上の動脈の中にあり。肘の中には幾個も横紋がある。其兩筋の間に確かに動脈ある處なり。此邊は動脈が多いが尺澤穴の處は別けて動脈が強しと知るべし。

孔最穴 腕の横紋を上り肘の方へ去ること七寸、魚際と尺澤とを目標と爲す。

列缺穴 腕側の上一寸、兩手を交叉して食指の端に當り、筋と骨との罅中の絡穴である。此處は太陰經が陽明經へ別れ行く絡脈に係る穴にて十五絡穴の其一に數へる。

經渠穴 寸口陷中にあり、關部の動脈の處に當る。

太淵穴 掌後の陷中にあり。

魚際穴 大指の本節（第三節目を云ふ）の後の内側の散脈中にあり。第三節目の後、寸部の前腕の横紋に近き内側に取る、此處に寸部の動脈の餘勢が散じ来るに依り散脈中にありと云ふ。

少商穴 大指の端、内側の爪甲（爪のハエギハ）の角を去ること韭葉の如くにて、白肉内の宛々中にある。韭葉は二ラの葉にて一分許り隔つる處、手足共に表面は肉色が赤く、裏面は白い。陽經は表を行き陰經は裏を流る。肺は太陰經なり故に白肉を行くのである。猶ほ他處に赤白肉際など云へば直に此意味と知るべし。宛は四方が高く中央が卑きを云ふ。少商穴は手の大指の端、内側の爪甲を去る一分許りの白肉の内なる宛々<sup>なかま</sup>と凹なる中にありと云ふ譯である。

其支は腕後より直に次指の内廉に出で其端に出づ。

本經の直流より傍系するを支と云ふ。肺經の支は腕後の列缺より大指の次指の内廉に行ぐり、其端なる商陽穴に出で大腸經に交る。

腕と肘との間を臂と云ひ、臂骨の盡くる所を腕と云ふ（ウデクビ）。脈の大隧を經と爲す（隧とは經脈が伏行して深き者を云ひ、經脈の大流を大隧と云ふ、故に經脈の直行して大流なるを經隧と云ふ）。經に交はる者を絡と云ふ（旁系が他經と交はる所の支を絡と云ふ）。本經は大指の端なる少商に終り、支は則ち腕後の列缺より次指の内廉に達し其端なる商陽にて手陽明大腸經に交はる。

此經絡が變動に依て生ずる病は肺が脹滿して喘咳する、缺盆中が痛み、甚しきは則ち兩手を交へて脅す（脅とは麻木を云ふ、即ちシビレ、コハバリて不仁し痛む）、之を臂厥と爲す。以上は經脈より生ずる病である。而して藏を主とし肺藏より生ずる病は咳嗽（肺系は呼吸の道である、肺系が鬱滯して咳嗽する）、上氣（肺は諸藏の上において諸藏の上氣は肺が主とする）、喘喝（喘して粗く急なるを喘喝と云ひ肺管の滯りなり）、煩心胸滿（肺經は膈を上て胸中に布いてゐる、且つ肺藏は胸中に居る、故に心煩胸滿を覺ゆる）、膈臂内の前廉が痛み（前廉は臂内上骨の邊なり）、掌中が熱す（肺經が魚腹を行ぐる勢に依て掌中が熱す）。邪氣が盛にして有餘なれば則ち肩背が痛み、風邪に中りて汗が出で小便が數にして欠す。小便は氣化に従て通す。今肺氣が化せぬが故に小便が頻數となる、ア、ク、ビは肺氣が鬱して陰に陥れば陰陽が上下に相引いて欠す。肺の正氣が虚するも肩背が痛みて寒え、少氣して息せられぬ（呼吸困難）。遺失して度がない（覺えず放尿するは肺氣の化が衰ふるに依る、盛なる者は寸口が大なること人迎に三倍し、虚する者は反て人迎より小なり。寸口は本經の大淵の動脈、人迎は足陽明胃經の結喉の兩傍の動脈、凡そ陰經は寸口を本とし陽經は人迎を主とす。肺は太陰經、太陰の位は三、故に肺經の邪が盛んにして太過なれば寸口の脈が人迎よりも大なることが三倍す。肺

經の正氣が虚すれば寸口は反て人迎の脈よりも小になる。大小は脈量を云ふ。

### 第四節 手陽明大腸經

此經は多氣多血なり。陽明は五之氣とす。八月の中より十月の中に至る六十日間を主どる、九月前は殘暑があつて行はれ、九月後は寒が已に行はる。陽明の五之氣は寒熱が俱に行はるを以て人の手足の陽明は陰血も陽氣も俱に多しと爲す。

#### 孔穴歌

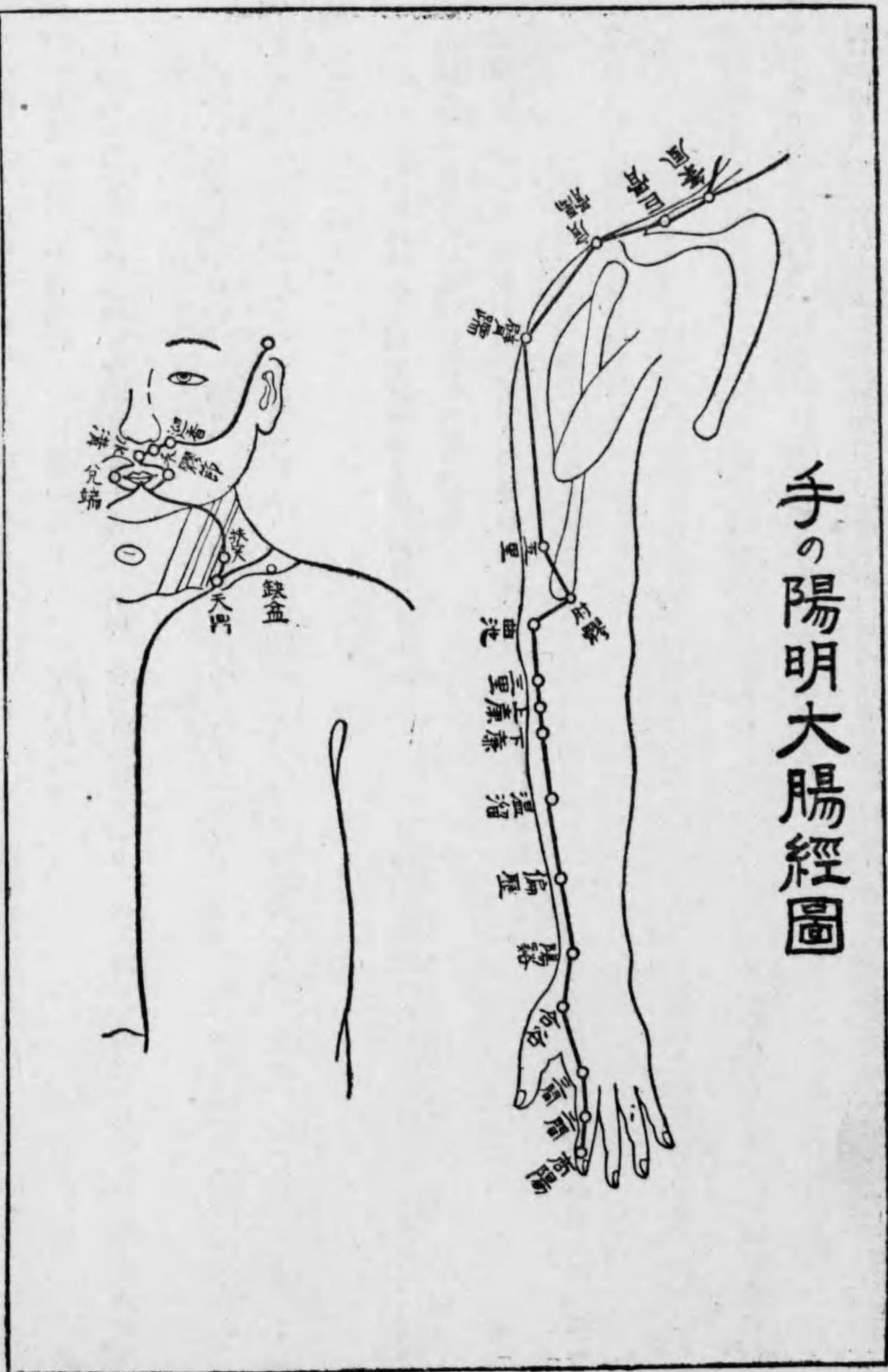
手陽明の穴は商陽より起る。二間三間合谷に藏る。陽谿偏歷より温溜を歴て、下廉上廉三里に長し、曲池肘髎より五里に迎へ、臂臑肩髃巨骨に當る。天鼎扶突より禾膠に交はる。迎香を以て終る二十穴。(左右四十穴)

手陽明の脈は五指の次指の端なる商陽穴より起り、指の上廉なる二間三間の兩穴を循つて大指と次指との間なる合谷穴の處に行き、大指次指の兩岐骨の間に出で腕に上つて兩筋の中なる陽谿穴に入る。

大指の次指とは食指を謂ふ、手陽明は大腸經である。凡そ經脈の道は陰脈は手足の裏を行ぐり(陰道は内を主どる、故に經脈の行道も陰脈の流通は手足の裏即ち陰分を行ぐる)、陽脈は手足の表を行ぐる(陽道は外を主どる、故に陽經の流通は手足の表即ち陽分を行ぐる)。此經は大指の次指の端なる商陽穴に起り手太陰肺經の列缺より別る、者の交りを受け指の上廉の二間と三間との陽分を行ぐる。是より大指と次指との兩骨間合谷穴に出で、復上つて腕の上側兩筋の中なる陽谿穴に入る。臂の上廉を循つて曲池に行き、肘の外廉の肘髎に入り、臑の外面の前廉を循つて肩の肩髃に上る。

陽谿より上つて臂の上廉を流れ偏歷温溜下廉上廉三里の五穴を循て肘の外廉なる曲池穴に入る(曲池は肘髎なるべしとの説あり)。曲池より臑の外前廉を循つて肘髎五里臂臑の三穴を歴て臑會を絡ふ、(臂臑の邊より別れて三焦經の臑會穴を

## 手の陽明大腸經圖





絡ふ(甲乙經)。臂臑より肩に上り肩髃穴に至る。

髃骨の前廉に出で巨骨穴に上り柱骨の會上なる大椎に出づ。

肩端なる肩骨と臑骨と兩骨の間を髃骨と爲す。肩胛(膏肓穴の後にあり)の上際にて背骨と肩骨との會する所を天柱骨(大椎)と爲す。

肩髃骨の前廉に出で巨骨穴を循り、上つて肩骨と天柱骨と會する處の上に出で大椎に於て二經が一處に會合する。

大椎より肩を流れ胸に下つて缺盆に入り、裏は肺藏を絡ひ、又膈膜を下つて臍邊に於て大腸に屬し、肺と大腸と表裏の傳を爲す。

大椎より左右に相分れて頭を挟み肩を流れ前膺に下り缺盆に入て、足陽明胃經脈の外を循り肺藏を絡繞して、復膈膜を下て臍旁なる胃經の天樞穴に當て大腸に會屬す。

其支別なる者は缺盆より頸に上り曲頰の大骨を貫き下齒の縫中に入る。

頭蓋を頸と云ふ(コクビ)。頰下を結喉と云ひ後髪と大椎との間を項と云ひ、項の左右にて耳と肩との間を頸と云ふ。耳より以下なる頰骨の曲れる處を頰(ミヅスイ)と云ふ。

其支となり別かるゝ者は缺盆に直に頸に上行して天鼎扶突の二穴を循り、上つて曲頰の大骨を貫き下齒の縫中に入る。

下齒の縫中より還て出で左右に別れ、口を挟んで人中穴に於て左右が相交又し、左より來る者は右に行き、右より來る者は左に行き、迎香穴に上つて鼻孔を挟んで終る。

口唇の上、鼻柱の下、之を人中と爲す(鼻は氣の出入の門なり、故に天門と云ひ、口は穀味を主どる、故に地戸と云ふ、是を以て口唇の上と鼻柱の下と乃ち天門地戸の中間を人中と云ふ、人中は水溝なり)。

既に齒縫に入て復左右に分出し兩口吻を挟んで、鼻下の人中の分に於て左右が相交又し、左脈の上る者は右に行き右脈の上る者は左に行き、禾髎穴を循り上つて鼻孔を挟み迎香穴に至て終る。(迎香に於て足陽明胃經の起る所に交はる)

商陽 手大指の次指の内側にあり、爪甲を去ること韭菜の如し。

二間 手大指の次指の本節の前なる内側の陷中にあり。

三間 手大指の次指の本節の後なる内側の陷中にあり。

合谷 手大指と次指と岐骨の間なる陷中にあり。

陽谿 合谷の通り腕の横紋中の上側なる兩筋間の陷中にあり。

偏歷 腕の横紋より陽谿の通り三寸上に付す。

溫溜 腕の横紋を後に去ること小兒は六寸、大人は五寸にあり、偏歷の通りに付す。

下廉 内輔骨(肘の横紋の兩頭に突出したる骨を内外の輔骨と云ふ)の下、手先の方、上廉を腕の方へ去ること一寸に付く

上廉 三里より腕の方へ去ること一寸。

三里 曲池より腕の方へ去ること二寸にあり、此處は肌肉が肥えてゐるから三里の穴處を按へれば、周圍の肉が高く起る處である、右の下廉も上廉も皆直に偏歷の通りと知るべし。

曲池 肘の外輔骨にあり、肘を屈する(手を以て拱す)曲骨の中に之を取る。

肘髎 肘の大骨(輔骨)の外廉なる大筋の邊、五里と曲池との正中の外面陷中にあり。

五里 肘上曲池の上三寸を行き、裏に向ひ(肘髎の穴にて一骨外へ出る故に、又此の五里の穴にて裏へ向うて矢張曲池

の通りに付くるを云ふ)、大筋脈の中央にあり。

臂臑 肘上七寸にあり。

肩髃 肩端なる肩骨と臑骨とのツガヒ目の間にして、陥て宛々なる中にあり、臂を擧ぐれば此處に孔空があり。

巨骨 肩端の上の通り兩又骨間（肩髃穴の後、斜に少し外廉、前の巨骨と背の胛骨との入違うてゐる處）の陷中にあり。

天鼎 頸の缺盆の上より直に扶突の後（下）一寸にあり。

扶突 人迎の後へ一寸五分に取る、少し仰いで之を求む。

禾髃 鼻孔の下なる人中の旁を挟むこと各五分にあり。

迎香 禾髃の上一寸、鼻孔の旁五分。

是經脈が動ずれば則ち病形は齒痛し頸腫す（此經は下齒縫中に入り頸に上る）。是れ津液を主どる（大腸は肺の府である、肺は氣を主どる、津液の流行も氣化に因る、或は秘結し或は泄瀉するは皆津液を主として生ずる所の病である）。其大腸の府に生ずる所の病は目黃し（支別が宗脈に合す、故に大腸が熱すれば目が黄ばむ）。口乾き（此經は口吻を挟むから口中が乾く）、鼽衄し（鼻が塞つて水涕を流すを鼽と云ひ、鼻中より血液を流すを衄と云ふ、此經が鼻孔を挟むから鼽衄す）、喉痺し（痺は閉なり、喉の閉塞するを喉痺と云ふ、此經は頭を上行して結喉を挟むから喉痺す）、肩前の臑が痛み、大指の次指が痛んで用ひられぬ。邪氣が有餘なれば則ち當脈の過ぐる處の分位は熱腫し、元氣が虚すれば則ち惡寒戰慄して温まり難く、盛なる者は人迎が寸口に三倍大し、虚する者は人迎が反て寸口より小なり。

### 第五節 足陽明胃經

此經は多氣多血なり、大腸經に同じ。

#### 孔穴歌

四十五穴の足陽明、承泣四白巨髃を経て、地倉大迎頰車は時つ、下關頭維は人迎に對し、水突氣舎は缺盆に連る、氣戸庫房屋翳屯し、膺窓乳中は乳根に延び、不容承滿梁門は起つ、關門太乙滑肉門、天樞外陵大巨は存す、水道歸來氣衝と次ぐ、髀關伏兔は陰市に走り、梁丘犢鼻足の三里、上巨虚は條口の位に連り、下巨虚は與に豐隆に及ぶ。解谿衝陽陷谷の中、内庭厲兌にて經穴は終る。（左右共に九十穴）

足陽明の脈は鼻より起て頰中に交はる、傍ら太陽の脈を約し、下て鼻外を循り上齒の中に入り、還り出でて口を挟み唇を環ぐり下て承漿に交はる。

頰とは鼻莖である。山根を頰と爲す（頰は鼻筋の止る處の莖を云ふ即ち鼻の山根である、兩目間の中央の卑い處を頰とも山根とも鼻莖とも云ふ）。

足陽明は鼻の兩旁なる迎香穴（手陽明大腸經）より起る。是より左右に上り頰中に相交はり、睛明（目の内眥なる膀胱經の睛明穴）の分位に過ぎり、下て鼻外を循り承泣四白巨髃の三穴を歴て上齒の中に入り、復出でて地倉穴を循ぐり兩口吻を挟み唇を環繞して、左右に下て任脈の承漿穴の部位に於て左右が相交り一處になる。

承漿より別れ左右へ却いて斜に頤の下の下廉を循り、大迎穴に出で耳下の頰車穴を循り耳前の下關穴に上り、足少陽の客主人穴を過ぎり、頭角の髮際に上り頭維穴を循つて前髮際なる額顛の督脈の神庭穴に至る。

額骨の下、額骨の上を颞と云ふ（アゴ又はアギト）。颞の下を頤と爲す（頰と頤と間の骨）。頤中を頤と爲す（兩頤の中央にて口の下）。頤前を髮際と爲す（頤はヲ、下リ、コ又はヒ、コメ、キなり、額前が額顛なりヒ、タ、ヒ、ガ、ミ）。

承漿より又左右に別れ却いて斜に頤後の下廉を循り大迎穴に出で、耳下なる曲頰の頰車穴を循り耳前に上て下關穴を経て、膽經の客主人穴を過ぎり面豎の髮際を循り膽經の懸壺領脈二穴の部位を過ぎりて頭角に入り頭維穴を経て、面横の髮際を循り額顛なる督脈の神庭穴に於て左右の脈が一處に會合する。

其支にて別るゝ者は頤後の大迎穴の前より、頸の人迎穴に下り喉嚨を挟み循り水突氣舍の二穴を歴て缺盆に入り、膈膜を下りて裏なる胃に屬し脾を絡ひ、藏府表裏の傳を爲す。

天突より岐骨迄の間の任脈の通りを胸と云ふ。胸の兩旁なる乳の通りに骨肉が俱に高く起る處を膈と爲す。膈上に横はる骨を巨骨と云ふ。巨骨の上の陥める中を缺盆と爲す（盆の缺けたるに似てゐる）。

其支別の者は大迎穴の前より頸の人迎穴に下り喉嚨を挟み水突穴に下り氣舍穴に行き缺盆に入り、足少陰腎經の中行を去ること二寸なる兪府穴の外を流注して、膈膜に下り臍上五寸上腕、臍上四寸中腕の分位に當て胃に屬し脾を絡ふ。

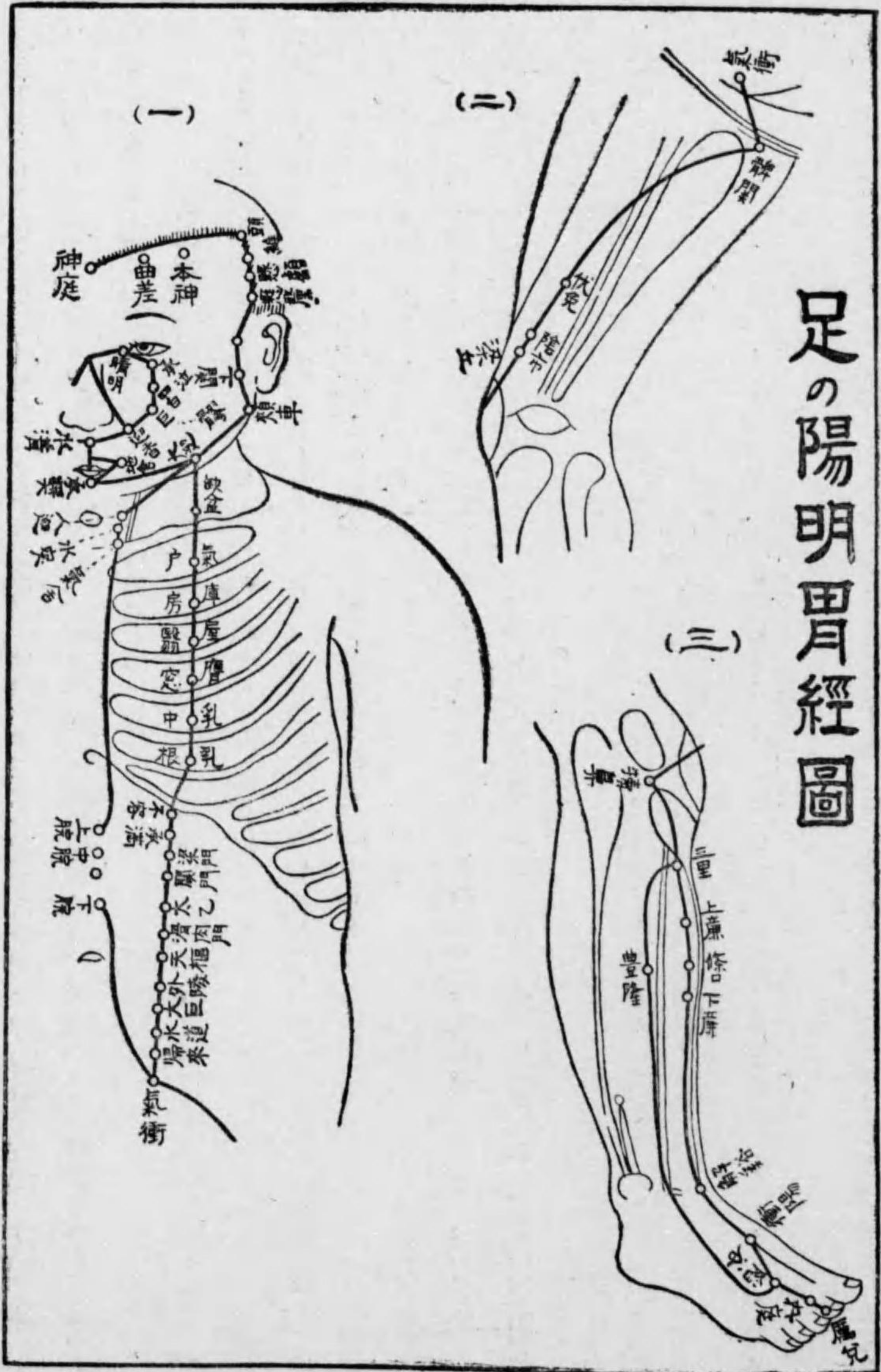
其直行の者は缺盆より膈に下り乳の内廉を流れ、腹に下り天樞穴に行いて臍を挟み小腹に下り股の付根なる氣衝穴の中に入る。

直行する者は缺盆よりして膈に下り乳の内廉を下り氣戸庫房屋翳膈窓乳中乳根不容承滿梁門關門太乙滑肉門の十二穴を循り。下て臍を挟み天樞外陵大巨水道歸來の五穴を歴て氣衝穴の中に入る。

其支なる者は胃の下口なる下腕の分位に別れて腹裏を循り下り陰股の付根なる氣衝穴の中に至て前經と相合す。

胃の下口なる下腕の分位即ち難經に云ふ太倉（胃は五穀を納る府たるにより太倉と云ふ）の下口を幽門と爲すとは是である（胃の下口と腸の上口とは間斷なく相合して幽陰なるより幽門とは名づく）。前の胃に屬し脾を絡ふたる者が胃の下口よ

### 足の陽明胃經圖



りして腹裏を循り、足少陰の盲俞穴の外と本經の裏と兩間を通過し、下て氣衝穴の中に入り前の氣衝穴に入る者と會合す。是より髀關を下り伏兔に抵り膝膕の中に下り、脣の外廉を循り足跗に下り大指の次指の外間に入る。

髀は髀外を指す。髀の前、膝の上なる起肉を伏兔と云ふ（起肉の形が兔の伏したるに似たるに依る）。伏兔の後の交紋を髀關と爲す。膝解の中を挟むを膕と爲す（髀骨と脛骨との關を膝解と云ひ、其膝解の中を挟む所の蓋骨を膕と云ふ、ヒザ、ザ、脛骨を髀と爲す（膝より足腕までのムカウズネの骨を脛骨と云ひ之を髀とも云ふ）。跗は足面なり（足の甲）。

既に氣衝穴の中に相合し乃ち伏兔後の横紋の髀關を下り膝上の起肉伏兔の處に至る。陰市梁丘の二穴を歴て膝膕の中に入り、犢鼻を経て脣の外廉なる三里巨虛上廉條口巨虛下廉豐隆解谿の六穴を循り、足跗の衝陽陷谷の二穴を上り大指の次指の外間の内庭穴に入り厲兌穴に至て終る。

其支なる者は膝を下ること三寸なる三里穴より別れ下て大指の次指の外間に入る。

此支流は膝下三寸なる三里穴より別れ行つて、上下廉の外なる豐隆穴を循り大指の次指の外間に入り、前の内庭厲兌の本流と相合す。

其支なる者は跗上に別れ大指と次指との間に入り其大指の端に出で足太陰脾經と相合す。

此支は跗上の衝陽より別行して足大指の内間穴に入り、斜に足厥陰肝經の行間穴の外に出で、大指の下を循り其大指の端の爪甲角の内側なる隱白穴に出でて足太陰脾經に交て終る。

承泣 目下の七分にあり、瞳子に直る（瞳子はヒトミ、烏睛はクロマナコ）。眼を正視せしめて瞳子の直下七分にあり即ち目下の半月形なる骨の上廉に付す。

四白 目下一寸直瞳子にあり（承泣の下三分）。

巨膠 鼻孔の旁を去ること八分の直瞳子にあり。

地倉 兩口吻の旁即ち唇の赤肉を去ること各四分の處にて動脈ある中なり。

大迎 曲頰即ち曲頰の廉より前なる頰の方へ去ること一寸三分、頰を鼓いて見れば骨陷があつて脈動する中である。

頰車 耳下の少し前にて曲頰の端なる陷中なり（口を開けば空孔がある）。

下關 客主人穴の下なる耳前の動脈の下廉にあり、口を合せば空孔があり口を開けば則ち閉づ（目の外眥とハ、エサガリ、の髮際との中間が膽經の客主人穴である、客主人の下に横れる骨がある、其骨の下廉に下關穴を付す）。

頭維 頰角の髮際にして本神穴の旁より一寸五分、神庭穴の旁より四寸五分にあり。

人迎 頸の大動脈の手に應ずる處なり。結喉を挾んで兩旁に一寸五分（結喉は乃ち喉嚨、頰下に高く尖れる骨なり俗に骨佛と云ふ、此處の動脈は診病に大切なる所である）。

水突 頸の大筋の内にて直に人迎穴の下と氣舍穴の上との中間にあり。

氣舍 頸の直に人迎水突の下なる大筋の内、筋を越えて外、天突穴を挾むこと各七八分許り、天突穴の少し上なる陷中。

缺盆 肩下にして膺上の横骨の上廉なる骨解せる陷中にあり。

氣戸 巨骨の下にて兪府の旁二寸にあり。

庫房 氣戸穴の下一寸六分陷中にあり、仰いで之を取る（以下乳根に至る迄の諸穴は皆中行任脈を去ること各四寸にあり、仰げば肋骨が現はれて穴を取るに易し）。

屋翳 庫房穴の下一寸六分陷中にて仰いで之を取る。

膺窓 屋翳穴の下一寸六分陷中。

乳中 乳の中に當る。

乳根 乳下一寸六分陷中にあり、仰いで之を取る（虛里の動とは此處の動脈を云ふ）。